

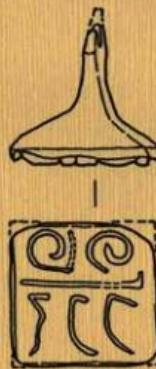
中国電力・北松江変電所  
造成予定地内発掘調査報告書



文化財愛護  
シンボルマーク

薦 沢 A 遺 跡  
薦 沢 B 遺 跡  
別 所 遺 跡

(本文編)



1988年3月

松江市教育委員会

島根県八束郡美保町大字下宇部尾872-4

美保町立中央公民館  
電話(0852) 2-3624



SB02掘立住居全景



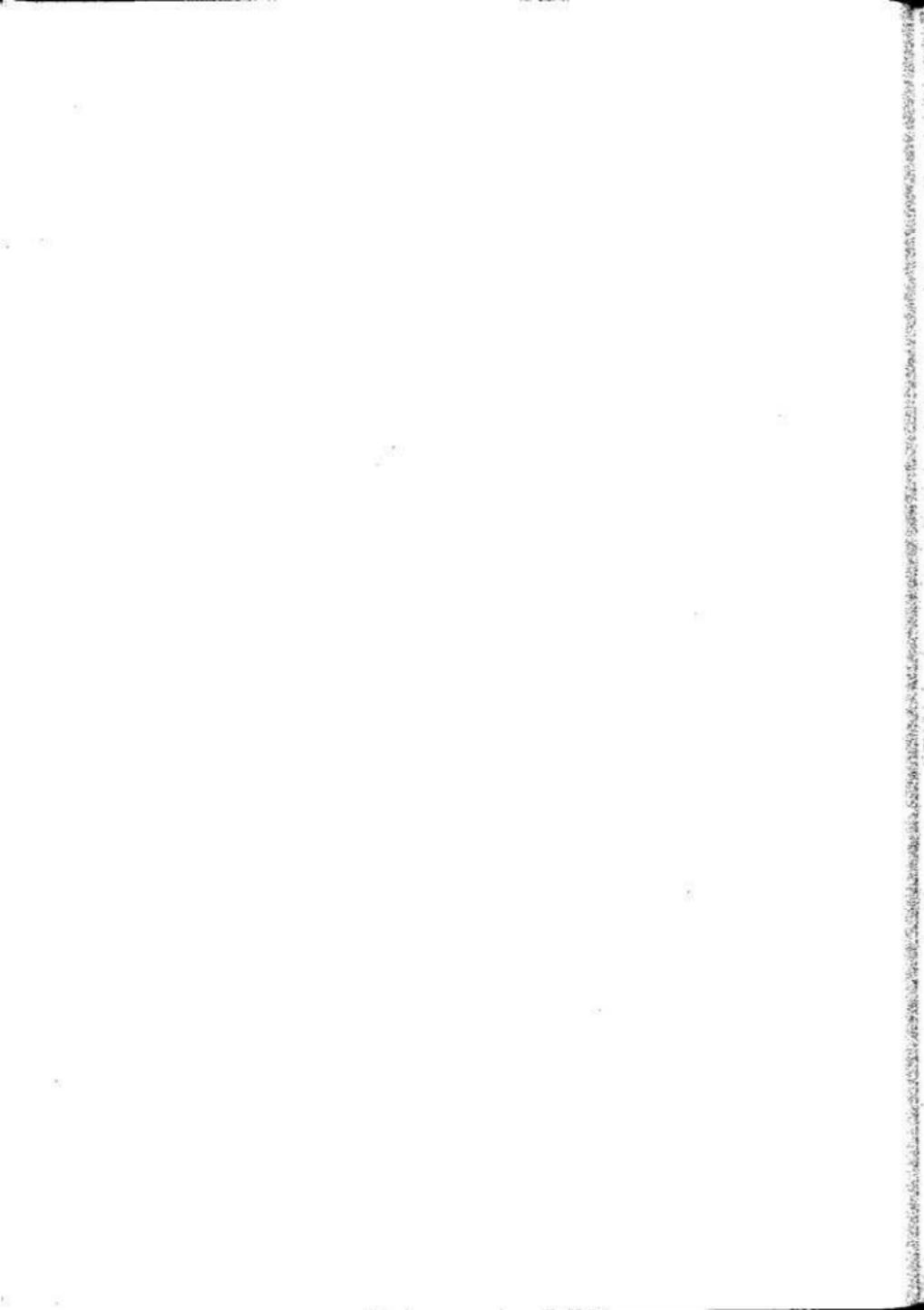
別所遺跡出土土馬

## 序 文

さきに中国電力株式会社が松江市内大井・朝駒両町地内に北変電所の建築を計画され、松江市教委に文化財の調査を依頼された。事業規模は大きく、同時に出雲国風土記に載っている窯跡群に近接していると思料されたので、市教委は埋蔵文化財調査の大半のちからをここに投入し、緊張した態勢で取り組んできた。幸いに地元関係者各位をはじめ中電、他の事業の当事者などなどの理解協力をいただいて、昭和57年度から59年度まで3年間にわたって現地調査を行い、60年度から62年度にかけて多数の遺物整理作業を実施することができた。埋蔵文化財の発掘調査と地域の開発とはもともと異なる目的価値をもっているので、その調和両立はとうてい原則論で実現し得るものではなくて、当事者による懸命の努力と善い意思を確認し合っての、申してみれば364日のたたかい(努力)の結果に成るであろう。薬沢A遺跡他発掘調査においては古墳時代後期より奈良期に至る間の、堅穴住居跡・掘立柱建物跡を検出したほか、須恵器や中世土器が多く出土し、大井須恵器窯跡群との関連が注目されるところである。このレポートをまとめるに当たって前記の関係者各位ならびに終始御指導御支援をたまわった諸先生に、衷心より敬意と謝意を申しのべる次第である。

松江市教育委員会

教育長 内 田 荣



## 凡　例

本書は松江市教育委員会が中国電力株式会社島根支店の委託を受け、昭和57年度に試掘調査、昭和58年・59年度において発掘調査を実施した北松江変電所新設工事予定地域内埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告書である。

発掘調査の組織は下記のとおりである。

委託者　中国電力株式会社島根支社

取締役支店長　佐藤紀代士（58年5月まで）

〃　河合　正美（60年5月まで）

〃　石原　寿男（62年5月まで）

〃　北本　宏樹（62年6月から）

受託者　松　江　市

代表者　松江市長　中村芳二郎

主体者　松江市教育委員会教育長　内田　榮

事務局　松江市教育委員会社会教育課

課　長　石飛　進（59年3月まで）

〃　野津　久夫（59年4月から）

文化係長　中西　宏次（58年10月まで）

〃　岡崎雄二郎（58年11月から）

文化係主事　加藤　睦（58年10月まで）

〃　中尾　秀信

社会教育係主事　菅井　純子（58年11月から）

担当者　57年度試掘調査　岡崎（57年4月12日～57年5月15日）

58年度調査　鷹沢A遺跡　中尾（58年8月17日～58年12月24日）

鷹沢B遺跡　岡崎（58年8月22日～58年12月24日）

59年度調査　鷹沢A遺跡　錦織（59年5月14日～59年11月16日）

鷹沢B遺跡　中尾（59年11月21日～60年2月6日）

別所遺跡　萩（59年7月24日～60年5月5日）

調査員　岡崎雄二郎（係長）　中尾秀信（主事）　達藤浩己（調査員）　秦　誠司（調査員）

錦織慶樹（嘱託員）　萩　雅人（嘱託員）　今岡一三（嘱託員）

瀬古諒子（臨時職員）　昌子寛光（松江女子高校教諭）　佐々木稔（調査補助員）

発掘調査に際しては、中国電力株式会社鳥根支店用地担当課の方々の多大な御協力を得た。記して感謝の意を表する次第であります。

検出遺構及び出土遺物の性格については、山本清（鳥根大学名誉教授）、東森市良（安米高校教諭）、松本岩雄・内田律夫・西尾克己・三宅博士（県文化課）、坪井清足（当時所長）奈良国立文化財研究所、町田章（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長）、狩野久（奈良国立文化財研究所、飛鳥、藤原宮遺跡調査部長）、金子裕之（奈良国立文化財研究所）、猪熊兼勝（飛鳥資料館）、泉森皎（奈良県立橿原考古学研究所調査課長）、木内武男、小田富士雄（北九州市立考古博物館館長）、柳沢一男（福岡市埋蔵文化財センター）、中村徹也（山口県埋蔵文化財センター）、福光幸雄・是光吉基・加藤光臣（広島県埋蔵文化財調査センター）、向田裕始（東広島市教育委員会）、篠原芳秀（広島県草戸市千軒町遺跡調査研究所）、間壁忠彦（倉敷考古館館長）、福田正雄・岡田博（岡山県古代吉備文化センター）、種定淳介（兵庫県教育委員会）、田嶋明人・小嶋芳孝（石川県立埋蔵文化財センター）、出越茂和（金沢市教育委員会）の諸氏から有益なる指導を得た。記して感謝の意を表する次第である。

出土遺物及び図面の整理は、岡崎雄二郎、錦織櫻樹、今岡一三、萩雅入、飯塚康行、大國真二、青木博、野津修、瀬古諒子、渡部美枝、安藤美知枝、小村明子、安部綾子、松浦徳子、野津明子、三島幹子が行なった。

本書の編集は、岡崎、錦織、萩、今岡、瀬古、飯塚が協議してすすめた。

本書の執筆分担は、I 発掘調査に至る経緯（岡崎）、II 位置と歴史的環境（錦織）、III 薩摩A遺跡（錦織、今岡）、IV 薩摩B遺跡（今岡）、V 別所遺跡（萩、瀬古、岡崎、飯塚）、VI 遺物の検討の内1須恵器について（今岡）、2土馬について（錦織）、VII 総括（岡崎）が行なった。尚、薩摩A遺跡、別所遺跡については分担をそれぞれの文末に記した。

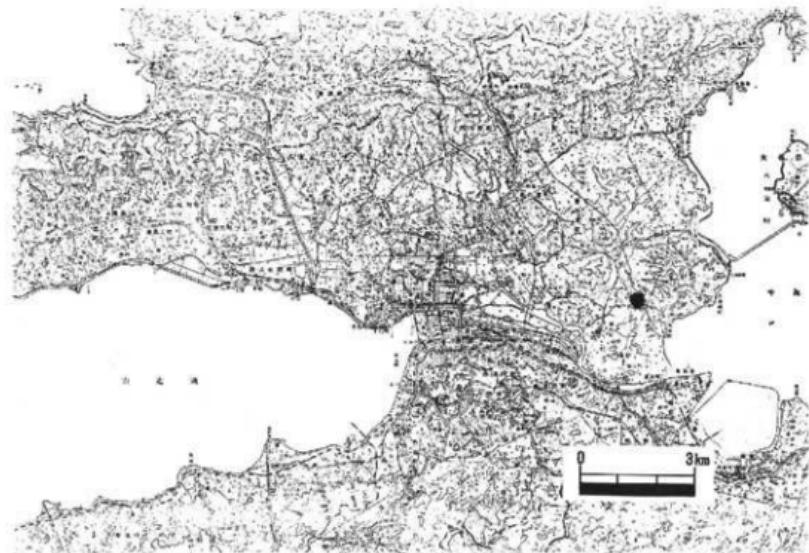
## 目 次

I	発掘調査に至る経緯	1
II	位置と歴史的環境	4
III	薺沢A遺跡	11
1.	昭和57年度の発掘調査	11
2.	昭和58年度の調査	14
3.	昭和59年度の調査	14
4.	遺構の概要	16
5.	その他の調査区	37
6.	その他の遺物	39
7.	小結	58
IV	薺沢B遺跡	59
1.	調査の経過	59
2.	調査の概要	60
3.	小結	67
V	別所遺跡	69
1.	調査に至る経緯	71
2.	調査の概要	71
3.	各調査区の概要	71
4.	その他の遺物	129
5.	小結	143
VI	出土遺物の検討	147
1.	須恵器について	147
(1)	はじめに	147
(2)	蓋環の形態分類	147

(3) 編年的位置	152
(4) 外面調整について	152
(5) 須恵質の瓶について	153
(6) 小結	154
2. 土馬について	157
(1) 出雲の土馬とその形態	157
(2) 古代祭祀と土馬	163
(3) 小結	166
VII 総 括	185
VIII 遺物観察表	187



第1図 位 置 図



第2図 萬沢遺跡他位置図



## I. 発掘調査に至る経緯

昭和56年、中国電力株式会社島根支店では、市内大井町、朝鈴町地内において北松江変電所及び特別高圧送電線の新設工事を計画した。

これは、島根県東部地区の電力需要増加に対応するため増設した島根原子力発電所2号機からの発生電力の受電と併せて当地方の電力輸送系統を整備拡充するためである。

新しい変電所は、山林、田畠を造成して10万m<sup>2</sup>余りの敷地を確保し、鉄筋コンクリート造2階建の本館他、50万ボルトの主要変圧器及び送電線引出設備を設置するものである。

事前に協議を受けた市教委では、埋蔵文化財の分布調査が必要であると思われたので、昭和56年12月1日付で用地担当課長小西壽名で依頼を受けたことにより、同年12月24日、岡崎（当時、社会教育課文化係主事）が用地担当副専門役水岡昌夫及び用地担当の杉原弘俊助氏の立会いを得て分布調査を実施した。

その結果、山地は比較的急峻な斜面が多く古墳の分布密度は低い。しかし、谷間水田及びゆるい斜面に形成された畑地においては所々に須恵器片の散布が見られ、住居址の可能性があった。確認された遺跡は、周知の遺跡3カ所と新たに発見された遺跡7カ所の計10カ所である（別表参照）。

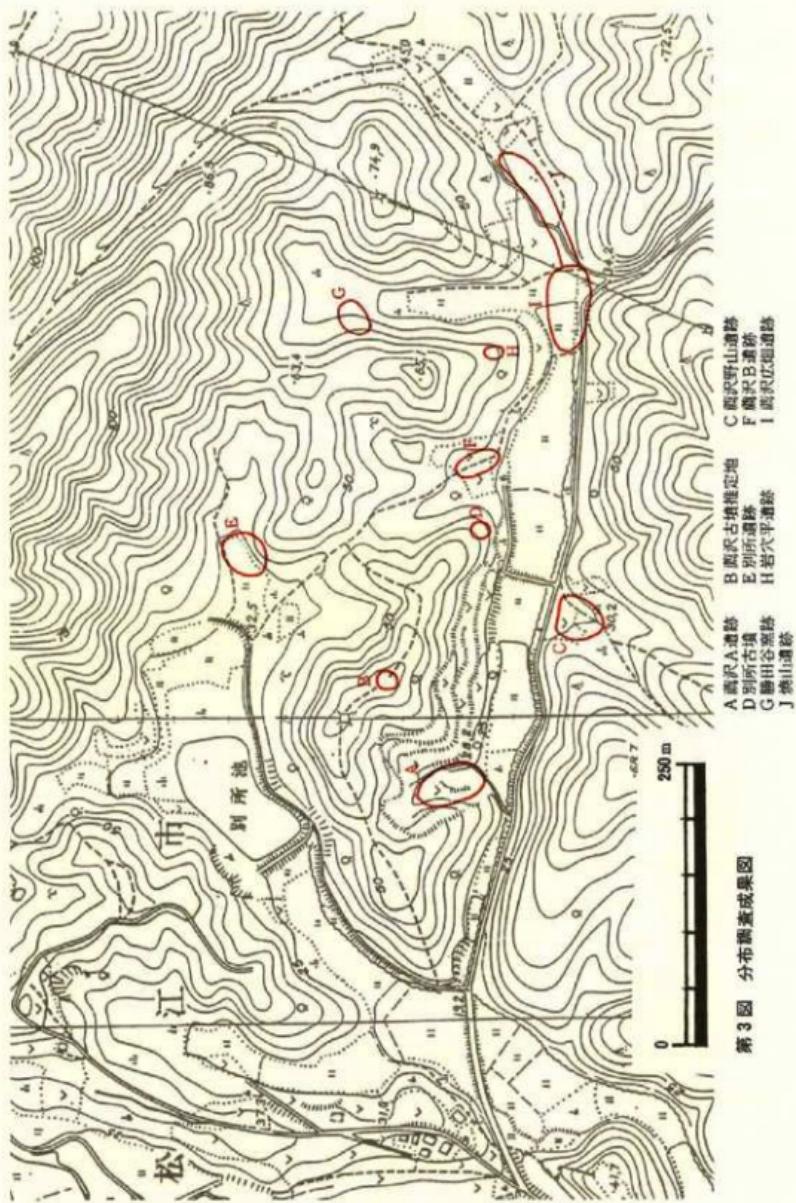
この内、別所古墳は直径10mほどの円墳で中央に小規模の横穴式石室が開口している。又、G～Jまでの遺跡は、須恵器窯跡等古代窯業に関係する生産遺跡であり注目される。

そこでD別所古墳とG～Jの生産関係遺跡については、現状保存を中電側に要請することになった。

分布調査の結果については、昭和57年1月6日付、松教社第621号をもって回答したこの結果にもとづいて、昭和57年1月13日に中電側と県教委文化課担当者のト部主事をはじめ協議会を開催したが、その席上で再度D、G～Jの遺跡の現状保存を要請した。

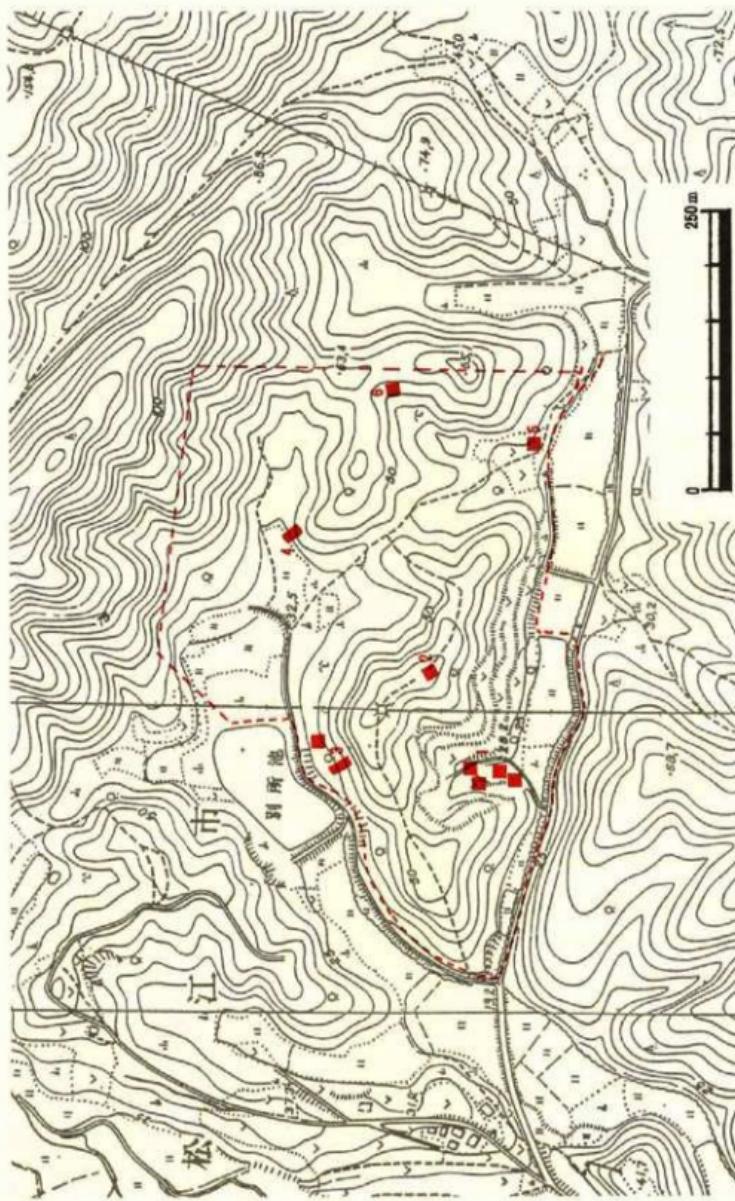
その結果、これらの遺跡は現状保存が図されることになり、工事区域から除外されることになった。しかしながら予定地区内にはなお3カ所の遺物散布地があり、県教委の指摘された2カ所を含めた5カ所については、まず試掘調査を実施し、遺跡の規模と範囲を確認することになった。

この第1次調査は、昭和57年3月5日付で依頼を受けたことにより昭和57年4月12日から同年5月15日までの内、計22日間を要して実施した。



1. 開墾人遺跡
2. 蘭於古墳遺跡
3. 朝倉別所遺跡
4. 別所遺跡
5. 蘭於B遺跡
6. 大井別所遺跡

第4圖 第1次調查施所圖



## II. 位置と歴史的環境

本遺跡群は、鷺沢A遺跡、鷺沢B遺跡、別所遺跡の3箇所の遺跡からなり、市街地中心から直線距離で東へ約6kmほどの山間部谷間及び山林斜面に立地する。

本遺跡群周辺の遺跡について概観してみると、1鷺沢A遺跡の所在する谷間は茶畠で、点々と須恵器の散布が認められ、2鷺沢B遺跡の所在する谷間水田も同様に須恵器が散布している。またB遺跡の西側の山林斜面には石棺式石室が開口してわずかに埴丘盛土の遺存する4別所古墳があり、東側山林斜面には窯跡の灰原らしいものや、それに附属すると思われる住居跡らしきものが検出された7岩穴平遺跡や、岩穴平遺跡の東側に隣接する北に長い谷間水田で、広範囲に遺物の散布する9焼山遺跡などがある。また鷺沢A、B両遺跡の南側で谷を離てた山林斜面には6鷺沢野山遺跡があり、須恵、土師器片が散布する。

別所遺跡付近では5勝田谷窯跡があり、谷の西斜面に須恵器片が散布している他、窯壁塊が認められる。遺物は山陰Ⅳ期～糸切底の段階までである。

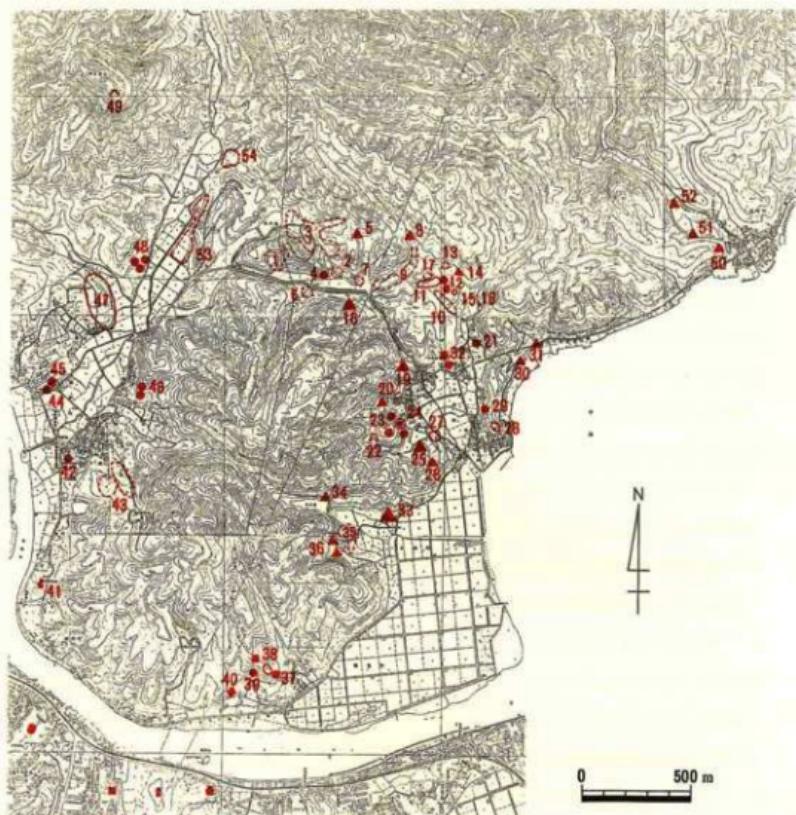
8は焼山遺跡の奥で勝田谷窯跡の西隣りの谷斜面に所在する明曾窯跡で、川筋に灰原が露出している。ここも遺物は勝田谷窯跡とほぼ同時期のものが出土している。

このように鷺沢A、B、別所遺跡周辺には、窯跡もしくはそれに関係すると思われる遺跡や集落と推定されるものが多く所在し、本遺跡となんらかの関係を持っていたと思われる。また古墳は別所古墳1基が確認されているにすぎない。

次に大井、朝釣地区の遺跡について概観してみる。まず古墳は46基以上の古墳の存在が確認され、その中で石棺式石室を内部主体とするものは、並流のものを含めて7基あり、その時期はおおむね山本清編年のⅢ～Ⅳ期頃である。以下石棺式石室を内部主体にもつ古墳を列挙する。

23大井古墳群中で、東森論文で1号墳とされたものは直径6m、高さ1.5mの円墳状で、玄室は幅1.9m、奥行1.2～1.3m、高さ0.9mを測る。また4号墳とされたものは径6m、高さは北東側が2.4m、南西側が0.7mで、人骨は再埋葬してある。須恵器の甕片多數、耳輪1、青めのう製勾玉1が出土。主体部は並流の石棺式石室で、玄室は幅1.75m、奥行0.97～1.2m、高さは1.23mを測る。

42朝釣岩屋古墳は円墳とされるが不明確である。墳丘規模は別表の通りである。内部主体の石棺式石室は凝灰岩の切石造りの平入り家形で羨道部の入口幅は1.2m、長さ2.8m、高さ1.4m、玄室の幅3.15m、奥行2m、入口幅0.7m、高さ2.1mを測る。石棺式石室の規模としては大型の部類に属し、玄室の内壁に朱彩が施されている。



第5図 周辺の遺跡分布図

他に37阿弥陀寺古墳、45朝酌小学校校庭古墳、46朝酌上神社跡古墳、48九日宮古墳群があるが、これらの概要については別表の通りである。

他に古墳は箱式石棺、石柳、横穴式石室をもつ古墳がある。11イガラビ古墳群中1号墳は本古墳群の所在する丘陵の先端にある。1辺約8mの方墳で、墳丘中央に小規模な横穴式石室を有する。墳丘は丘陵斜面を方形に掘削して盛上げたいわゆる山よせの古墳で、周濠の内側には外護列石が巡っていた。墳丘の高さは前底部から天井石上面まで約2m、周濠は前底部を除く3方に巡り、幅最大2.2m、深さ最大0.6mを測る。石室の中軸線は、N 7.5°Wであった。

遺物は7世紀前半から後半にかけてのものが出土している。

2号墳は1号墳の東側に隣接する方墳で、1辺約7m、高さは前庭部床面から天井石上面まで2mある。1号墳と同じく丘陵斜面を掘削して墳丘を構築する。周濠は前庭部以外の3方に巡り、幅2.0m、深さ0.8mを測る。周濠の内側には外護列石を配している。墳丘中央の横穴式石室は羨道部の幅0.9m、長さ1.5m、床面には6枚の石を敷く。石室の中軸線はN 17.5°Wである。遺物はおむね7世紀代のものが出土している。

3号墳は、イガラビ2号墳の南約9mに位置する。本古墳は山道をつくる時に削平されていたが、残存する墳丘面と周溝によると墳丘プランは略方形で4×4.6mを測る。高さは墳丘基底部より現存高0.9mを測る。高い側の斜面を削り取り、低い側を埋めて墳丘基底部としている。周溝は幅1.5m、深さ0.6mを測る。周溝の内側には外護列石が巡る。本古墳の主体部は南々西に開口する小規模の横穴式石室で、中軸線はN 22.5°Wをとる。遺物は7世紀後半のものから8世紀以降のものが出土している。

27山巻古墳は石棺部分だけが遺存していた。従って墳形、墳丘規模は不明だが、内部土体は幅95cm、長さ2.4mの組合せ石棺で、38点の須恵器喪片、蓋坏、刀子、鉄鎌、金環を出土した。須恵器は山陰Ⅲ期のものである。

38阿弥陀寺後山古墳群は5基からなり、1～4号墳までの小古墳が連なる。いずれも1辺7～8m、高さ0.5～1.0mを測る。5号墳は4号墳からさらに尾根を約50m上った所に所在し、1辺18m、高さ2mの中規模方墳で、南部におよそ8mの小高い平坦面を有す。

41魚見塚古墳は全長62mの大型前方後円墳で、その築造年代はほぼ5世紀代と推定されている。この古墳は時期的に他の遺跡より古く、全体の中で関係づけることは困難であるが、南岸の大型古墳の分布情況と共に考えるなら、古墳時代中期において大橋川流域が交通上、軍事上の要衝として重要視されていた事を推定させる。

47酒原古墳群は10基以上の古墳からなり、1号墳は1辺10m、高さ1.5mの方墳で、横口式石棺の前方に羨道部を付けたとでもいうべきもので、縦長プランで長さ1.61m、幅74cm、高さ66cmを測る。7世紀後半頃の築造といわれる。2号墳は箱式石棺のみを遺存し、人骨、須恵器、刀2～3本が発見された。

他に12池ノ奥古墳群、22大井横穴群、28イズキ山古墳群、40明事山古墳があるが、概要是別表の通りである。

#### <窯跡>

次に窯跡について見てみよう。

窯跡は最近の分布調査では、推定地を含めて17カ所が知られるようになったほか、昭和

62年度の松江市の調査で池ノ奥窯跡群で3基の穴窯が確認され、調査されるなど新しい資料が増加しつつある。

25廻谷窯跡は、大井集落南西部の北向き山裾に3基が5～10m間隔で並び、山陰Ⅰ期の蓋坏、壺、甕の破片が採集された大井地X最古の窯跡である。以下時期的に古いと思われる順に概略を記しておく。

20寺尾窯跡は、大井集落の西側山裾、廻谷窯跡より400m北に位置する。山陰Ⅲ～IV期の遺物が採集されたが、Ⅲ期のものが多い。

31ジャパン窯跡は、大井集落の東側で中海のそばに位置し、寺尾窯跡とは約700mを隔てている。採集された遺物は山陰Ⅲ期のものである。

寺尾、ジャパン窯跡と並行する時期の古墳に28山巻古墳と29イズキ山古墳群があり、注目されるところである。

19井ノ奥窯跡推定地は大井集落の最奥北部に所在し、山陰Ⅲ～IV期の遺物が採集されている。

35岩沙窯跡は、大井集落から南に離れた谷奥に位置し、井ノ奥窯跡とは約700mを隔てている。4基が確認され遺物はおおむね山陰Ⅲ～IV期のものが多い。井ノ奥窯跡推定地と、岩沙窯跡はほぼ同時期の営窯と思われるが、これらの窯跡と並行する古墳は、11イガラビ古墳群や池ノ奥古墳群が時期的に近いと思われる。また萬沢A遺跡もほぼ同時に存在した集落だと思われるが、近くに同時期の窯跡の存在は知られておらず、今後の分布調査の成果に委ねたい。

14池ノ奥古墳群は、大井集落から北の谷間に入り込んだ山林斜面に位置し、3基が確認され調査された。山陰Ⅳ期～糸切底の段階までの須恵器が出土している。

31山津窯跡は、大井集落の東に位置し、中海沿いの県道工事中に発見された。山陰Ⅲ期～奈良期までの須恵器が出土している。

33ババタケ窯跡は大井集落から南西部へ離れた山林斜面に所在し、池ノ奥窯跡からは約1.1km、山津窯跡からは約1kmを隔てている。山陰Ⅲ期～奈良期までの遺物や土馬が採集された。

36蛇貫谷窯跡は、ババタケ窯跡の南西300mの山林斜面に所在し、ババタケ窯跡とはほぼ向合った位置をとる。畑地に須恵器が大量に散布しているが、時期は山陰Ⅲ期～奈良期までのものである。円面鏡、焼き台、銷甕、平瓦なども採集されている。

14、31、33、36の窯跡はいずれも山陰Ⅲ期～奈良期までの営窯であると思われるが、位置的にそれぞれかなり距離があり、複数の工人集団の可能性を考えることができる。

5 勝田谷窯跡は、大井集落をぬけて北へ入った谷間斜面に所在し山陰IV期～系切底までの遺物が採集されている。

6 明曾谷窯跡は、勝田谷窯跡の東200mを隔てた谷の奥斜面に所在し、山陰IV期以降の遺物が採集されている。

以上見てきた窯跡はその宮窯期間が山陰I期～9世紀代までである。山陰I期の廻谷窯跡以外は時期に幅があり、重複するものがかなりある。またそれらが距離も隔たっているので複数の工人集団の存在が考えられるのではないか。そしてその工人集団の分化は須恵器の生産技術が向上し、需要と共に供給の増加した山陰III期頃から顕著に起った現象であると考えられる。しかしいずれにしても、この大井地区が5世紀末もしくは6世紀前半から須恵器の生産と供給という一役を担うことにより、政治的、経済的基盤を確立し、奈良、平安期に至るまで、日常生活の什器あるいは墳墓の副葬品や官衙の供給品として須恵器を生産してきたことは疑う余地のないところである。

そしてまたこのような大量の土器を生産、供給する集団の上にはそれを掌握する有力豪族の存在したこと伺い知ることができる。

(錦織慶樹)

#### 参考文献

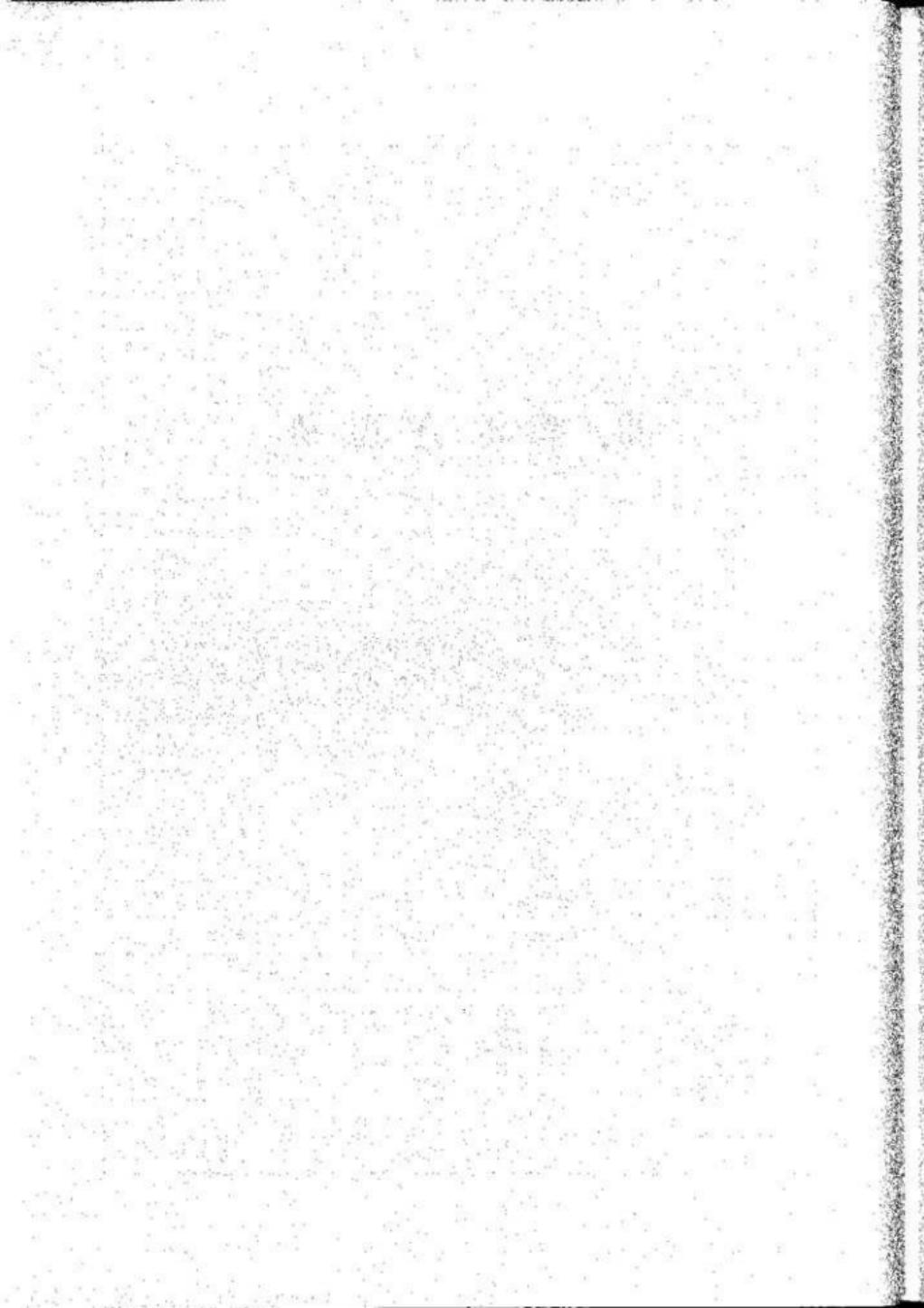
- 山本 清『山陰占墳文化の研究』(山本清先生退官記念論集刊行会 1971年)
- 東森市良「嘲酌の古墳文化」(『松江市立女子高等学校研究紀要』第1号 1970年)
- 松江市教育委員会『鷹沢A遺跡他発掘調査概報』(1984年)
- 鳥根県教育委員会『鳥根県埋蔵文化財調査報告書』第2集(1987年)
- 鳥根県教育委員会『鳥根県生産遺跡分布調査報告書Ⅱ窯業関係遺跡』(1985年、3月)
- 松江市教育委員会『岩穴平遺跡、福葉城跡』(1981年)

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	名 称	種 類	所 在 地	概 要	備 考	参考文献
1	鷹沢 A 遺跡	集 落 跡	大井町1118及び 1124	堅穴6、掘立住居8、須恵器 ～奈良	消 滅	
2	“ B “ 遺物包含地		大井町 1064	焼土造構	“	
3	別 所 遺 跡	遺物散布地	朝霧町 555	堅穴住居、掘立住居、須恵器 ～平安	“	
4	別 所 古 墳	古 墓	大井町別所	円墳状 直径 7 m、高さ 1 m, 簡略横長の石室	石棺式石室 奥半分残存	
5	勝 田 谷 遺 跡	窯 跡	“ 勝田谷	IV期～系切底	現 存	
6	鷹沢野山 遺 跡	遺物散布地	“ 鷹沢野山	須恵器	“	
7	岩 穴 平 遺 跡	窯 跡	“ 岩穴平	灰原、住居跡、須恵器Ⅲ期末～ IV系切	消 滅	
8	明 曾 窯 跡	“	“ 明曾	灰原、須恵器IV期～	現 存	
9	燒 山 遺 跡	遺物散布地	“ 燒山	広範囲に土器跡、須恵器	“	
10	イガラビ 遺 跡	“	“ イガラビ	焼土ピット、柱穴	消 滅	
11	“ 古 墳 群	古 墳 7 基	“ “	横穴式石室3、組合せ4	“	
12	池ノ奥古墳群	古 墳 2 基	“ 池ノ奥	横穴式石室2	“	
13	“ A 遺 跡	散 布 地	“ “	Ⅲ期～	“	
14	“ 窯 跡	窯 跡	“ “	Ⅲ期～ <sup>3</sup> 基礎認 系切	“	
15	“ C 遺 跡	散 布 地	“ “	IV期～ 系切	“	
16	“ D 遺 跡	“	“ “	“	“	
17	鷹沢野山 遺 跡	“	“ 野山	“	現 存	
18	鷹沢窯跡推定地	窯 跡	“ 鷹沢		“	
19	井ノ裏窯跡地	“	“ 井ノ裏	須恵器Ⅲ～IV期	“	
20	寺 尾 窯 跡	“	“ 寺尾	窯壁跡、須恵器Ⅱ～IV	“	
21	大 谷 遺 跡	遺物散布地	“ 大谷	須恵器	“	
22	大 井 横 穴 群	横 穴	“	13穴以上	“	
23	大 井 古 墳 群	古 墓 群	“	古墳3基以上、横穴数穴	“	
24	大 井 土 馬 駒 遺 跡	散 布 地	“	土馬	所在 不明	
25	廻 谷 窯 跡	窯 跡	“ 廻谷	窯3基、須恵器I～II期（大井 地区最古）	現 存	
26	山 卷 窯 跡	“	“ 山卷	須恵器	“	
27	山 卷 古 墳	古 墓	“ “	箱式石棺、大量の須恵器、須恵器 Ⅲ期	“	

番号	名 称	種 類	所 在 地	概 要	備 考	参考文献
28	イズキ山古墳群	古 墓 群	大井町イズキ山	5基、横穴式石室、組合わせ 石棺、須恵Ⅲ期	現 存	
29	イズキ山古墳	古 墓	" "	横穴式石室	開墾破壊	
30	ジャパン窯跡	窯 跡	" ジャパン	須恵Ⅲ期	現 存	
31	山津 窯跡	"	" 山津	灰原、窯業地、須恵Ⅲ期～奈良	"	
32	大井神社境内遺跡	散 布 地	"	須恵器	"	
33	ババタケ窯跡	窯 跡	" ババタケ	須恵Ⅲ～奈良期、土馬	溜池、灰原 は水面下	
34	岩沙 窯跡	"	" 岩沙	4基、須恵Ⅲ期～IV期	現 存	
35	岩沙 遺跡	散 布 地	" "	須恵器、土師器、陶器	"	
36	蛇貫谷窯跡	窯 跡	" 蛇貫谷	大量の須恵器、Ⅲ～奈良期	"	
37	阿弥陀寺古墳	古 墓	福富町阿弥陀寺	石棺式石室、玄室幅1.5m、 奥行1.7m	墳丘消滅	
38	阿弥陀寺古墳群	古 墓 群	" "	5基、1号墳～4号墳一辺 7～8m、高さ0.5～1m	現 存	
39	福富神社境内遺跡	散 布 地	"		"	
40	明事山古墳	古 墓	" 明事山	方墳、一辺10m、高さ1.5m	"	
41	魚貝塚古墳	"	朝鈴町魚貝塚	前方後円墳、全長62m、築造 推定5世紀	未 発掘	
42	朝鈴岩尾古墳	"	"	規模18m、高さ6m 石棺式石室(凹墳か?)	"	
43	朝鈴散布地	散 布 地	"	須恵器	現 存	
44	朝鈴小学校前古墳	古 墓	"	横穴式石室、刀、石材は朝鈴 公民館保有	墳丘消滅	
45	朝鈴小学校校庭古墳	"	"	石棺式石室、石床、玄室幅 2.05m、奥行1.2m、高さ1.4m	墳丘消失	
46	朝鈴上神社跡	"	"	2基、円墳? 横穴式石室	現 存	
47	越原占墳群	"	" 越原	10基以上、人骨、須恵器 刀、1号墳は7世紀後半	現存 6 基	
48	九日宮古墳群	"	" 九日宮	3基、石棺式石室	現 存	
49	和久羅山城跡	城 跡	"	山城	"	
50	唐干窯跡	窯 跡	大海崎町唐干	窯壁断面、須恵器	"	
51	木の谷窯跡	"	" 木ノ谷	須恵器(推定地)	"	
52	古屋敷窯跡	"	" 古屋敷	" ( " )	"	
53	たたら殿製鐵址	たたら田	朝鈴町たたら田	鉄津、須恵器	"	
54	荒神谷遺跡		" 荒神谷	須恵器		

### III. 薦沢 A 遺跡



### III. 薙沢 A 遺跡

#### 1. 昭和57年度の試掘調査

谷間の中程に  $4 \times 4$  m のグリッド（調査区）を 2 カ所、出口付近に 2 カ所、計 4 カ所を設定した（第 6 図）。

遺物はそれぞれの調査区からコンテナ ( $55 \times 40 \times 25$  cm) 計 6 箱出土したが、その内図化できるものは 33 あった。

##### <第 1 区> (図版 23, 124, 125)

表土から最下層まで 4 層に分かれ、深さ 1.5 m を測る。第 1 層は厚み 40 cm の明褐色土で、昭和 46 年、車機によって畑を造成した際の埋土であり、4 つのグリッド何れにも堆積していた。

第 3 層は厚み 30 ~ 60 cm の褐色砂質土で、昭和 46 年以前には畑地にしていた旧耕作土である。上部に厚み 10 cm 程の暗褐色層を有する。須恵器片、土師器片を多量に出土した。図版 1 ~ 10 の遺物が、この層出土の土器である。

第 4 層は地山の黄色～白色の小塊をしもふり状に多く含む褐色土で硬い。上層では須恵器、土師器片を含むが、下層では小礫、転石を含むようになり、遺物も殆ど含まない。炭化物や加熱を受けた小砾もある。11 ~ 16 の遺物がこの層出土の土器である。

第 4 層は黒褐色の粘性土で、遺物は含まない自然堆積土である。

##### <第 2 区>

表土から最下層まで 7 層に分かれ、深さ 1.5 ~ 1.9 m を測る。

第 1 層は車機による埋土。出土遺物で図化できたものは 17 がある。

第 2 層は暗褐色粘質土で、転石を多く含む。出土遺物は 18。

第 3 層は褐色砂質土で、遺物は少ないが、鍍金環 41 (第 33 図、図版 128) の出土が注意される。他に図化できたのは 20, 21。

第 4 層は暗褐色砂質土で、白色の小塊をしもふり状に含む。出土遺物の中で図化できたものは、22 ~ 26 があるが、他に土馬が 2 体分出土している。

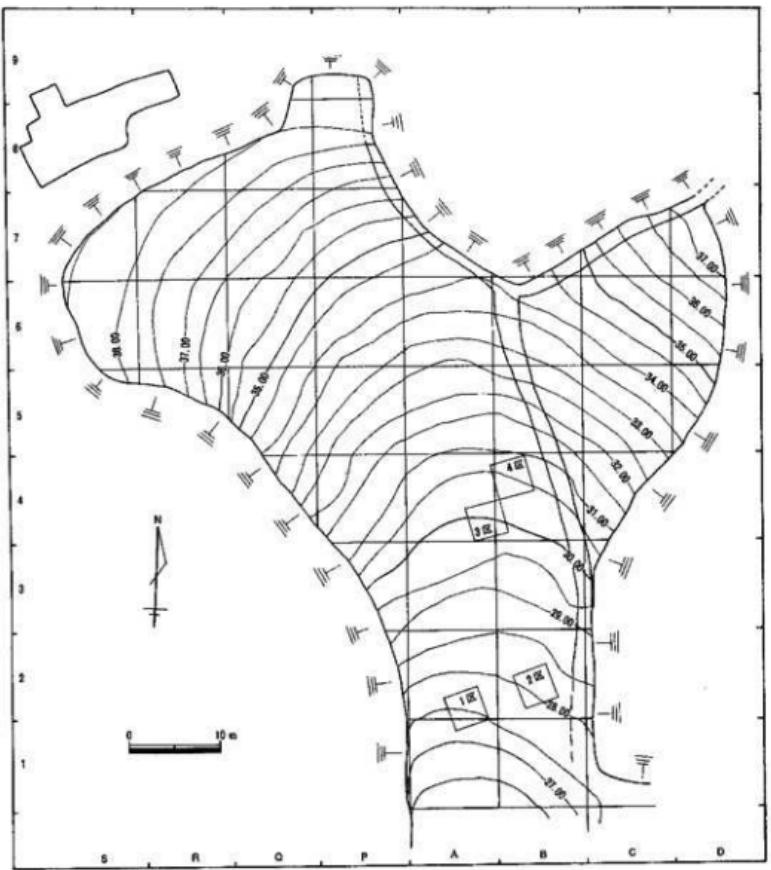
第 5 層は黒褐色砂質土で遺物を含まない。

##### <第 3 区>

表土から最下層まで 5 層に分かれ、深さ 2.0 m を測る。

第 1 層は車機による埋土。

第 2 層は黒褐色土で、旧耕作土である。調査区の全面にわたり遺物が発見された。須恵



第6図 調査区設定図

器では高台付环身、輪状つまみ付きの蓋、大甌の破片。土師甌では甌片、甌把手などで、転石も散在していた。中世陶器片もあった。

第3層はやや硬い褐色砂質土で、山土遺物の内岡化できたのが1つあった。27。

第4層は粒子の荒い褐色～暗褐色の砂質土層で、炭化物や小礫を混じえる。

第5層は褐色粘質土で、遺物を全く含まない。

<第4区>

表土から最下層まで4層に分かれ、深さ1.9mを測る。

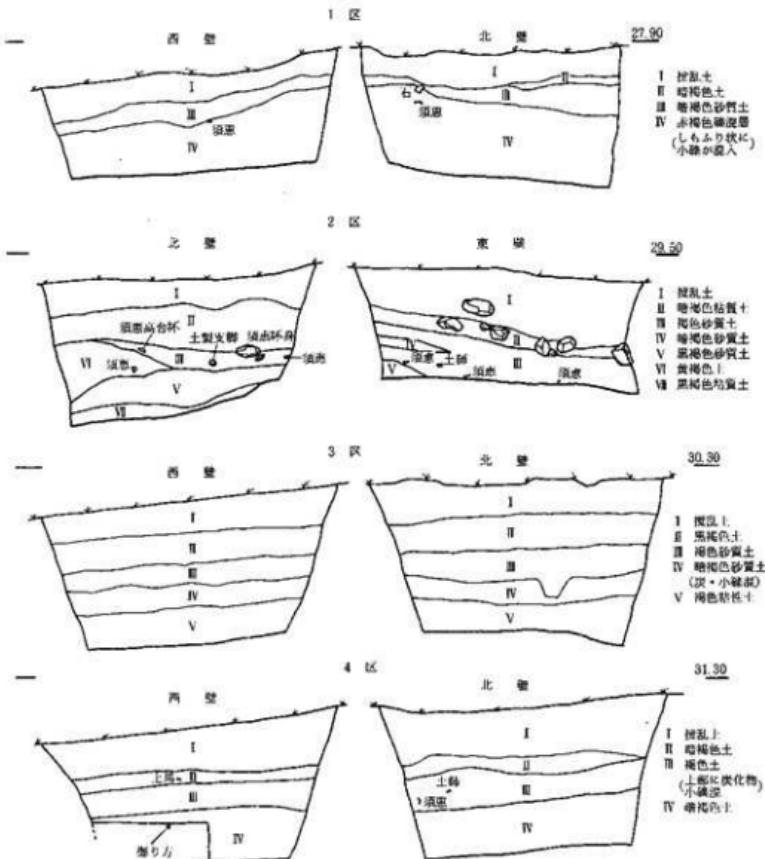
第1層は重機による埋土。

第2層は暗褐色土で、加熱を受けた転石も散在していた。土器片が1つ出土している。

第3層は炭化物、小礫混じりの褐色土で、出土遺物の内図化できたものは28~33がある。

第4層はやや若い褐色土で、第3層との間に焼土や黒色土の帶状のうすい界面がある。

上部から20~30cm下位までは土師器片が認められたが、それ以下の土層では、粘性が強ま



第7図 試掘調査土層図

り遺物は含まれない。

第5層は暗褐色～黒褐色粘性土で、遺物を全く含まない。

## 2. 昭和58年度の調査

昭和58年度の調査は8月22日から開始し、12月20日まで行った。

薗沢遺跡と称する本遺跡全域は茶畠となっており、調査にあたります茶の木を除去する作業から開始された。そして除去された時点で調査区の設定にとりかかり、谷間の入口中央部に中軸線を設け、その中軸線を基準にして東側を10m間隔でA～B区、西側を同様にP～S区に区画し、谷間の入口部から奥に向けて、1, 2, 3・・・と呼称した。(第6回) A-1区は標高26.5m、最奥P-8区は標高38mである。A-1区～A-5区、B-4～B-6区、C-6区、Q-7・8区、P-7・8区の調査を行い、A-1区～A-5区は調査が終了し、多量の遺物を出土したが、主立った遺構は検出されなかった。B-5区も調査が完了したが、B-6区からは堅穴住居址が1棟検出され、同様にC-6区からも住居址が検出されたので、この調査区に関しては、調査員不足などの理由により調査が完了せず、翌年まで調査が継続されることとなった。昭和58年度に調査が完了した地区は、前述したA-1区～A-5区、B-5区、P-7・8区、Q-7・8区であった。

## 3. 昭和59年度の調査

5月14日に開始し、11月20日までを要し、現地調査を完了した。その後、調査終了時から引継ぎ2年3月まで出土遺物の整理作業を行った。

現地調査は前年度と継続し、B-6区、C-6区のSI-01、SI-02の調査から開始し、並行してP区Q区の残りのグリッドの調査を行なった。その結果、Q-6区から堅穴住居址2軒、R-6区から堅穴住居1軒、調査区外のトレンチから同じく1軒を検出した。P-3、4、5区からは掘立柱住居5棟を検出した。またC-5区、D-5区からもそれぞれ掘立柱住居2棟を検出し、最終的に昭和59年度の調査では、堅穴住居4軒、掘立柱住居8棟を検出するという成果を得ることができた。また出土遺物量もコンテナ(横55cm、縦40cm、深さ25cm)にして、総計約200箱を数えた。その中における須恵器と土師器の比率は約13:5で、圧倒的に須恵器が多かった。

それらの出土土器の時期は山陰の須恵器編年でいう第Ⅲ期～Ⅳ期、そして奈良期までの幅広い時期にわたり、それぞれ同一層に新旧混在し、出土した。またこれらの調査区では、土馬・銅印等の特殊な遺物の出土もあり、それらの紹介を含めて簡単に概要を記す。

(錦織慶樹)

第2表 薩沢A・別所遺跡・遺構一覧表

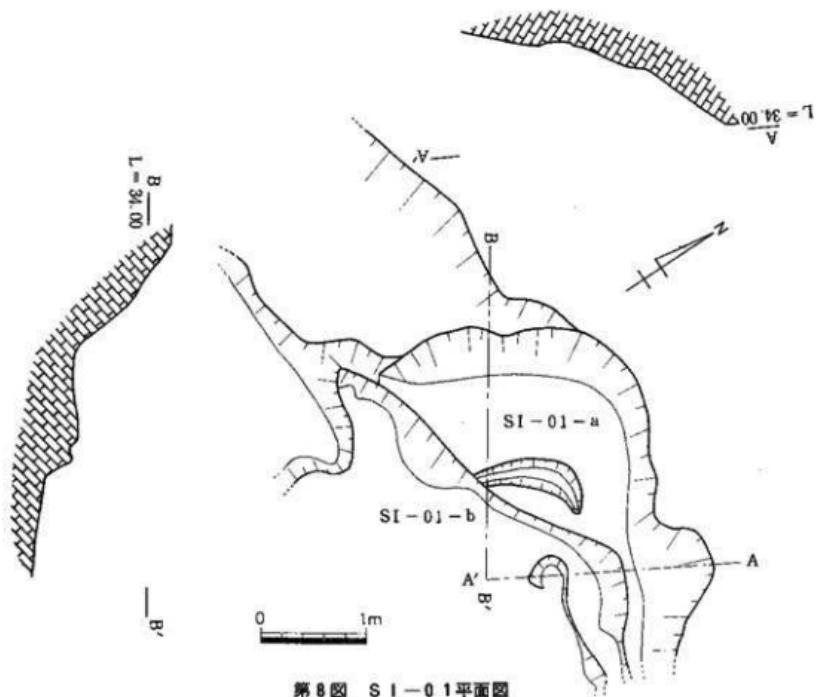
住居No	平面形	規模	倒壊傾・深さ	生柱 穴数	半 方 向	その他のピット 土築・柱跡	遺 物	時 期	備 考
S1-01a	圓丸方形	2.8 m × 2.4 m 壁高76cm	幅20~30cm 深さ7cm	不明			須恵器(高环・高杯) 上製支脚	山陰晩期 (高広ⅠA)	
S1-01b	不明	4m 壁高25~30cm		不明					壁面に高さ5cmの 段あり
S1-02	圓丸方形	東西6.0 m × 南 北5.0 m 北壁 34.0 cm 西壁 22.0 cm		不明	住居内に16穴検出		須恵器(高环・高杯 等) 土師器(漆塗器)	山陰晩期～伊朝 (高広ⅠA～Ⅱ A)	2~3回の焼て替 えあり
S1-03	圓丸方形	東西4.6 m × 南 北3.5 m 北壁 34.0 cm 西壁 27.0 cm	幅20cm、深さ4 ~10cmの窓があ るが倒壊ある かどうか不明	6 個	3.1 m × 2.8 m の機 上検出 カマド設置跡あり		須恵器(高环・高杯 等) 土師器(漆塗器)	山陰晩期 (高広ⅠB)	
S1-04	圓丸方形	4.5 m 壁高22.0 cm	幅 35.0 cm 深さ 5.0 cm	2 個	機上を2ヶ所検出		須恵器(高环・高杯 等) 土師器(漆塗器)	山陰晩期 (高広ⅡA～Ⅱ B)	
S1-05	圓丸方形	東西5.0 m × 南 北5 m	幅44~28.0cm、 深さ10.0cm	4 個	ピット 9個 特殊ピット 1個 燒土 4ヶ所		須恵器(高环・高杯 等) 土師器(漆塗器)	山陰晩期 (高広ⅡA)	貼り床あり
S1-06	不整円形	壁高60.0cm		3 個	燒土 1ヶ所		須恵器(高环・高杯 等) 土師器(漆塗器) 土製支脚、かまど片		
SB-01a	横行3間×奥間 1間以上			5 個	N10.2° E	ピット多数	須恵器 土師器	山陰晩期山陰 (高広ⅡA)	SB-02に土を運 び作られている
SB-01b	横行2間以上× 奥間1間以上			4 個	N10.2° E	ピット多数	須恵器 土師器	山陰晩期山陰 (高広ⅡA)	
SB-02	横行4間×奥間 3間以上			8 個	N31.2° E	燒土 機上混入土塊1 個50~500g、深さ10~ 13cm、長さ4mの調 査	須恵器(高环・高杯 等) 土師器(漆塗器) カマド片	山陰晩期 (高広ⅠB)	
SB-03	横行3~4間× 奥間1間以上	幅0.7~0.52 m 深さ12~35cm		5 個	N48.5° E		須恵器(高环・高杯 等) 土師器(漆塗器) 上製支脚、カマド	山陰晩期～伊朝 (高広ⅠA～Ⅱ A)	
SB-04	横行3間以上× 奥間1間以上			5 個		住居西側に燒土あり	須恵器(高环・高杯) 土師器(漆塗器) 土製支脚、カマド	山陰晩期 (高広ⅡA)	
SB-05	横行1間×奥間 2間以上	壁面沿に残い處 あり		6 個	N33.2° E	支柱穴 2個 燒土 2ヶ所	須恵器(高环・高杯 等) 上製支脚(漆塗器)	山陰晩期 (高広ⅠB)	
SB-06	横行1間×奥間 1間以上			4 個	N35.2° E	ピット 4個 燒土 2ヶ所	須恵器(高环・高杯 等)	山陰晩期 (高広ⅠA)	
SB-07	横行1間以上× 奥間1間以上			3 個	N45.7° E	ピット 1個	なし	不明	住居の上から土築 土
SB-08	横行2間以上× 奥間2間以上			4 個	N45°W	燒土 3ヶ所	須恵器(高环・高杯 等) 土師器(漆塗器) 土製支脚	山陰晩期 (高広ⅠA)	SB-02によって 削られている
SX-01	柱間寸法43cm 長さ1.29m			4 個					
SX-02	長さ1.14 m			4 個					
ピット群	略円形					ピット40個以上	土鳥 1個		
S1-01	圓丸方形 南北4 m					ピット10個			
SB-01	横行2間×奥間 1間以上			5 個	N32°W		須恵器 土鳥	山陰晩期	別所遺跡
SB-02	横行2間×奥間 1間			6 個	N16°W		須恵器	山陰晩期～	"
SB-03	横行1間×奥間 1間			4 個	N15°W				"
ピット群				10 個	多 数				柱根あり "

#### 4. 遺構の概要

竪穴住居と掘立柱住居が検出された。竪穴住居は6軒が確認され、その中には切合いのあるものSI-01, SI-02が含まれており、その切合いの数は6軒の中に含まれていない。従って切合いも含めた竪穴総検出数は10軒になると思われる。掘立柱住居は8棟が検出されたが、これらの中にも切合いのあるものSB-01が含まれているので、検出総数は9棟になる。竪穴住居群と掘立柱住居群とは、標高33.50～34.00mの等高線によって一線を画することができる。すなわち竪穴住居群は全て標高33.50m以上の高所に立地し、掘立柱住居群は全て標高34.00m以下の低所に立地することが判明した。

その他の遺構としては柵列状遺構が検出されたが、これらの遺構は掘立柱住居址SB-01, 02の北側でSB-08上層より検出されており、時期的に明らかに掘立柱住居より新しい遺構であることがわかった。

上述の遺構が瀬沢遺跡検出の主な遺構であり、次にこれらの遺構について各々概要を記



第8図 SI-01平面図

することとする。

#### <SI-01>

谷が二叉に分かれる分歧点あたりの緩斜面で検出され、SI-02の西側10mを隔てたところに位置する。SI-02との標高差は約2.5mである。

本住居址は、2棟の竪穴住居が切合っているよう、標高の高い方をSI-01-a、低い方をSI-01-bと呼称する。

SI-01-a 壁高約76cmの隅丸方形の竪穴住居と思われる。床面は残存長2.8×2.4mを測るが、南側の大半をSI-01-bによって削り取られているので、実際の住居の規模を示す長さの数値ではない。床面には深さ7cm、幅20~30cmの小溝が一条検出されたが、壁に沿って曲がり北側で消える。

柱穴は南側が削り取られている為検出されなかった。また、焼土等も認められなかった。

SI-01-b 壁高25~30cm、床面残存長2.96×0.96mを測るが、プランは不明である。床面はかなり流出し、柱穴、焼土、倒溝等は検出されなかった。壁際には高さ5cmの段を設けるが、住居内のいかなる施設かは不明である。

これらの住居からは、土製支脚、土器質壺片、須恵器蓋、須恵器紡錘車等が出土しているが、SI-01-b床面出土遺物は皆無なので、遺物からa、bの新旧を確認することはできない。しかし切合いからみると、SI-01-aがSI-01-bによって切られ床面を削り取られているので、SI-01-bの方が新しいことができる。遺物にみるSI-01-aの時期は、山陰の須恵器編年でいうⅢ~Ⅳ期にあたると思われる。

(錦織慶樹)

#### <SI-02>

調査区の北東側、C-6区から検出した住居跡である。平面形は残存状態が不良で、北壁、西壁、東壁の一部分しか残っていないので解りにくいが、北壁の残存状態からみて、隅丸方形の住居跡であった可能性が高い。また規模も北壁だけを見るならば、東西軸約6.0mの規模をもっていたものと思われる。南北軸については5mまで残っていた。壁高は北壁で最大値34.0cm、東壁34.0cm、西壁21.0cmを計る。壁沿いに周溝を確認する事はできなかった。北壁と東壁を見ると交わる事がない為、同一住居の壁とは思われない。また床面においても、中央よりやや北側で高さ20cmの段がついており、床面は上段と下段の2つに分かれている事になるが、ピットはそれぞれの床面上から掘り込まれている為、建て替えなどにより住居が重複していたものと考えられる。ピットは16個検出した。P1は径64×46cm、深さ42cm、P2は径42×42cm、深さ35cm、P3は径32×40cm、深さ9cm、P4

は径 $30 \times 48$ cm, 深さ14cm, P 5は径 $30 \times 30$ cm, 深さ27cm, P 6は径 $18 \times 20$ cm, 深さ13cm, P 7は径 $36 \times 32$ cm, 深さ16cm, P 8は径 $18 \times 38$ cm, 深さ29cm, P 9は径 $20 \times 20$ cm, 深さ37cm, P 10は径 $48 \times 38$ cm, 深さ34cm, P 11は径 $30 \times 28$ cm, 深さ36cm, P 12は径 $30 \times 26$ cm, 深さ48cm, P 13は径 $40 \times 26$ cm, 深さ20cm, P 14は径 $20 \times 20$ cm, 深さ20cm, P 15は径 $18 \times 18$ cm, 深さ33cm, P 16は径 $16 \times 16$ cm, 深さ26cmを測る。これらのピットは不整形に並んでおり、主柱穴となるものは住居の重複関係が明らかとなっていない為、判断できなかった。上段の床面では焼土を2ヶ所検出したが、下段の床面では焼土や炭などを検出する事ができなかった。また、中央ピットや特殊ピットと呼べるものも確認できなかった。遺物は壺身10, 蓋2, 高壺3, 壺1, 罐1, 土師器壺4, 土師器瓶2が出土している。

S I - 0 2 の時期はこれらの出土遺物から見て、山本編年のⅢ～Ⅳ期の時期になるものと思われる。しかしながら、前記のように、建て替えなどで2ないし3棟の住居跡が存在していた可能性が考えられ、それぞれの時期差については不明確であるものの、山本編年のⅢ～Ⅳ期の比較的短い期間ではあるが、この間に建て替えが行なわれたであろう。

(今岡一三)

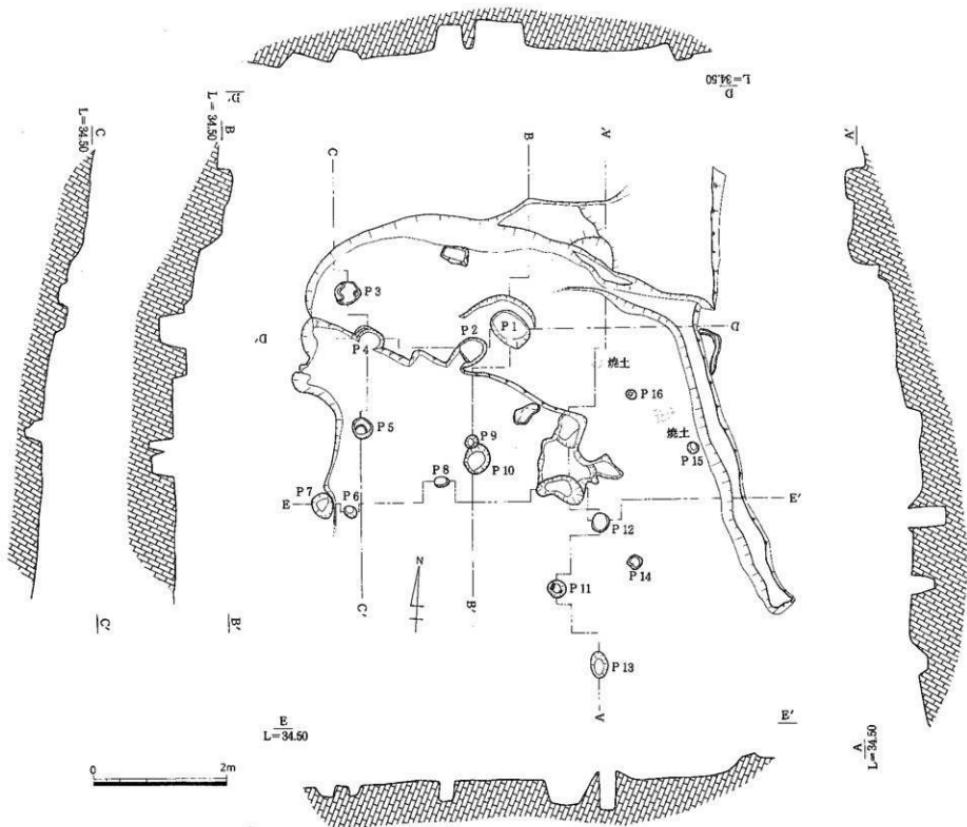
#### < S I - 0 3 >

調査区の北西側、R - 6 区から検出した住居址である。平面形は残存形態から隅丸方形を呈するものと思われる。床面規模は東西軸で4.6mを測り、南北軸は南壁が残存していないので明確には解らないが、ピットの位置からみて5m近くあったものと推測される。壁面で残存しているのは北壁、西壁のみで、北壁は最大値は34cm、西壁の最大値は57cmを測る。北壁と西壁の内側に深さ4～10cmの溝を検出したが、ピットからピットへとつながっているので、これが住居の周溝であったのかどうか判断できなかった。

ピットは6個検出した。北東隅から左廻りでP 1～P 6とし、P 1は径 $20 \times 20$ cm, 深さ30cm, P 2は径 $24 \times 22$ cm, 深さ27cm, P 3は径 $10 \times 10$ cm, 深さ24cm, P 4は径 $36 \times 46$ cm, 深さ28cm, P 5は径 $16 \times 16$ cm, 深さ23cm, P 6は径 $38 \times 40$ cm, 深さ16cmを測る。各柱穴距離はP 1から左廻りで1.45m, 1.5m, 1.6m, 1.9m, 1.0mを測る。柱間距離や柱穴規模が一定でなく、また南東部分でピットを検出することができなかったが、6本以上の主柱による柱組が推測される。

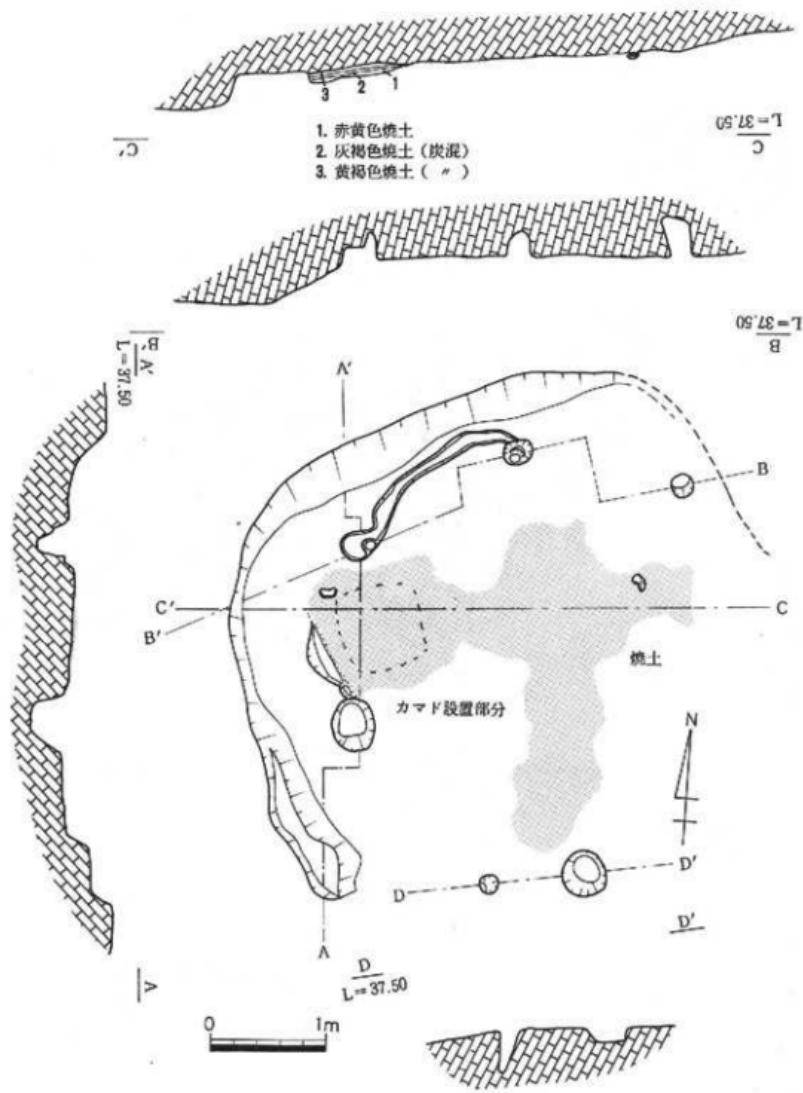
床面は南へ向うにつれて若干低くなっているが、貼床の形跡は認められなかった。床面中央部には $3.4 \times 2.8$ mの広範囲にわたって焼土を検出した。北西部の焼土上では隅丸方形のくぼみが認められ、ここに竈を設置していたものと思われる。

遺物は壺身3, 蓋3, 高壺2, 罐1, 壺1, 土師器壺4, 土師器瓶3が出土している。

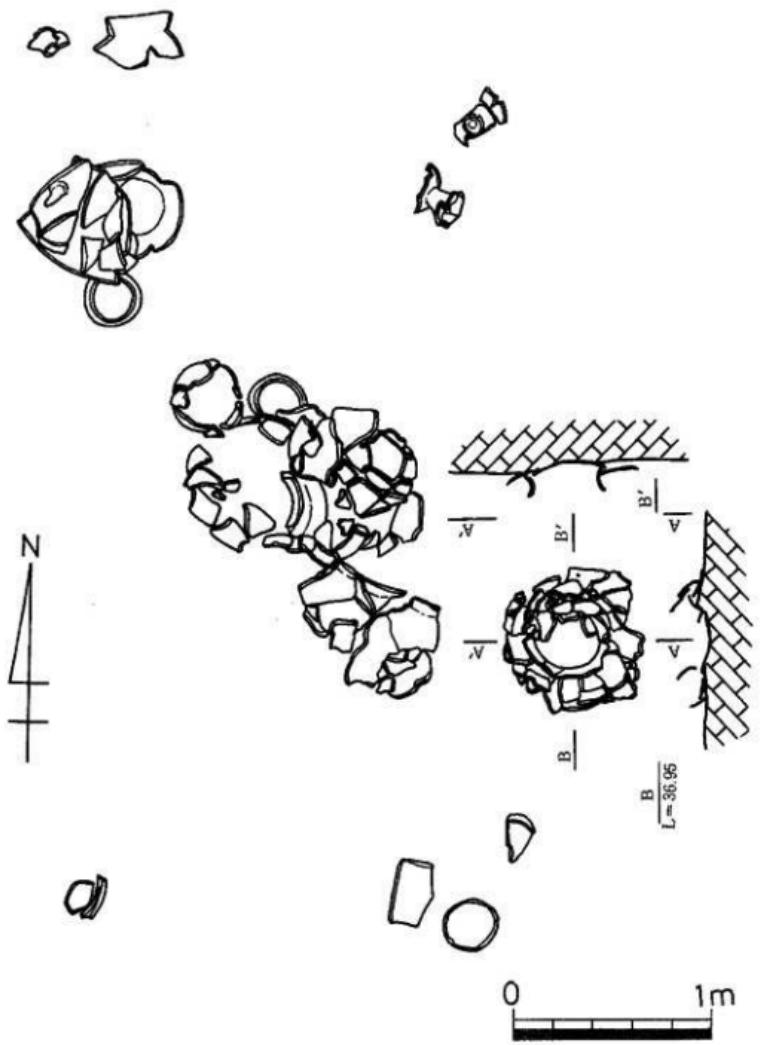


第9図 SI-02 平面図

S I - 0 3 の時期はこれら出土遺物から見て山本編年のⅢ期頃と思われる。(今岡一三)



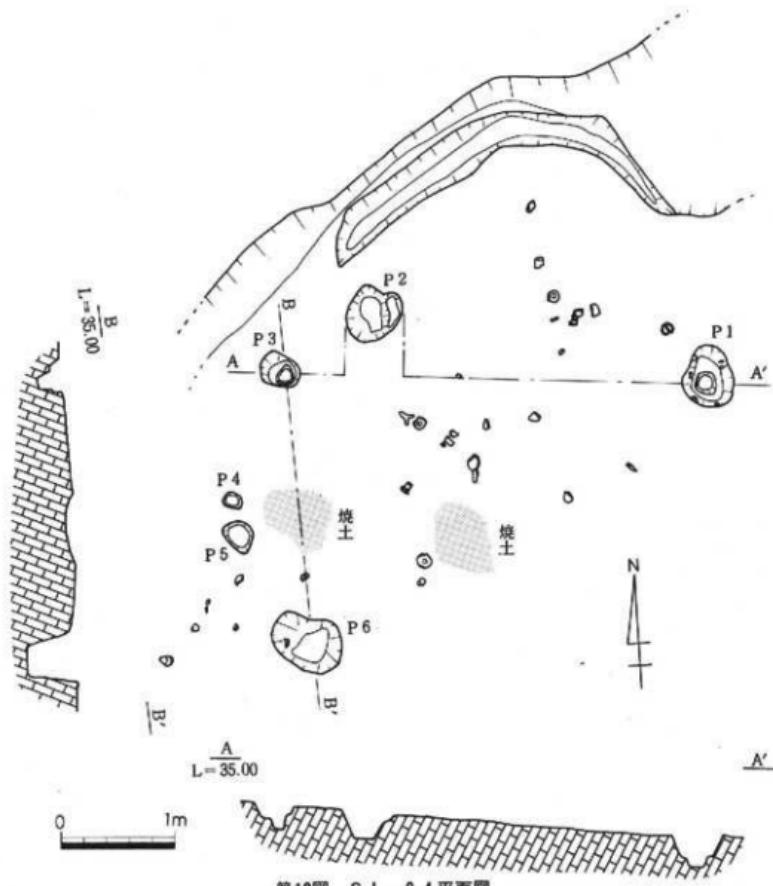
第10図 S I - 0 3 平面図



第11図 S I - 0 3 土器出土状況図

<SI-04>

調査区の北側、Q-6区、Q-7区から検出した住居址で、南にSI-05が存在して



第12図 SI-04 平面図

いた。南側が削平を受け、残存状態が不良のために平面形がわかりにくいが、北壁の内側に幅35cm、深さ5cm程度のU字溝がし字状に残っており、その形態から察すると、隅丸方形を呈するものと思われる。壁も北壁の一部しか残ってなく、残存長は4.5mで、壁最高大値は22cmを測る。

床面は削平が著しく、南側へ傾斜していたが、ピットを6個検出した。北西より左廻りでP1～P6とし、P1は径44×56cm、深さ28cm、P2は径48×48cm、深さ25cm、P3は径34×32cm、深さ20cm、P4は径16×14cm、深さ5cm、P5は径24×30cm、深さ10cm、P

6は径60×50cm、深さ44cmを測る。この内P1とP3には柱痕跡が認められるので、本住居址の主柱穴と思われる。床面上で、焼土を2ヶ所検出したが、竈を設置した痕跡は認められなかった。

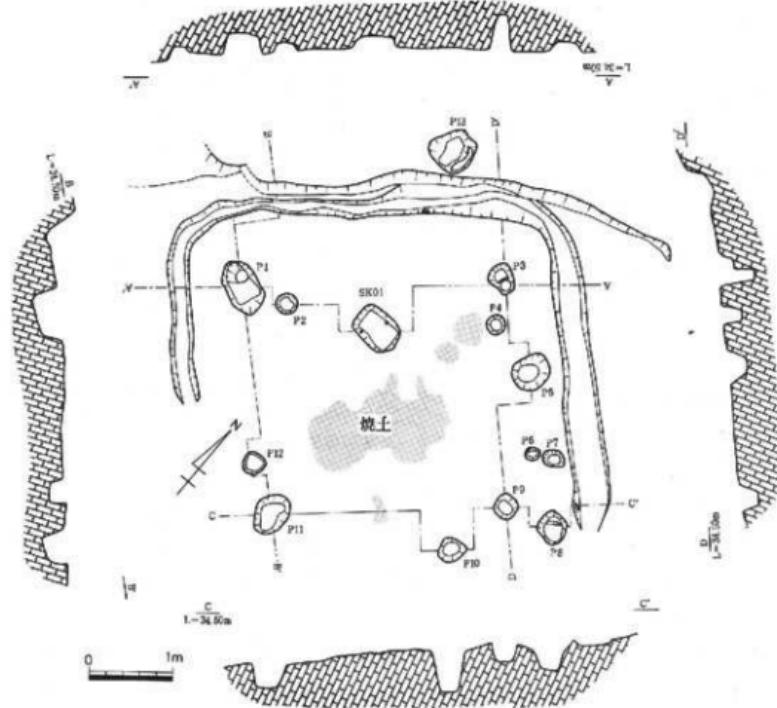
遺物は壺身11、蓋13、高壺13、罐2、壺2、盤1、瓶2、土師器瓶1、土師器壺1、土師器甕5、竈1、土製支脚3、その他4が出土している。

S I - 0 4 の時期はこれら出土遺物から見て、山本編年のIV期頃と思われる。

(今岡一三)

< S I - 0 5 >

調査区の北西側、Q - 6 区から検出した住居址である。この北側にS I - 0 4 が位置していた。平面形は溝の形態から隅丸方形を呈している。壁は北壁がわずかに残っているだけで、壁高最大値は26cmを測り、壁長は約 6.0 m まで残っていた。周溝は幅44~28cmで深

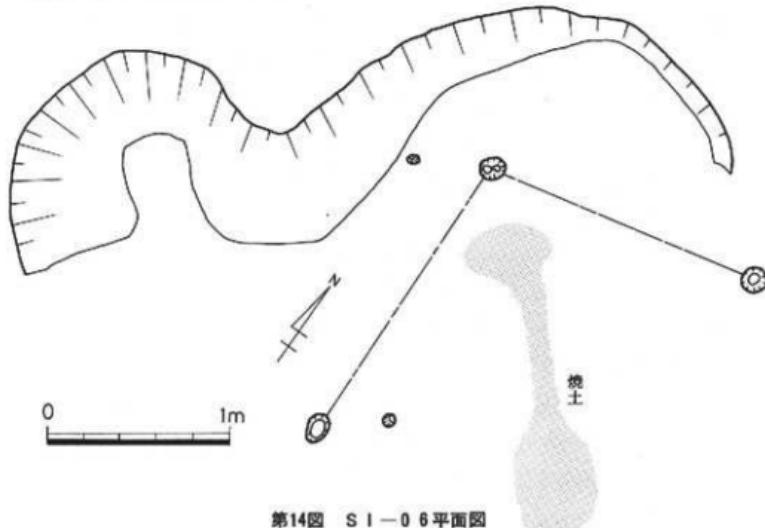


第13図 S I - 0 5 平面図

さ10cmを測り、本来壁の内側を残っていたものと思われるが、南側は消滅していた。規模は東西軸で5.0mを測り、南北軸も5.0mまで残っていた。床面は焼土付近で厚さ10cmの貼床を施すことによって水平に整えられていた。

ピットは床面上に12個、壁上に1個検出した。北西隅より右廻りでP1～P12とし、壁上のものをP13とした。P1は径66×40cm、深さ28cm、P2は径26×24cm、深さ9cm、P3は径36×30cm、深さ40cm、P4は径22×22cm、深さ22cm、P5は径46×42cm、深さ19cm、P6は径20×16cm、深さ8cm、P7は径26×20cm、深さ10cm、P8は径36×40cm、深さ20cm、P9は径26×28cm、深さ25cm、P10は径30×30cm、深さ49cm、P11は径40×52cm、深さ27cm、P12は径26×28cm、深さ20cm、P13は径50×50cm、深さ10cmを測る。これらのピットは不整形に並んでいるが、P1、P3、P9、P11の4穴が対応しているので、これらが主柱穴を成すものと思われる。柱間距離はP1から右廻りで3.1m、2.7m、2.9m、3.0mを測る。床面上には、特殊ピット1個と焼土の広がりが4ヶ所認められた。特殊ピットの平面形は方形を呈し、規模は58×42cm、深さ17cmの小規模のものであり、用途は不明である。焼土は床面中央に大きな広がりが見られるが、竈を設置した痕跡は認められなかった。

遺物は壺身25、蓋22、高壺7、甕3、壺3、瓶1、土師器壺10、土師器壺1、竈2、土製支脚2、その他5が出土している。



第14図 S1-06 平面図

S I - 0 5 の時期は出土遺物から見て、山本編年のIV期頃と思われる。 (今岡一三)

< S I - 0 6 >

R - 7, S - 7 区の北側、調査区外の崖上に等高線とほぼ平行に設定したトレント中に位置する不整円形の堅穴住居址である。壁は最大高60cmを測るが、東側でなだらかに消失している。床面は平坦で、そこに3本の柱穴と南北方向に長く伸びた焼土を検出した。柱穴はいずれも円形で直径15~20cm、深さは30cmを測る。柱間は 1.95 × 2.15 m である。床面は黄褐色弱粘性土で、壁も同一の土層である。この住居址の南側には壁はなく、また床面と同一の土層が崖まで続いている。また床面壁際の側溝は認められなかった。

床面及び覆土中から出土した土器は、竈小片、土製支脚、土師質甕片4個体分、須恵器片1、高台付坏、高坏、坏身等があるが、床面に密着して出土した須恵器はわずかに甕の小片があるだけで時期の判明するものはなかった。 (錦織慶樹)

< S B - 0 1 >

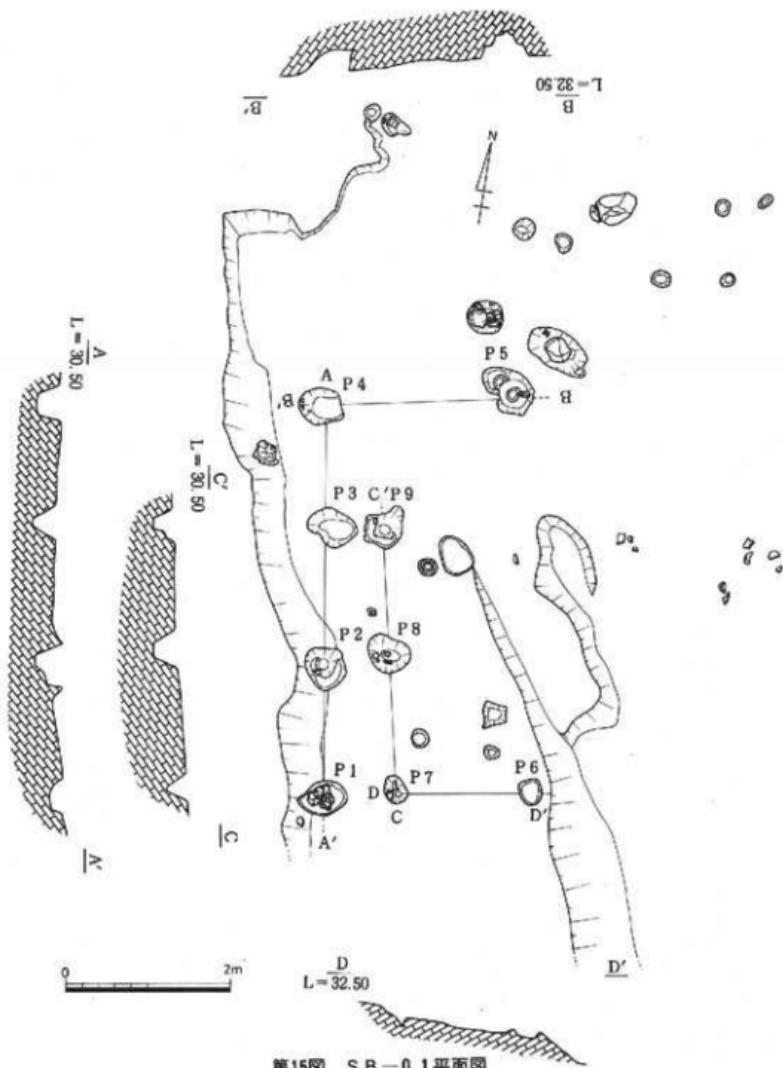
調査区の最も低位のP - 3 区から検出した建物跡であり、S B - 0 2 の上に位置している。西側斜面を加工段によって壁を削り出し、S B - 0 2 に土を盛って平坦面を作っている。奥壁最大高は57cmを測り、壁沿いに溝はなかった。ピットの検出状況から、少なくとも2棟の建物跡が認められ、これらをS B - 0 1 - a, S B - 0 1 - b とする。この0 1 - a と0 1 - b の先後関係については判断できなかった。

0 1 - a は桁行3間、梁間1間以上の建物跡で、P 1 ~ P 5 までが主柱穴と考えられる。P 1 は径40×60cm、深さ41cm、P 2 は径50×50cm、深さ30cm、P 3 は径44×62cm、深さ25cm、P 4 は径44×54cm、深さ26cm、P 5 は径54×60cm、深さ34cmを測り、各柱間距離はP 1 からP 5 まで順に1.7m, 1.7m, 1.6m, 2.3m を測る。柱間距離は一定ではないが、柱穴は直線的に並んでいて、主軸方向はN 10.2° E を測る。

0 1 - b は桁行2間以上、梁間1間以上の建物跡でP 6 ~ P 9 までが主柱穴と考えられる。P 6 は径32×28cm、深さ14cm、P 7 は径36×30cm、深さ31cm、P 8 は径44×54cm、深さ30cm、P 9 は径40×44cm、深さ25cmを測り、各柱間の距離はP 6 からP 9 まで順に1.7m, 1.7m, 1.6m を測る。0 1 - a 同様に柱穴は直線的に並んでいて、主軸方向はN 10.2° E を測る。

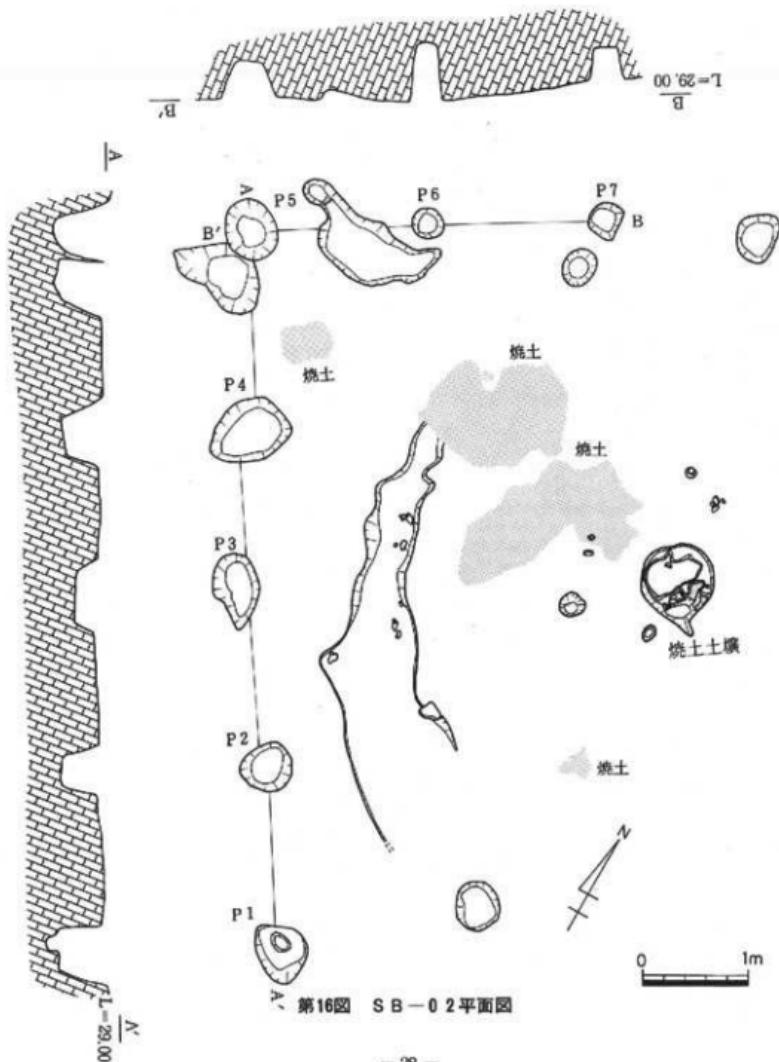
これら2棟の建物跡の他に多数のピットを検出したが、これらのピットが建物跡となるかどうかは判断できなかった。またS B - 0 2 の上面に土を盛って造った床面部分で0 1 - a, 0 1 - b に相当するはずの柱穴の検出は、削平の為不可能であった。

遺物は坏身16、高台付坏6、蓋8、煮1、甕1、壙1、瓶1、鍋3、土師器瓶1、土師



<SB-02>

SB-01の貼床除去後に検出された住居址である。南側に加工段が若干残存している。ピットの残存形態から桁行4間、梁間3間以上の建物跡で、主軸方向はN 31.2°Eを測る。P1からP8までが主柱穴と思われる。P1は径54×56cm、深さ55cm、P2は径48×48cm、



深さ32cm, P 3は径72×44cm, 深さ20cm, P 4は径66×74cm, 深さ32cm, P 5は径52×52cm, 深さ42cm, P 6は径30×30cm, 深さ53cm, P 7は径34×30cm, 深さ31cm, P 8は径46×40cm, 深さ24cmを測る。各柱間距離はP 1からP 8まで順に1.7m, 1.7m, 1.6m, 1.9m, 1.7m, 1.7m, 1.6mを測り、各柱間距離が一定でなく、直線的に並んでいない。

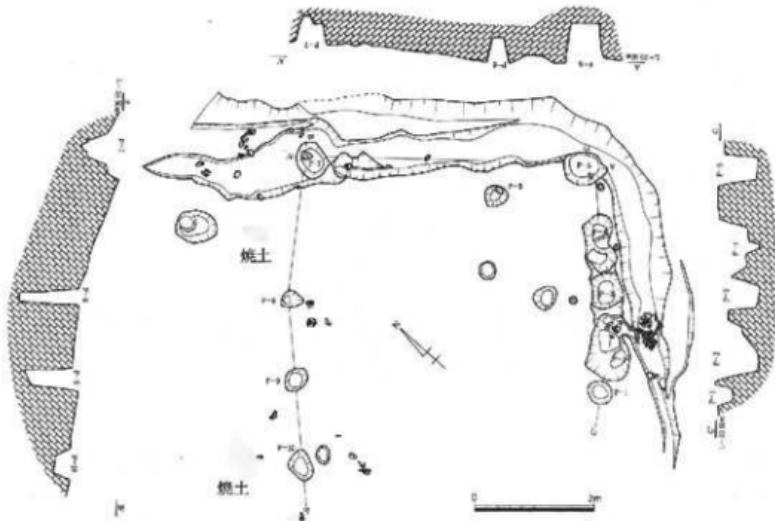
床面中央に焼土と、焼土が混入した土壤及び溝を検出した。焼土は3ヶ所認められ、これらの焼土の1ヶ所から幅30~50cm, 深さ10~13cmの溝が南方へ伸びており、約4mまで残っていた。焼土の東側には円形の土壤があり、焼土や炭が多量につまっていた。規模は径70×70cm, 深さ14cmを測り、底部は褐色礫層である。この土壤の上面から瓦片が出土している為、ここに竈が設置されていたものと思われる。

遺物は壺身8, 盖12, 高壺2, 罐1, 壺1, 壺3, 瓶1, 土師器壺5, 竈2, 土製支脚1が出土している。

S B - 0 2 の時期は遺物から見て、山本編年のIV期頃と思われる。 (今岡一三)

#### <SB-03>

谷の中央部東側斜面を削り取って作られた掘立柱住居である。東側斜面で壁高0.7~0.8mを測るが、南側、北側には壁はなかった。残存する壁下には溝が巡り、幅0.7~0.52



第17図 SB-03平面図

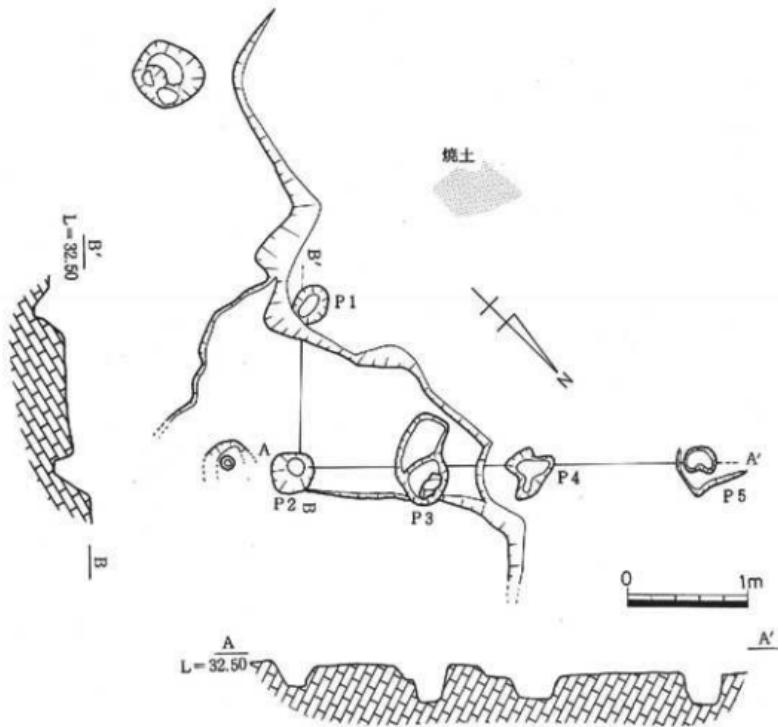
m, 深さ 0.12 ~ 0.36 m を測るが、住居址の南西、北東では溝、壁は確認できなかった。この建物の主軸は N 48.5° E で、住居の規模は検出された柱穴より梁間 1 間 (4.8 m), 衍行は 3 ~ 4 間 (5.28 m ~) ないしそれ以上と推定される。梁間の柱間は 4.8 m, 衍行柱間は 0.8 ~ 2.44 m を測る。柱穴は梁間で直径 50 ~ 60 cm, 深さ 40 ~ 70 cm, 衍行で平均直径 35 cm, 深さ 30 ~ 70 cm を測る。

床面覆土中より出土した土器は土師器甕、甌、土製支脚、須恵器では蓋坏、高坏、瓶等が出土しているが、遺物に見るこの住居の存立時期は山陰 III ~ IV 期の初めにかけてと思われる。

(錦織慶樹)

#### <SB-04>

谷の東奥で検出された掘立柱住居である。東側斜面を削って平坦部をつくっているが、床面は谷の中央部に向って傾斜しており、そこに 5 本の主柱穴を確認した。建物規模は衍行 3 間 (3.3 m) 以上、梁間 1 間 (1.24 m) 以上を測り、建物の主軸は N 44° W である。



第18図 SB-04 平面図

柱穴の直径は20~40cmで、深さは15~30cmあった。床面西側に焼土があった。

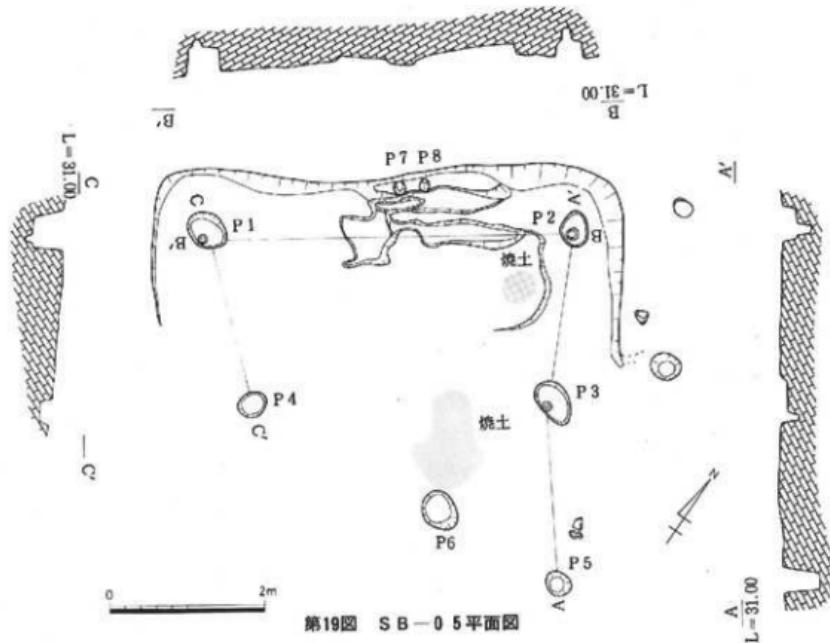
床面や覆土中より出土した土器は、土師器は壺、甌、土製支脚、須恵器は蓋壺、高壺等が出土した。遺物に見るこの住居址の時期は山陰IV期の初めと思われる。

(錦織慶樹)

#### <SB-05>

調査区の中央部分付近、P-5区から検出した住居址で、南側にはSB-06が、北側にはSB-07が位置していた。北側を加工段により壁を削り出し、SB-06に盛土を施すことによって床面を造り出している。残存している奥壁の最大値は25cmを測り、東西軸の規模は5.6mを測る。

ピットは8個検出した。P1は径54×44cm、深さ35cm、P2は径36×40cm、深さ38cm、P3は径44×40cm、深さ18cm、P4は径32×36cm、深さ16cm、P5は径32×30cm、深さ48cm、P6は径52×44cm、深さ35cm、P7は径16×16cm、深さ16cm、P8は径14×18cm、深さ16cmを測る。柱間距離はP1~P2間が4.8m、P2~P3間が2.2m、P3~P5間



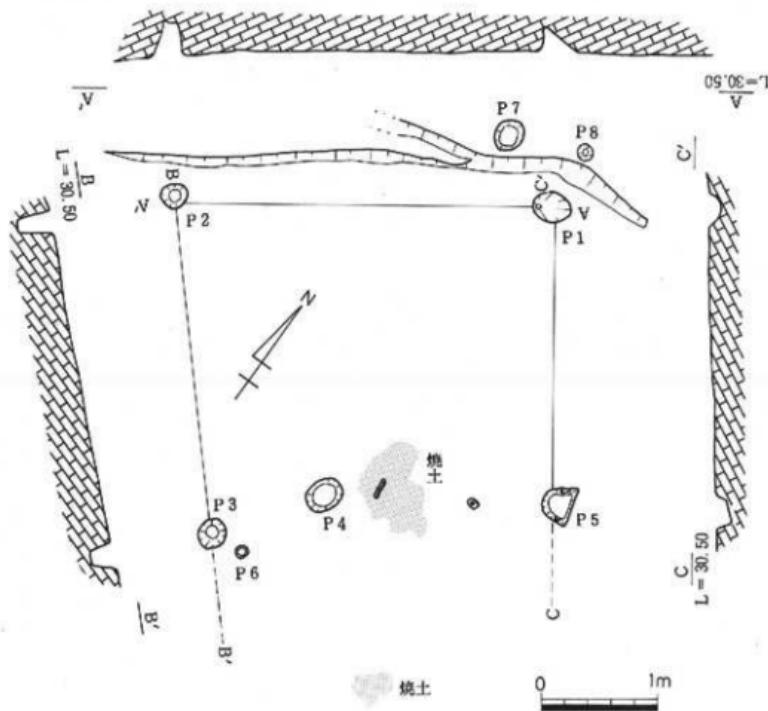
第19図 SB-05平面図

が2.4m, P1～P4間が2.3m, P3～P4間が4.0mを測る。柱間距離が一定でなく、また一直線に並んでいないが、1間×2間以上の建物の可能性が高いものと思われる。主軸方向はN 33.2°Eを測る。しかしP1～P2間の距離がやや長すぎるように感じられるが、奥壁中央部にP7, P8の小ピットが2個あり、これらは壁側に斜めに掘り込まれていたため、これらが支柱となり、P1～P2間を支えていたものであろう。奥壁側で浅い溝を検出したが、東西長2.3mまでしか残っていなかったので、用途は不明である。

床面上に焼土が2ヶ所認められたが、竈を設置した痕跡は認められなかった。

遺物は壺身10, 盖4, 茗1, 高壺4, 瓢1, 壺1, 線1, 増1, 土師器甕4がある。

S B - 0 5 の時期は出土遺物から見て、山本編年のIV期頃と思われる。（今岡一三）



第20図 S B - 0 6 平面図

### <SB-06>

調査区の中央部付近、P-5区から検出した住居址で、北側にSB-05、07が位置している。加工段によって北壁と平坦面を作り出している。残存している奥壁最大高は10cmで、壁長は5.0mまで残っていた。

ピットは床面上に6個、奥壁の上に2個検出した。床面上のピットを北西隅から左廻りでP1～P6とし、奥壁上のものをP7、P8とした。P1は径34×22cm、深さ20cm、P2は径24×22cm、深さ30cm、P3は径24×26cm、深さ16cm、P4は径32×30cm、深さ4cm、P5は径26×34cm、深さ12cm、P6は径12×14cm、深さ6cm、P7は径24×26cm、深さ4cm、P8は径14×14cm、深さ13cmを測る。P1、P2、P3、P5の埋土が同じ褐色土層であることから、これらがこの住居址の主柱穴であったものと考えられる。各柱穴距離はP1から左廻りで3.3m、3.0m、3.1m、2.7mを測り、残存状態から見ると、主軸方向N35.2°Eの1間×1間の建物跡である。しかし床面の南側付近、P3とP5の間と、それよりも南の床面検出面で焼土が2ヶ所検出されており、このことからP3とP5の南側にはまだこの建物に関連するピットが存在していたことが考えられ、1間×2間以上の建物となることも推測される。

遺物は壺身6、蓋4、高壺2、聰1がある。

SB-06の時期は出土遺物から見て、山本編年のⅢ期頃と思われる。（今岡一三）

### <SB-07>

調査区の中央部付近、P-5区から検出した住居址であり、SB-05の北に位置する。地山を削り出すことによって平坦面を作っている。

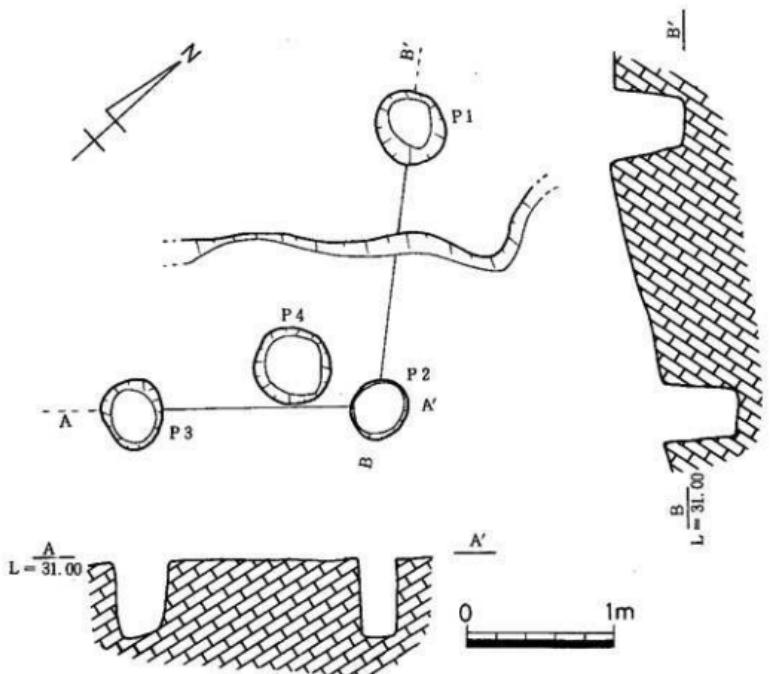
残存部分が少なくピットは4個検出した。P1は径50×44cm、深さ46cm、P2は径38×42cm、深さ50cm、P3は径44×44cm、深さ48cm、P4は径54×52cm、深さ20cmを測る。P1、P2、P3が対応するものと思われる。各柱間距離は、P1からP3まで順に2.0m、1.7mを測る。残存部分が少ないために建物の規模はわからないが、柱穴のつくりがしっかりしている事等から考えると、1間×1間以上の建物跡になるものと推測される。また、主軸方向はN45.7°Eを測る。

床面から焼土などを検出することはできなかった。また遺物も床面からの出土ではなく、床面から25cm上部で土鈴が2個出土した他何も出土していない。それ故、時期を判断することはできなかった。

（今岡一三）

### <SB-08>

谷中央西側斜面上より検出された掘立柱建物である。南側にはほぼ同レベルでSB-0



第21図 SB-07 平面図

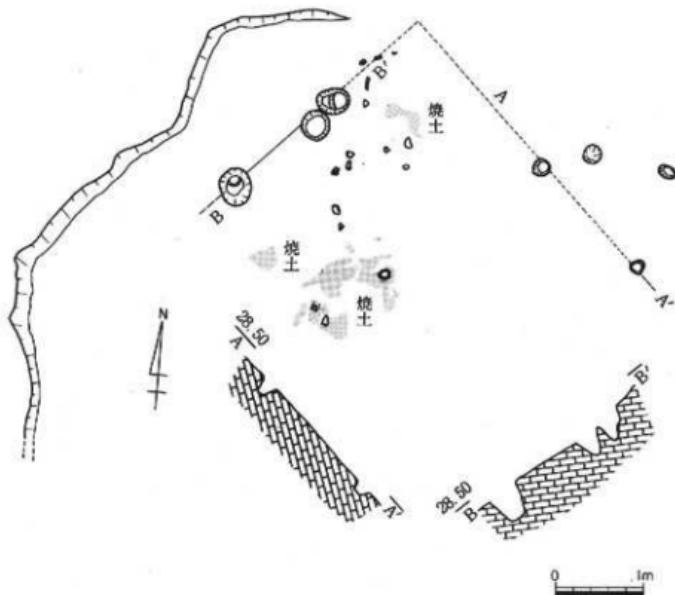
2が検出され、SB-08はこの住居址によって切られていた。南西にはSB-01が検出され、SB-03とは谷を隔てて向かい合っている。

主柱穴は4本が確認され、直径は15~36cm、深さ10~30cmを測る。住居址北側は壁が残存していたが、高さは20cm前後しかなかった。床面は平坦で、谷中央に向ってゆるやかに傾斜していたが、これは床面の自然流出によるものである。

この住居址は、2間(2.8m)×2間以上(3.8m)が考えられたが、北の隅の柱穴が検出されなかったので、規模としては不明確であった。主軸はN 45°W。他にこの住居址に伴う遺構は3箇所にわたる焼土があったが、南側の一番大きな焼土は竈を設置したものと思われる。また側溝は認められなかった。

出土遺物は、土師器の壺、竈片と思われるものの数片、土製支脚、須恵器の蓋坏、高坏、壺、甕、瓶が出土しているが、これらの遺物にみるこの住居址の時期は山陰Ⅲ期と思われる。

(錦織慶樹)



第22図 SB-08 平面図

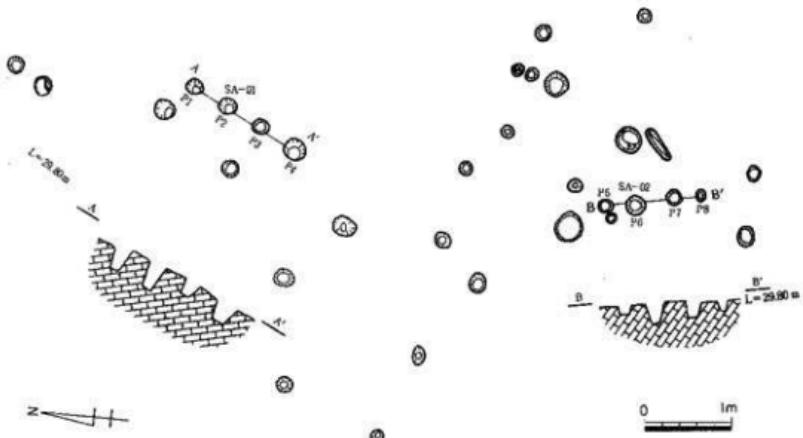
<SA-01, SA-02>

表土より1.3m掘り下げた第4層上面で35穴を検出した。このピットの埋土はいずれも暗褐色土と赤褐色炭泥層の2層で、円形或は略円形の掘方で、直径は31~9cmを測る。直徑20cm前後のものが多いが、これらのピット群の内一列に並んでいるものが4穴づつあり、それがSA-01 (SP01~SP04) とSA-02 (SP05~SP08) の2つの柱列である。

SA-01は柱間寸法約43cm等間で、長さ約1.29mの柵列状遺構、SA-02はSP05~06間が37cm、SP06~07間が46cm、SP07~08間が31cm、計1.14mの柵列状遺構である。

SA-01, 02ともに小規模の柵列状遺構で、これらは住居址検出面よりもかなり上位の層（2層上、約75cm上）で検出されたので、住居址とは無関係である。また他に小規模なピットが周囲に無秩序に点在するだけなので、これらのピット群の性格を知り得る資料にはなり得なかった。

（錦織慶樹）



第23図 P-4区 SA-01, 02及びピット検出図

第3表 SA-01, 02のピット一覧表

SA-01

	上端径(cm)	下端径(cm)	深さ(cm)
P 1	20	10	24
P 2	20	11	27
P 3	19	11	16
P 4	26	14	22

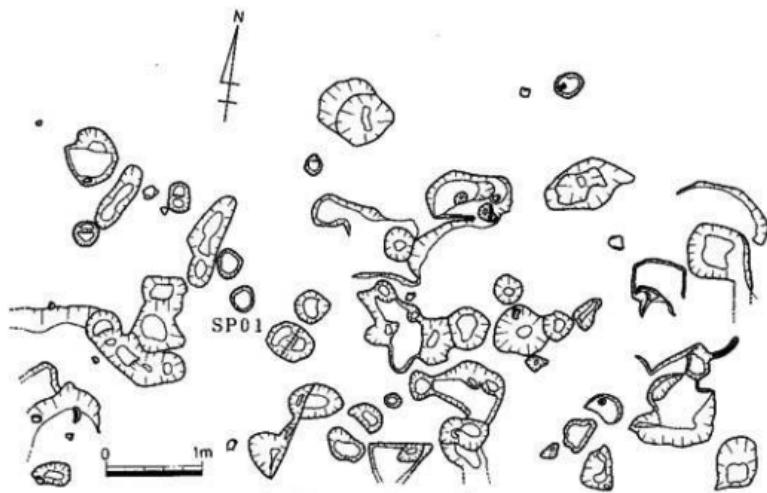
SA-02

	上端径(cm)	下端径(cm)	深さ(cm)
P 1	17	11	10
P 2	23	13	22
P 3	16.5	12	16
P 4	13	8	11

#### <ピット群>

S I - 04, 05 の北東, P - 7 区の南側より検出された40穴以上の小ピット群である。掘り方は不定形あるいは略円形で、円形に近いものの上端径、下端径、深さはそれぞれ26cm, 18cm, 10cm 平均である。これらのピット群はいずれも斜面上にあるが、確實に遺構として確認できるものはなかった。しかし、調査区の中央よりやや南西のピット中 (SP 01) から土馬脚部 (第26図 H-22) が1片出土している。

(錦織慶樹)



第24図 P-7区ピット群

### 5. その他の調査区

A-1～6区, B-1・2区, B-5区, P-8区, Q-5区からは遺構の検出はなかった。しかし、銅印、石鎌、滑石製臼玉、勾玉、土馬等の出土があり、それらの紹介を含め、その他の調査区の簡単な概略を記することとする。

#### <A-1区>

表土から最下層まで10層に分かれ、2.2 mを掘る。遺物は表土から第9層より出土し、最下層の第10層からは出土遺物はない。注目すべき遺物は第3層中より円面鏡(図版25, 41)、土馬雄胴部1体、雌胴部1体、紡錘車1、第5層中より玄武岩製の小型石鎌1(第31図、28)が出土していることである。

#### <A-2区>

表土から最下層まで7層に分かれ、2.1～2.4 mを掘る。遺物は表土から第6層より出土し、最下層の第7層からの出土遺物はない。この調査区では第1層から手づくね土器1、第3層から紡錘車や青めのう製勾玉1(第33図、37)、滑石製臼玉2(第33図、38, 39)等が出土し、また出土層位は不明だが、土馬雌胴部1体が出土している。

#### <A-3区>

表土から最下層まで10層に分かれ、1.6～2.0 mを掘る。遺物は表土から第8層まで出土し、9, 10層からは出土していない。

#### <A-4区>

表土から最下層まで10層に分かれ、1.5～2.3mを掘る。遺物は第1層から8層まで出土し、9、10層からの出土遺物は無い。ここでも土馬が出土している。第4層より土馬頭部1体、脚部1本が出土。また第6層からは軽石製の石鏡1(第31図、27)が出土している。

#### <A-5区>

表土から最下層まで8層に分かれ、1.2～2.0mを掘る。遺物は第1～7層まで出土するが、注目されるのはここでも雄の土馬が2体出土していることである。

#### <A-6区>

表土から最下層まで6層に分かれ、1.0～1.2mを掘る。グリッドの北半分は黄褐色粘性土の地山が露出している。昭和46年の造成時に削り取られた箇所のため、出土遺物は少なかった。第2層中より紡錘車が1個出土している。

#### <B-1区>

谷間の入口に所在する本調査区は、西側が谷の中心部にあたるので、東から西に大きく傾斜しており、遺物は西側に集中している。地山から少し浮いた所で、厚み5mmの焼土が直径70cm位にわたり検出されたが、他に確実な遺構はなかった。

#### <B-2区>

この調査区もB-1区と同様に地山は東側から西側に向って傾斜しており、遺物は西側に集中するが、注意すべき遺物や確実に遺構と思われるものはなかった。

#### <B-5区>

表土から地山まで約2mを測るが、重機による搅乱土層が厚み1～1.5m位まであり、擾乱を受けない土層は厚み30～60cm位しかない。したがって遺物量も少なく須恵器片コントナ1箱、土師器片1箱位であった。しかし旧表土からではあるが、銅印(第33図及びP53参照)が出土していることが注目される。

#### <P-8区>

表土下30cmで地山に達する。北側は地山の露出した崖になっており、昭和46年に大きく削り取られた箇所であるため出土遺物も表採する程度で遺構も皆無であった。

#### <Q-5区>

勾配の急な斜面に位置し、表土から1.5mで地山に達する。地山は粘性の強い黒色土で、地山直上の層まで遺物を包含するが、遺物量は少なかった。

#### <Q-8区、S-6区、S-7区>

P-8区と同様で出土遺物はなかった。

(錦織慶樹)

## 6. その他の遺物

〔土馬〕(第25、26図、図版129、130)

鶴沢A遺跡(以下本遺跡とする)出土の土馬は総数37点を数えるが、その内完形に近いものはわずか1体のみで、他は胸部が23体、脚部が7本、顔部が7個である。また鶴沢B遺跡からは胸部が1体出土しており、A、B両遺跡で計38点を数え、全てが須恵質の土馬である。

各調査区出土の土馬は、最上層から最下層までまんべんなく出土(第27図)したが、その中でも中間層である3~4層出土のものが多く、中には住居址床面付近から出土(H-1, 2, 3, 26, 27)したものもある。ではまず住居址内出土の土馬から見っていくこととする。  
\*住居址出土の土馬 H-1はSI-04の床面付近より出土した顔、胸部の残存したもので、残念ながら四肢を欠損している。写実的に馬を模しているが、調整に関しては若干難な部分がある。目は刺突して表現し、たてがみは貼り付けた後指ナデ調整し、たてがみらしく仕上げている。性別は不明で、肛門表現の孔もない。本遺跡、別所遺跡巾で最も優美な作である。この土馬の時期は他の伴出遺物との関係から、山本  
註1 編年のIV期、高広のII A~II B期に並行すると思われる。

H-2はSI-02中の様々な土器類と伴出したほぼ完形に近いもので、わずかに耳を欠いている。この土馬も写実的な作であるがH-1の方が優品である。調整はこちらの方が丁寧でよくナデで表面をなめらかにしている。目は粘土貼り付け後、刺突して表現してあり、これと同じ手法によるものは他にH-28, 41がある。このような顔部の作りをするものは島根県内では比較的出土例があるが、県外では非常に少なく、単に細かい工具等で刺突したものや、竹管状の工具で刺突したものが一般的なものようである。  
註3 松江市西川津町のタテヨウ遺跡、仁多郡横田町大字下横田字上方林の上方林遺跡出土のものが同じような手法の県内出土例である。県外では京都府長岡京市今里4丁日の今里  
註4 遺跡、京都市西京区大枝の長野新田遺跡、岡山県蓮池尻遺跡等にその類例がある。他の伴出遺物に見るこの土馬の時期は、山陰III~IV期、高広編年にいうII A~II B期に並行する時期と思われる。

H-3はSB-01の覆土中より出土した裸馬である。頭部及び四肢、尾を欠損している。尻に1孔を穿ち肛門を表現している。性別は不明である。伴出土器に見るこの土馬の時期は、山陰IV期、高広編年にいうII A期に該当する。

H-26はSI-02の遺物が流れ落ちたと思われる住居址南の緩斜面で多量の土器類に混って出土した。顔部のみで粗雑な作品であり、わずかに目を刺突して表現している

単純なものである。伴出遺物にみるこの土馬の時期は、山陰Ⅲ～Ⅳ期にかけて、高広編年のⅠA～ⅡB期までに該当する。

H-27はS I-05の床面上より出土した顔部のみのもので、目、鼻、口の表現はいっさいない。単に耳をつけた痕跡を残すのみである。単純な作で指頭土模及びナデ痕跡を有している。この土馬の時期は伴出遺物より山陰Ⅲ～Ⅳ期にかけて、高広編年のⅠA～ⅡA期に並行すると思われる。

住居址出土のこれらの土馬の詳細な検討は後述するIV出土遺物の検討で触れることとして、次には薺沢出土の飾馬について見てゆきたい。

\* 飾馬 H-19は頭部、四肢、尾を欠いているが、残存部には、胸繫、手綱、鞍、尻繫を表現したものと思われる粘土紐を貼り付けた痕跡が残っており、わずかだがその粘土も付着している。たてがみはつまみ上げて作り、尾は斜め下方へ真直ぐに伸び、足のつけ根の残り貝合から前肢は前方へ、後肢は後方へ踏ばった安定感のあるどっしりした作りであることを伺うことができる。胸部は丁寧なナデで仕上げ、足は一部ヘラで削っている。この土馬はS I-02出土の遺物の上面から出土したもので、住居址には伴っていないが、比較的古い様相を呈している。小笠原好彦氏の分類された第I段階のA形式に該当する土馬である。

他に薺沢出土の土馬で、飾馬と思われるものはH-9があり、これは磨滅してわかりにくいか粘土が付着しており、鞍を表現したものと思われる。腹部には男根を表現したと思われるふくらみがあり雄であることがわかる。他はH-2の土馬が胸部の右側前面部に縦横1条の沈線を施している。胸繫と鞍を表現したものかと思われたが、片側にしかないのでヘラ記号的なものではないかと思われる。こういった類例は薺沢では他に首部に竹管文を施したものがある(H-20)。

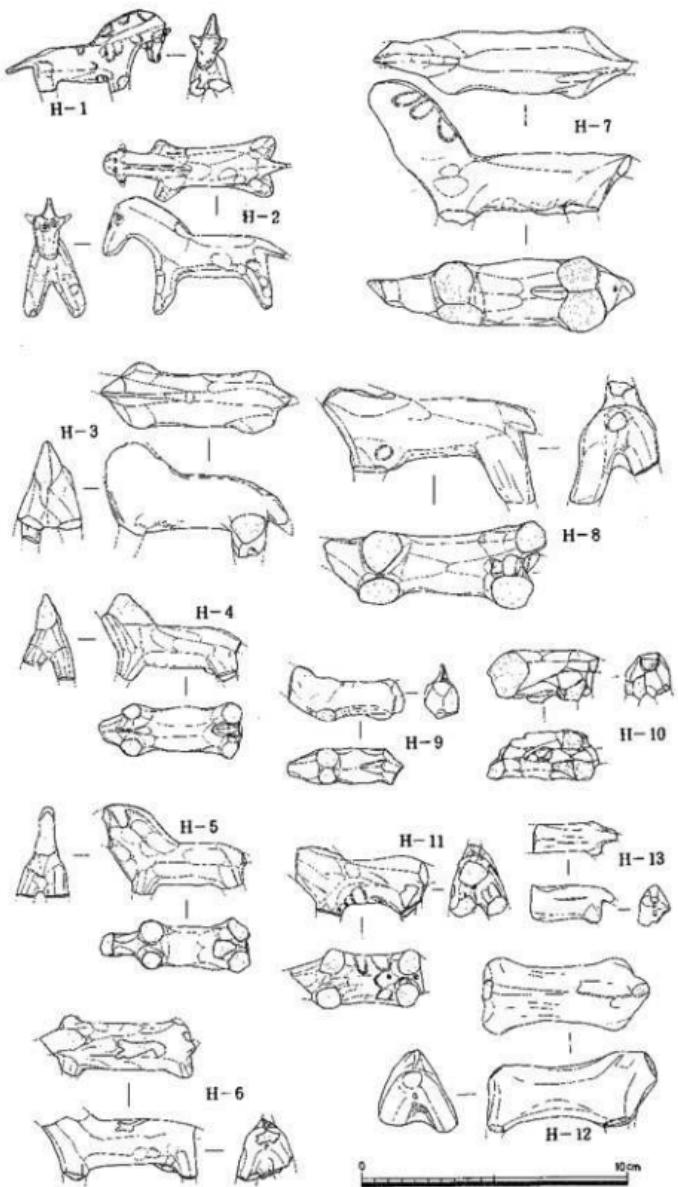
H-39は薺沢出土の土馬ではないが、参考として取り上げた。朝鈴小学校裏の畠より耕作中に出土した。面繫、手綱、胸繫、鞍、尻繫を粘土紐貼り付けによって表現する皆具式の優品である。顔は目、鼻を刻突により表現し、口はヘラ状工具で切込みを入れている。耳が欠損しているが、たてがみはつまみ上げた後沈線を施している。尻に直徑2mm、深さ2mmの孔を穿ち肛門を表現する。腹部には粘土紐が剥落した痕跡を有し、おそらく男根を表現したものだと思われる。H-19と同様に皆具式ではあるが、その製品の写実性、作の丁寧さを見るとH-19より古いように思われる。また皆具式の飾馬で性別をつけたものは、別所遺跡から1点出土しているが薺沢ではその類例はない。まるで埴輪馬を連想させるような作である。

次に齒沢土馬の中で最も特筆すべき特徴として取り上げねばならないのは、性別のある土馬についてである。性別のある土馬は、雄7体、雌4体、計11体と両性が揃っているが、雄は粘土紐を股間に貼り付け、先端部を刺突して孔を穿ち尿道を表現するものと、そうでないものがある。雌馬は尻尾の下部に2孔を穿つものと、1孔は尻尾の下、もう1孔は腹部に穿孔というふうにそれぞれ2種類の表現の仕方がある。

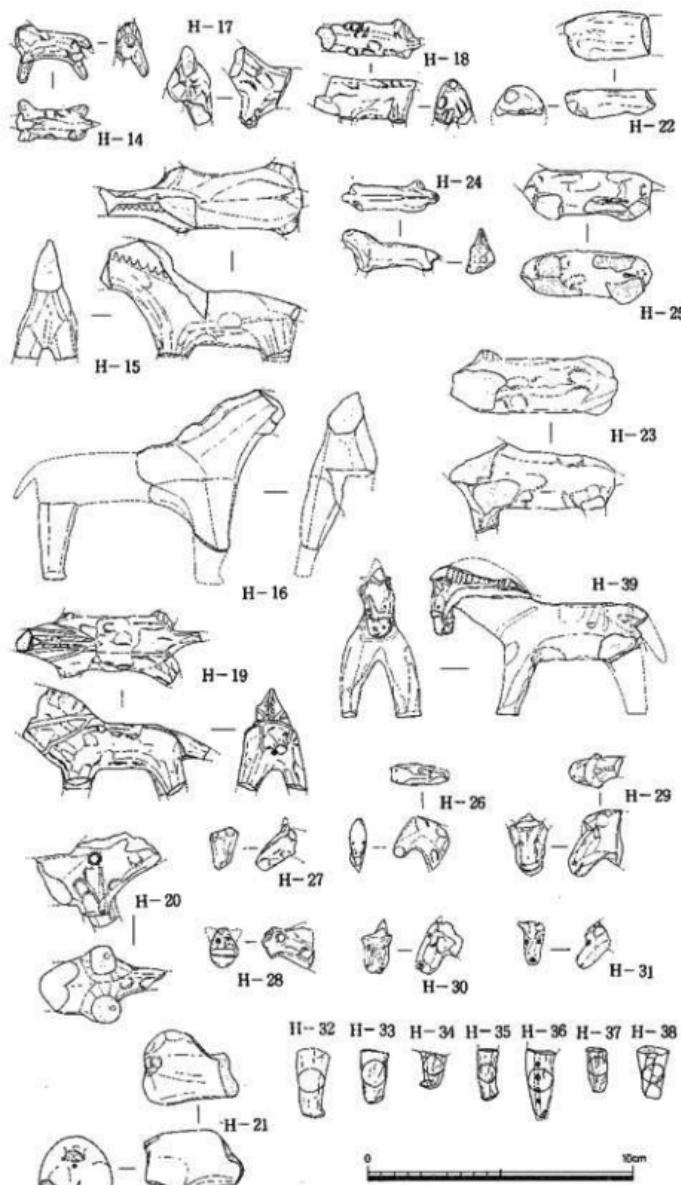
\* 雄の土馬 (H-4～H-10) H-4は頭部及び四肢、尾を欠損するが、股間に粘土を貼り付け先端部を竹管刺突して尿道の如く表現をしている。作りは丁寧で写実的である。尻尾の下部に1孔を穿ち肛門をしている。H-5と大変類似しているが、若干H-5の方がより写実的で丁寧である。H-6は同じく頭部及び四肢、尾を欠損する。H-4、5に比してやや大型となる。股間に粘土を貼り付け先端部は細い工具等で穿孔し尿道を表現している。尻尾下部には肛門孔も表現され、写実的な土馬である。H-7は現存長19.5cmある。顔と尾が欠損しているが完形であれば20cmを越える最も大型のものとなる。四肢も欠損している。股間に粘土を貼り付け男根をしているが尿道表現の刺突は、胸部に付けてあり、また男根表現も難である。しかしながら、背面は丁寧に調整されている。尾の部分に直径5mm、深さ7mmの肛門孔を有する。この土馬と同様な性器表現をするものはH-10があげられるが、これはH-7よりかなり小さく中型に属する。腹部から尾にかけてしか残しておらず、全体を伺い知ることはできない。しかし調整の丁寧さ、大きさから判断するとH-4、5、6と同様のものとなるかもしれない。H-8もH-7と同様に大型のものだが、頭部、三肢、尾を欠損している。股間に、睾丸や男根を表現する粘土を貼付している。全体的に写実的で丁寧な作りである。睾丸を表現するものは齒沢ではこれ1体しかない。

\* 雌の土馬 (H-11～13, H-25) H-11は四肢、頭部、尾を欠損するが、股間に1孔及び下腹部に1孔を穿つ雌馬である。作りは丁寧でヘラ削りとナデを併用する。同様に性器を表現するものはH-25があるが、これは背に難なヘラ削りがあり全体的にも粗雑な作りである。頭部、四肢、尾を欠損している。H-11と同様に肛門孔より離れたところに性器を表現する。両者と比較するとH-11の方がはるかに優品である。H-12は尾の下に2穴を穿ち、雌を表現するもので、H-13も同様の表現方法を行なう。H-12は大型の土馬で表面が磨滅しているので詳細はわからないがヘラ状工具によるナデや指ナデ調整痕が見られる。H-13は小型の土馬で指ナデ整形及び調整を施している。両方ともに頭部、四肢、尾を欠損している。

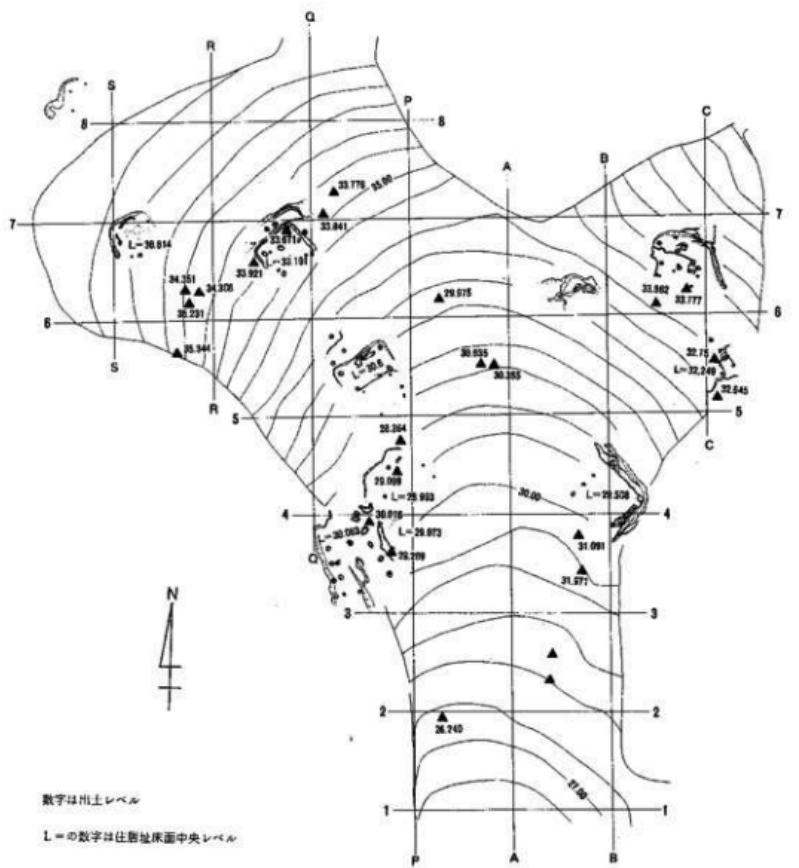
\* その他の特徴的な土馬 H-20は首のつけ根から前肢にかけて残存している。足は



第25図 土馬実測図 (No. 1)



第26図 土馬実測図 (No. 2)



第27図 藤沢A土馬出土地点図

折れているが、首のつけ根部に竹管文が施されている。足の折れた断面に孔が穿たれて、それが竹管文あたりの深さまで達している。いかなる目的で穴を開けたのか推理するしかないが、製作工程上の芯棒としたものか、或は使用時に棒を突刺するために穿孔したものであろうか。II-36も穴が貫通しているが、これは尻尾の部分だと思われる。自然釉が被っており、側面には4つの竹管刺突をしており、間隔が尾先端から8mm、9mm、10mmと広くなる。片側にしかなく、普通馬具を表現するのに竹管刺突を用いているが、

その類であろうか。貫通した穴はへの字に曲がっており、おそらく成形時に芯棒を使用した為と思われる。H-28は首から顔部が残存している。たてがみ、耳が欠損している他、口を成形時に切落しており、それがいかなる理由によるものか全く不明であるが、切断した面に口をヘラ描きにより表現しているので単なる成形上のミスによる切断かもしれない。この土馬の目の表現は前述した通り粘土を付け、その上から刺突するものである。

以上見てきた鷺沢の土馬であるが、ここで全体を整理したいと思う。まず飾馬であるが、間違いなく飾馬とされるものは2体あり、裸馬は23体ある。したがって観察可能なものの中での飾馬の比率は9.5%になる。雄雌を表現したものは、雄7体、雌4体であるが、これも観察し得る22個体中雄は32%，雌は18%，両性合せると半数が性別をつけたものとなる。また本遺跡では長さ10cm以下のものを小型、10~18cmのものを中型、18cm以上のものを大型としているが、小型のものは3体(H-13, 14, 24)で、型のわかるものの中で12%になる。これらの中で馬らしい様相を示すものが、H-13, 24で、内H-13は雌馬である。H-14は小笠原氏の分類されたG形式に類似している。中型のものは最も多く16個体あり、全体の68%にあたる。また大型のものは5体(H-7, 8, 15, 16, 21)あり、全体の20%である。その中でH-15はたてがみを波状に線刻してある。こういった土馬は管見の限りでは類例を見ない。また尾部に肛門穿孔したものがあるが、これは全体の54%にあたり、つまり半分以上が肛門孔を表現していることになる。

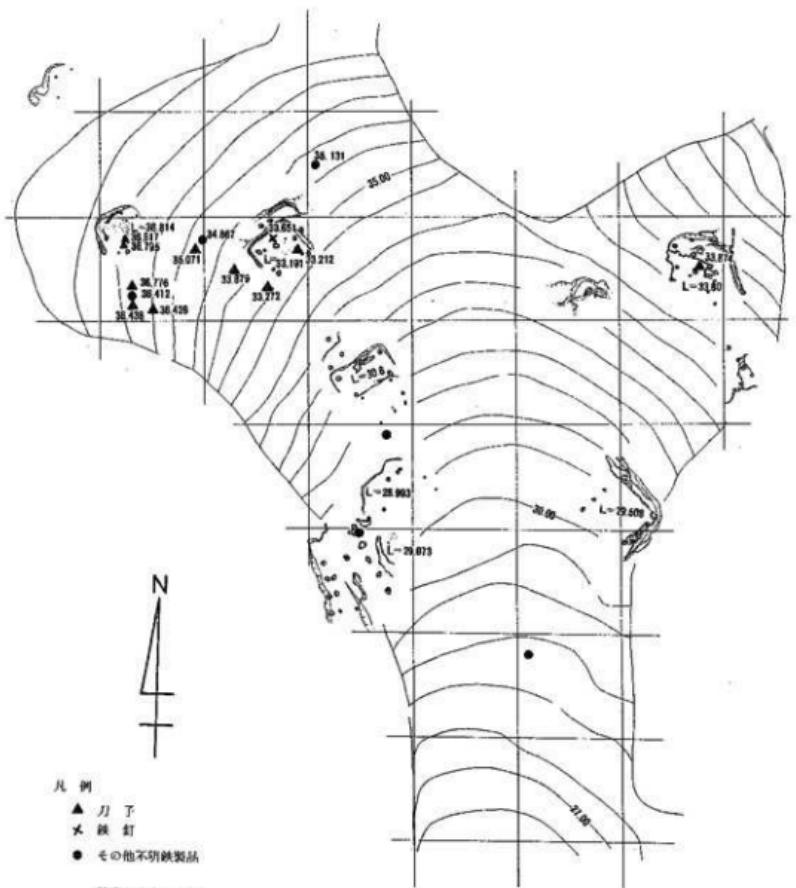
鷺沢出土の土馬は全体で37点を数えるが、その内完形に近いものはわずか1体しかなく、顔部が残るものも2体あるのみである。これは意識的に破壊したと思われるものである。また雌雄の区別をつけたものが観察し得るものの中の半数を占めることは、鷺沢の土馬の特殊性を物語るものであり、これらの土馬の祭祀がいかなるもので、その祭祀の裏にはどのような思想的背景があるのかについては「VI遺物の検討」に預けたいと思う。

(錦織慶樹)

註

- 註1 山本清『山陰古墳文化の研究』(山本清先生追憶記念論集刊行会 1971年)  
註2 島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書 一和田開地造成工事に伴う発掘調査』  
(1984年3月)  
註3 島根県教育委員会『朝鈴川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡調査報告書』(1981年3月)  
註4 木村泰彦「乙訓出土の土馬集成」(『長岡京古文化論叢』(中山修一先生古希記念事業会  
1986年6月)  
註5 註4と同じ  
註6 岡山県教育委員会『新庄尾上遺跡・美野条里遺跡・二反田B遺跡ほか』(1986年3月)  
註7 小笠原好彦「土馬考」(『物質文化』25 1975年)

註8 松江市大井町岩沙窯跡出土中のものにある（東嶽市良「朝駒の古墳文化」（『研究紀要』第1号  
松江市立女子高等学校 1970年））  
松江市馬渕町才ノ峰遺跡からも出土している（広江耕史「出雲の土馬」（『えとのす』16  
新日本教育図書 1981年10月20日）



第28図 鉄製品出土位置図

### 〔紡錘車〕

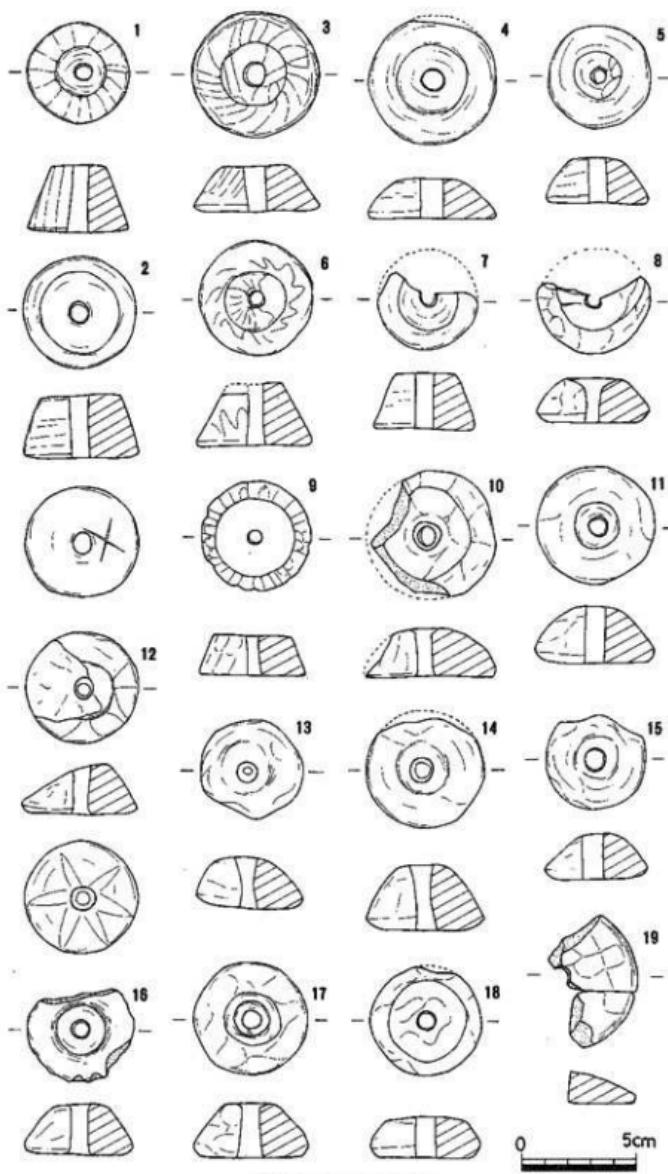
総数19個あり、須恵質のもの10個、土師質のもの8個、石製のもの1個である。1～10は須恵質のもので、磨滅や破損の著しいものもあるが、上部径2.0～3.5cm、下部径4.4～5.6cm、器高1.7～3.0cmを測る。外面は面取りを施したものやナデを施したものがある。穿孔は直線的に一方から行なわれ、10のように穴の上部、下部に面取りを施したものもある。2の下面には×のヘラ記号が施されている。6の側面に波状文が施されている。11～18は土師質のもので、須恵質のものより磨滅が激しい。上部径2.0～3.5cm、下部径4.4～5.2cm、器高1.8～2.9cmを測る。外面は磨滅の為不明である。穿孔は直線的に一方から行なわれたもの（11、12、15、16、17、18）と二方向から行なわれたもの（13、14）がある。19は石製の紡錘車で、赤色顔料が塗布されている。上部、下部ともに磨かれている。

### 〔土玉、土錐〕

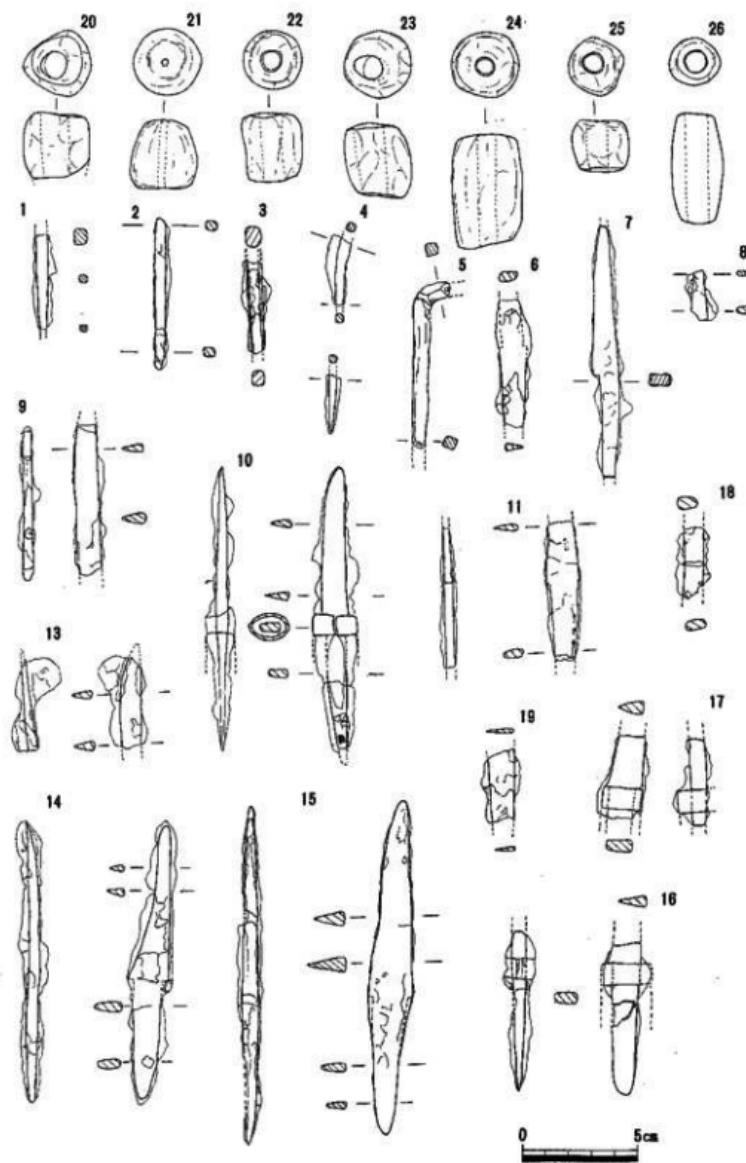
20～25は土玉である。20、22、23、25は円筒形、21はやや球形、24は砲弾形を呈している。21は孔の小さいものであるが、それ以外のものは0.8～1.1cmの孔径を持つ。外面調整は磨滅が激しくわかりにくいが、指の痕跡の残ったものもある。26は完形の土錐である。

### 〔鉄製品〕

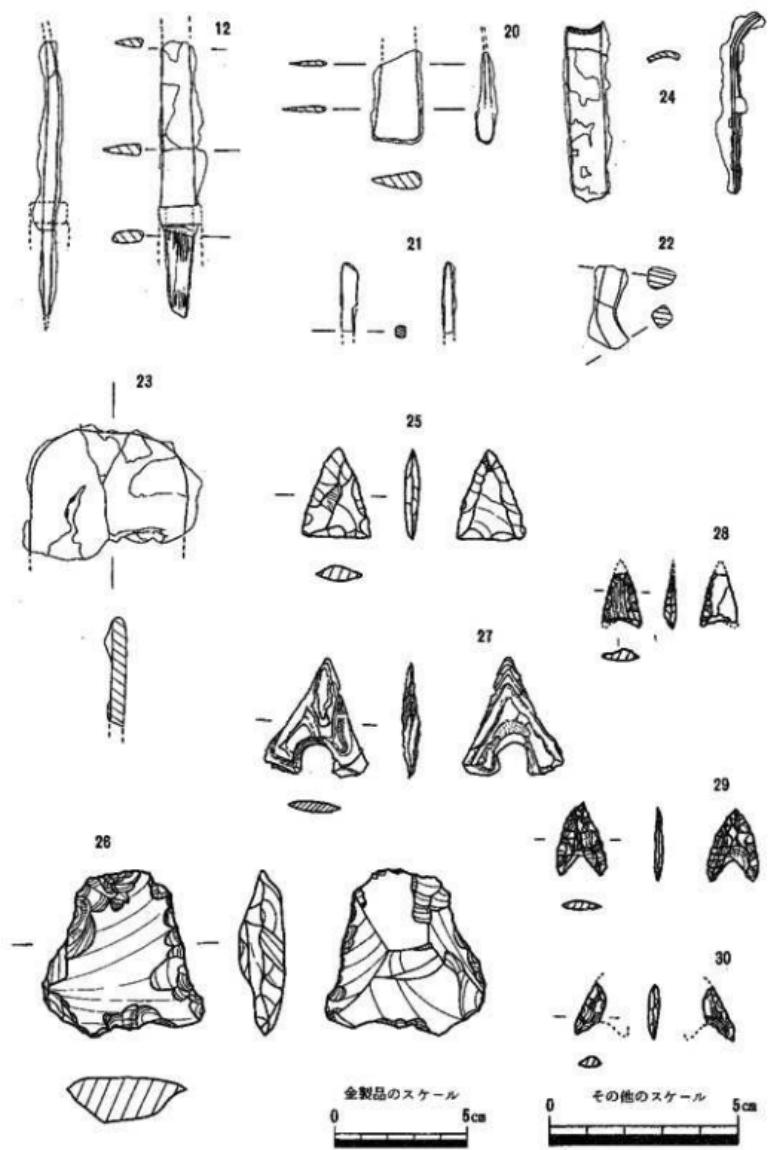
住居址内外合せて24個の鉄製品が出土している。1～5は鉄釘であるが長さ3.8～6.1cmまでしか残っていなかったので全形をうかがえるものは無かった。1～3のものは先端部と頭部が欠けているもので、4は先端部が残っていた。5は頭部が屈曲しているものである為、鉄釘でなくかすがいの可能性も考えられる。6～20は刀子である。6は長さ5.4cm、幅0.9cmで闊、茎の部分は不明である。7は長さ11.0cm、幅0.8cmで先端部と茎端部を欠くものであり、闊は刃闊のみ認められる。8は茎部分と思われる。9は長さ6.4cm、幅1.0cmで刃闊が若干認められる。10は長さ12.2cm、幅1.8cmを測り茎端部は欠損している。貴金属を持ち茎部分には木質が金属化して残っている。11は長さ5.9cm、幅1.0cmを測り刃の先端部と茎の端部を欠くものあり、刃、背ともに闊が認められる。12は長さ10.4cm、幅0.9cmを測り刃の先端部と茎の端部を欠くもので、先端部は若干屈曲している。茎には木質が残り、茎と刃の境に貴金属が認められる。13は刃の先端部で長さ3.9cm、幅0.9cmを測る。14は長さ11.9cm、幅1.4cmを測り完存している。刃は闊から先端部に向って急に細くなる。15は長さ14.0cm、幅1.3cmを測り完存してい



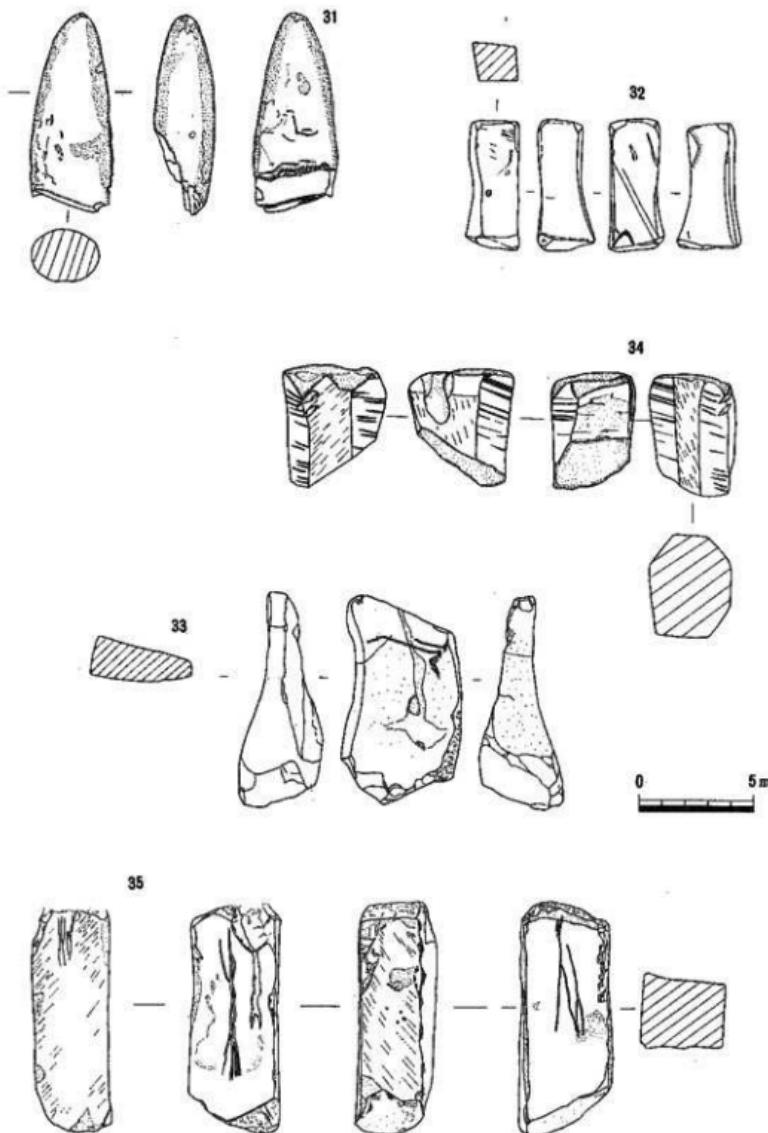
第29図 紡錘車実測図



第30図 土玉・鉄製品及びその他の遺物実測図



第31図 その他の遺物



第32図 その他の遺物

る。刃と茎の境の幅が厚いので、刃と背ともに間を持つものと思われる。16は長さ6.5cm、幅0.9cmを測り刃の部分は欠損している。刃と茎の境に貴金属が認められる。17は長さ3.1cm、幅0.9cmを測り、刃の一部分と貴金属が残存している。18は長さ3.0cm、幅0.8cmしか残存していない。19は長さ3.0cm、幅1.0cmのみ残存している。20は長さ3.4cm、幅1.6cmしか残存していなかった。21は鐵鎌の先端部と思われるもので、長さ2.6cm、幅0.4cmを測る。22は形態が不明のものであり、長さ3.1cm、幅1.0cmだけ残っていた。23は隅丸方形の鐵板状のもので用途は不明である。24は長さ6.3cm、幅1.3cmまで残っているが用途は不明である。断面は△形を呈しており、一方の端は屈曲している。

#### 〔石製品及びその他の遺物〕

25、27~30は石鎌である。25はサスカイト製、27は軽石、28は玄武岩、29、30は黒曜石でできている。最大長1.3~3.1cm、最大幅0.7~2.7cm、最大厚0.2~0.5cmを測る。26は黒曜石の未製品である。31は石斧で長さ11.9cm、幅4.2cm、厚さ3.2cmを測り玄武岩質のものである。32~35は砥石で材質は不明である。長さは5.2~14.4cm、幅1.8~6.2cm、厚さ1.6~4.3cmを測る。4面とも使用されたものや、1~2面のみ使用したものがある。36、37は勾玉であり、36は滑石製のもので小さく扁平な作りである。37はめのう製のもので表面を滑らかに仕上げていない。38、39は円玉である。40は金環で金メッキが施されている。外面は剥離していたが内面には残存していた。厚さ0.7cm、幅2.5cmを測る。

以上のように鷹沢A遺跡からは多量の紡錘車や鐵製品が出土している。紡錘車は全部で19個体出土しているが、県内の遺跡の内一遺跡からこれだけの数が出上しているのは稀である。またこの中で19のように石製紡錘車に赤色顔料を塗装したものが出土しているにも注意されるところである。鐵製品は25個の内15個は刀子が占めている。破損したものが多く形態を把握できるものが少なかった。刀子は7、9等のように刃闇のみ認められるものと、11、15等のように刃、背ともに間を持つものがあり、前者は三宅博士<sup>註1</sup>氏の論文によると古墳時代前中期のものであり、後者はそれ以後にあたるものである。鷹沢A遺跡の住居址は古墳時代後期から奈良時代にかけてのものであり、その遺跡から古墳時代前期頃の刀子が出土していることは興味深い。

(今岡一三)

註

註1 三宅博士「山陰地方出土刀子に関する覚書」(『山陰考古学の諸問題』1986年)

### 〔銅印〕

銅印は本遺跡の北側に位置するB-5区から出土した。B-5区には厚さ80cmの近年の搅乱土の堆積がありそれを除去するとその下層は旧表土層で、銅印はその層を2cm程掘り下げた地点から単独出土した。従って伴出遺物は皆無なので年代を推定することはできない。

銅印は鋳銅製で印面は2.7cm角の正方形で現高2.5cm、推定復元高は2.8cmになるとと思われる。現重量は24gある。銹化が激しいが印面の一部と鉢の中間部分は当初の状態が残し淡緑色を呈している。印面の縁は全て欠損し丸みを帯びている。鉢はその残存部の形態により陵の浅い苔鉢と思われ、上部に綫を通す直径4mmの円孔を有する。綫孔の上半部は欠損している。

木内武男氏はこの銅印について、印面が当時の方一寸に相当し、また苔鉢であることから平安時代の私印と判断されておられ、またそれを示す史料として「類聚三才格」に見える貞觀10年(868年)の「貞觀格」に家印として「一寸五分をもってその限りとなす」という一節を引用しておられる。

鉢については当時の鉢の形態として「弧鉢」「苔鉢」「丁鉢」の三種類があるが、その内官公印は皆無孔弧鉢であるらしく、この点から本遺跡出土の銅印はこの規格にあてはまらない。印面の大きさについては官公印は一つの規格があり、内印(宮中の諸印等)、外印(太政官印等)、諸司、諸國印等それぞれに大きさが規定されており、それによると全て二寸以上で、その点も官公印の規格にあてはまらない。<sup>註1</sup>

本遺跡出土の銅印の印文については全く解読不明で、従って字数や字割も当然不明である。しかし上下二段に分かれた記号と、中央よりやや上方にそれを画するような縦状に引いた線があり、これにより2つの意味を表わすのか、或はそれぞれが異なる意味を表わしているのか、それともそれぞれを合せて1つの意味を表わしているのか、種々の解釈を巡らすことはできる。しかしそれはあくまで想像の範囲を超えるものではなく、依然として印文の正体は不明のままである。この印文について木内武男氏は「神道、修驗道、仏教、特に密教的秘法による加持祈禱にかかる呪符、或は民間の俗信としての陰陽道などに関連した護符的な意味を持つものと考えられる。」と述べておられる。

以上のことから考えるとこの銅印は私印が出現する奈良～平安期のもので、呪符或いは護符的な意味を持つ家印か私印と考えることができる。この銅印はその出土状態からして萬沢検山の集落と関連づける事は難しいと思われるが、もし萬沢遺跡と関連があるとすれば、この銅印はこの集落の中で如何なる意味を持つのであろうか。萬沢遺跡は6世

紀後半～7世紀中位頃までに存続した集落であり、2万点にも及ぶ多量の須恵器や37点もの土馬、4個の須恵質の土鈴、14個体以上の須恵質の瓢、その他数例の手すくね土器等が出土した遺跡であり、銅印がこの集落に関係していたとすればそれはこの集落内で一体どのような役割をはたしたのであろうか、興味のあるところである。

最後に県内の銅印出土例としては、昭和12年に松江市大草町の出雲国府跡のある字「日岸田（ひがんでん）」という水田から出土した印文「春」1顆と昭和58年に八束郡下湯町の宮ノ上遺跡出土の印文不明の1顆があり、これが3例目である。

（錦織慶樹）

参考 銅印位体比測定結果

資料名	206Pb / 204Pb	207Pb / 206Pb	208Pb / 206Pb	Pb / Cu
銅印	18.419	0.8464	2.0890	0.5%
測定誤差	± 0.010	± 0.0003	± 0.0006	

上記の測定結果からすると、この銅印の原料は日本産で、山口県桜輝鉱山のものがこれに最も近い値を示す。（馬淵久夫・宮沢威『第3節 銅の材質調査』『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会 1987年3月による）

註

註1 会田富泰「日本古印新考」（1947年10月25日）

註2 郡印は大きさの割定はないが、印文が「○○郡印」というように4字制をとる。

参考文献

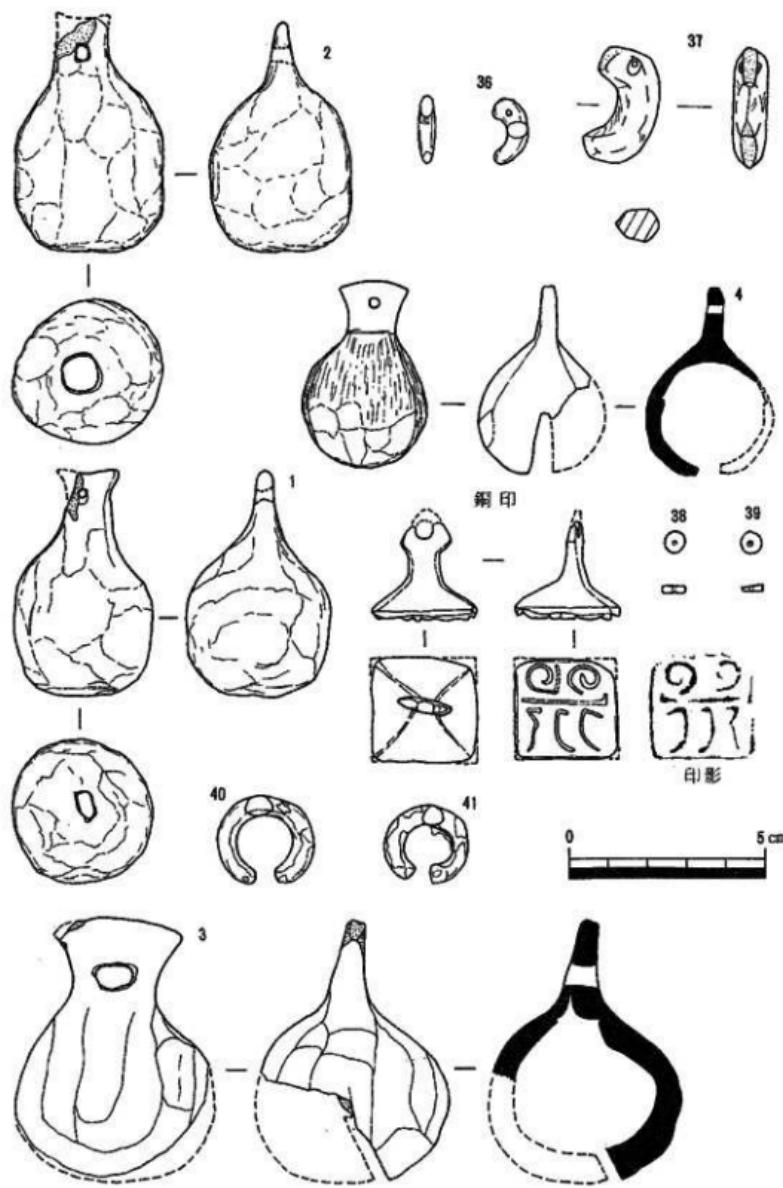
荻野三七彦「印章」（『日本歴史書』13 吉川弘文刊）

〔土 鈴〕

本遺跡では計4個の土鈴が出土した。いずれも須恵質で灰色硬質のもの。形態的に分類すると2種に大別できる。すなわち第1類は紐上端が左右両側に突き出し、中央部がやや凹み、中央に円孔を穿つ。体部は胴長の球形状を呈し、手すくねのまま外面は無調整。その底部に円または不定形の孔を穿ち、体部内に粘土粒を入れるもの。1と2の2個が該当する。

第2類は紐の形が上方に開く扁形を呈し、中央に円または不定形な孔を穿つ。体部は球形で面取りを施す。体部下半部に溝が1条穿たれている。紐もヘラで刃先に整形されており、特に4は整美な形を示している。3と4が該当し、大きさにばらつきが認められる。

第1類とした1、2はSB-07の床面から約25cm上層から出土しお互いに寄添うような状態であるので同時期のものと断定できるが、伴出土器の時期にはばらつきが認めら



第33図 土鈴・銅印実測図

れ確定できない。第2類の4はすぐ横から山陰Ⅲ期の坏身が伴出しているが、やはり各時期の建物が混在している土層であり、これも時期は確定できない。また3を出土した第3層は、山陰Ⅲ期から高台を付ける回転糸切り痕をそのまま残す坏まで出土しており、これも時期が確定できない。

そこで、県内の出土状況をみてみると、松江市竹矢町の才ノ峰遺跡から土鈴が2点、土鈴推定品が1点、石鈴が1点出土している。<sup>註1</sup>土鈴は手すくねのままで全体としては第1類に属するようであるが、紐の形や体部最大径付近にも小孔を穿つなど細部では異なる。才ノ峰遺跡の中心となった時期は7世紀後半から9世紀代であるといわれ、土鈴もその頃の祭祀遺跡としての性格を色濃く示す遺物と注目される。

最近では、松江市大井町の池ノ奥1号土壙上面からの鉢の上端が左右水平方向に著しく突出した土鈴が1個出土している。この時期は伴出土器から判断すると6世紀後半頃のものと思われる。

県外出土例はあまりない。畿内地方では全く出土していない。九州地方では福岡、佐賀、熊本各県で16遺跡出土しており、その形状は全て紐が先すぼりとなり、体部下半部に溝を穿つものである。時期的には5世紀後半から近世に至るものまで各時期にわたる。<sup>註2</sup>

今のところ池ノ奥出土例が最も古く、次に第1類が出土し、第2類は紐の形状が古印の鉢の内、無孔弧紐印の如く弧鉢に極似することと面取りを施す整美なものであることから、奈良期頃の所産と思われる。

古代において鈴は穀物を払う道具として使われていたようであるが、全国的に見ると出土例が少なく、その系統または変遷については今後資料の増加を待って検討したい。

(岡崎雄二郎)

註1 烏根県教育委員会『国道九号線バイパス建設予定地区埋蔵文化財発掘調査報告書IV』1983年

註2 中村勝『土製鈴の新例 糸島郡志摩町 藤穴池の出土遺物』(地域相研究会「地域相研究第13号」1983年9月) 所収

第4表 土 銘 一 覧 表

図版番号	法量及び形態の特徴	手法の特徴	備考
1	<p>鉢は厚み 0.5 cm 前後の扁平なもので上端部は左右やや上方に突出し中央部はやや凹む。横幅 1.1 cm。</p> <p>鉢孔は直径 0.2 ~ 0.4 cm。</p> <p>体部の底はやや平坦となり、中央部に 0.4 × 0.8 cm の不定形な孔を穿つ。</p> <p>体内部に直径 0.5 cm 前後の丸粒の土を 4 個入れる。</p> <p>全高 5.65 cm。</p> <p>体部最大径 3.5 × 3.7 cm を計る。</p> <p>全体に灰白色。</p>	全体に器面は手づくねのままである。	P - 5 区 S B 0 7 の床面上約 25cm の上層から出土。 No 1 と No 2 はほぼ隣り合わせに接して出土。
2	<p>基本的には No 1 と同様である。</p> <p>全高 15.90 cm。</p> <p>体部最大径 3.0 × 3.75 cm を計る。</p> <p>鉢の厚み 0.5 cm 前後の扁平なもので、上端部は左右やや上方に突出し、中央部はやや凹むものと推定される。</p> <p>横幅 1.35 cm。</p> <p>鉢孔は直径 0.35 cm の不定形なもの。</p> <p>体部の底は平坦となり、中央部に直径 1 cm の略円形の孔あり。</p> <p>内部に直径 1 cm 余りの丸い粒の土を 1 個入れる。</p> <p>全体に灰白色。</p>	No 1 と同様である。	同 上
3	<p>推定高 6.7 cm、体部最大径推定高 1.3 cm、鉢の厚み 0.7 cm 前後、横幅 2.15 ~ (推定) 3.25 cm を計る。</p> <p>鉢は瘤形を呈し、鉢孔は 0.6 × 0.9 cm の横円形である。</p> <p>体部は球状で、厚みは 0.5 ~ 0.85 cm を計り下部に長さ約 6 cm の溝を施す。</p> <p>青灰色を呈する。</p>	<p>体部を手づくねで作り出した後、上部に鉢の部分を付ける。</p> <p>体部は 10 面余りの面取りを施す。</p> <p>各面はやや凹む。</p>	Q - 7 区 第 3 層（暗赤褐色炭化り土層）出土。 84 09 06 山土。
4	<p>鉢は瘤形を呈し、厚み 0.45 cm 前後、高さ 1.3 cm を計る。</p> <p>中央部に直径 0.25 cm の鉢孔を穿つ。</p> <p>体部は球状で 4 面の面取りを施し、ヘラでタテ方向に整形している。</p> <p>厚みは 0.1 ~ 0.4 cm を計り、下部に長さ約 5 cm の溝を穿つ。</p> <p>全高 4.75 cm。</p> <p>体部最大径 3.2 cm 余りとなる。</p>	<p>体部の上半部と下半部を半球状に作り出して接合した後、鉢の部分を付ける。</p> <p>4 面の面取りを施し、全体にヘラで丁寧に整形するなど最も優美な仕上りである。</p>	Q - 6 区 S I 0 5 南西約 2 m の地点から出土。

## 7. 小 結

鹿沢A遺跡からは堅穴式住居址6棟、掘立柱建物8棟、柵状遺構2列を検出した。それぞれの住居址から多量の土器が出土しており、そのほとんどが6世紀後半から7世紀前半にかけてのものである。この事から察すると、本集落は6世紀後半から営まれ始め、7世紀中頃には廃絶していた事になり、集落としての機能を果たしていたのは非常に短期間であったと言うことになる。ここで何故短期間で廃絶したかという問題が起つて来る。しかし表土や覆土中からは7世紀以降の土器も多く出土しているので、今回検出した住居址以外にもまだ複数の住居があった事が推測されるのではないだろうか。だが、今回の調査ではそれらを検出する事ができなかった。それらは谷間の斜面に住居を構えていたため、おそらく自然災害等によって谷間が崩壊したことにより、確認できなかつたのではないだろうか。次に住居址の性格についてふれてみると、各住居址からおびただしい量の土器が出土しているため、一般的な住居として簡単にかたづけることができないのではないだろうか。本遺跡出土の須恵器を見ると、窯体の付着したものや、生焼けの状態のもの、変形したものが少なからず目についた。このような不良品が集落にもたらされていると言う事は、少なくとも須恵器生産との密接な関係が伺えるのではないだろうか。出雲国風土記に「大井浜。則ち海氣、海松あり。又陶器を造れり。」<sup>註1</sup> という記載があり、大井地区が須恵器生産地であった事が伺える。本遺跡の周辺には、風土記の記載通り、勝田谷窯跡、明曾窯跡や池ノ炭窯跡等の多数の窯跡が知られている。大井地区の窯跡は、山陰Ⅰ期のものを出土した廻谷窯跡から始まり、山陰Ⅲ期以降に盛んし、糸切り底を持つものの段階で衰退するようである。これらの窯跡は本遺跡の極近い距離に所在し、また、本遺跡の時期と窯の盛行期の年代がほぼ一致している。前述したように本遺跡の住居址からは通常では考えられないほどの多量の須恵器が出土しており、周辺には窯跡が多数所在していることから、須恵器工人の集落だったという推測もできるのではないだろうか。また、土馬や土鈴、手づくね土器等の祭祀遺物が多量に出土している事も注意されるところで、祭祀遺跡としての可能性も充分に考えられるが、これらが多量の須恵器とどのような関係にあったのか、今のところ不明としか言わざるを得ない。今後住居址や窯跡の調査が進み、大井地区の須恵器生産等について明確にしていかなければならぬであろう。

(今岡一三)

註1 加藤義成『出雲國風土記参究』(松江今井書店)

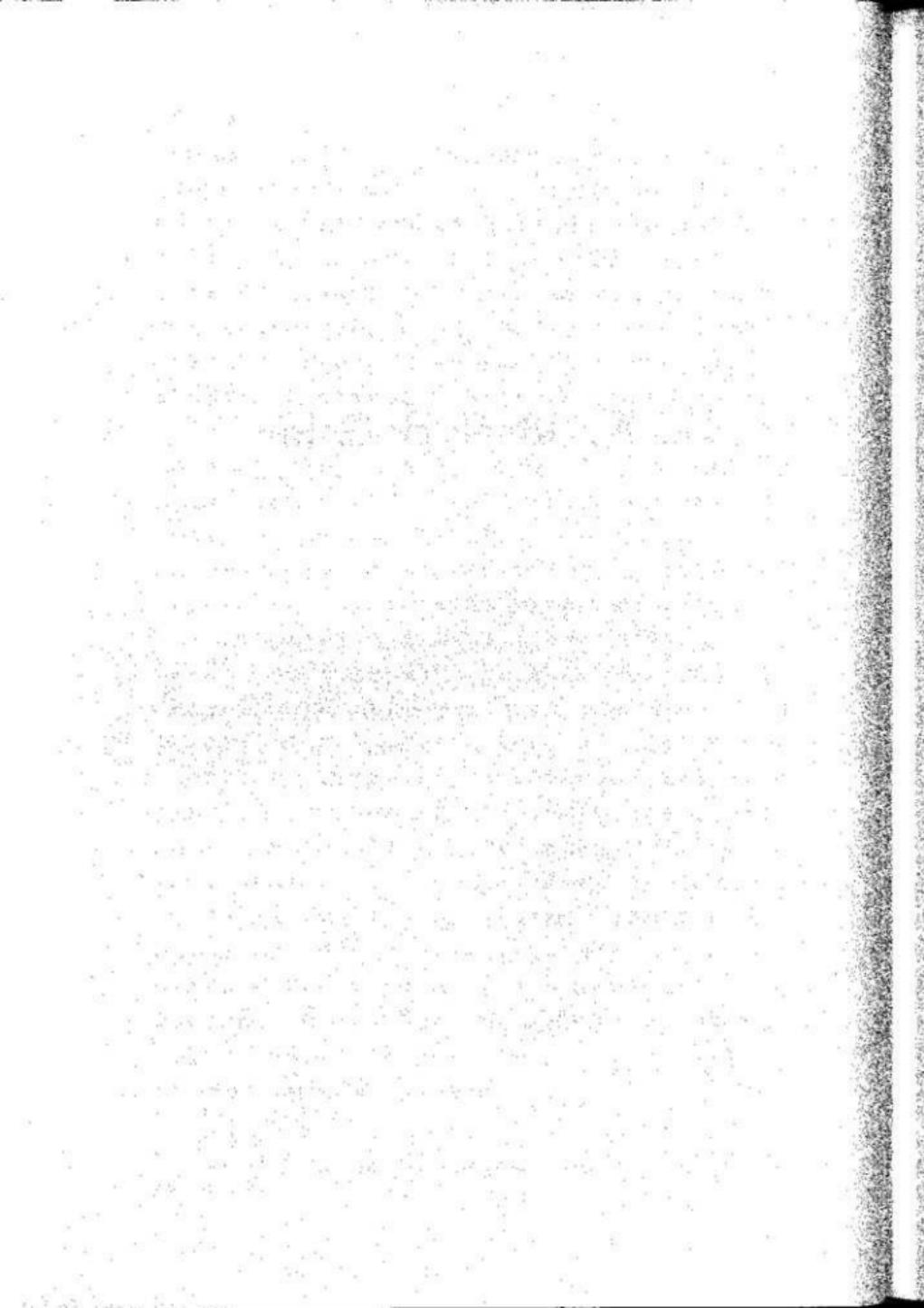
註2 P 4 II位置と歴史的環境参照

註3 註2と同じ

註4 1986~87年に松江市教育委員会が発掘調査を行ない、現在報告書作成中

註5 註2と同じ

## IV. 薦沢 B 遺跡



## IV. 薙沢B遺跡

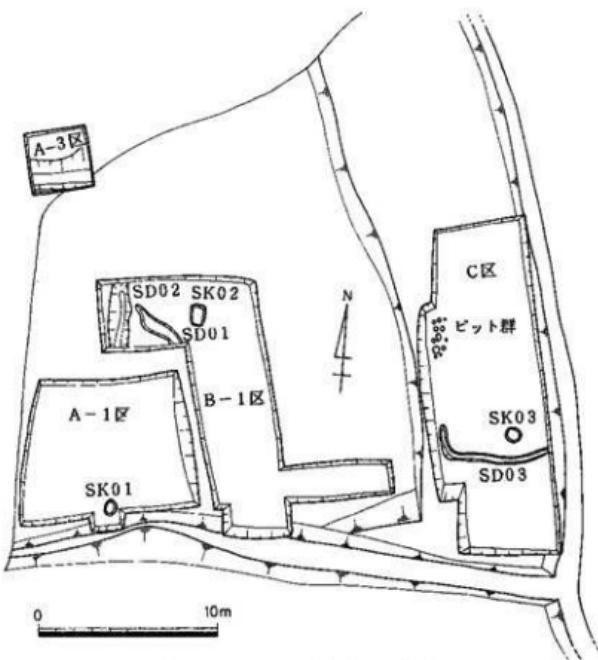
### 1. 調査の経過

薙沢B遺跡は薙沢A遺跡から東約300mの大井町1064番地に所在し、北側に入り込んだ狭い谷間に位置している。

原状は階段状に作られた畠地である。昭和57年度に試掘調査をしており、その結果直径97cmの円形土壙と石列2条を検出した。円形土壙は奈良～平安期の土器を包含した黒褐色土層を分断して掘り込んだもので江戸期以後掘り込まれた「野塼」の類と思われる。

石列もまた堆積土のかなり上部に構えているので、新しい時期のものと思われる。また、この石列の北端からは須恵器の子持塼の破片が出土している。

このように、まだ遺構が残存している可能性が強いものと思われたので、本調査を実施するに至った。



第34図 薙沢B遺跡調査・平面図

調査区の設定は、下段の一番広い畠地を2分して、西側をA区、東側をB区とし、それをさらに谷間の入口から奥にかけて、1, 2, 3区とした。また、A, B区の東側、一段高くなっている所をC区として調査を開始したが、調査期間、及び排土場がない等の悪条件が重なり、全面を調査する事が困難となり、やむなくトレンチ調査に切り替えた調査区もあった。

調査期間は、昭和59年11月21日から昭和60年2月6日まで、計39日間を費やした。

## 2 調査の概要

### (A 1 区)

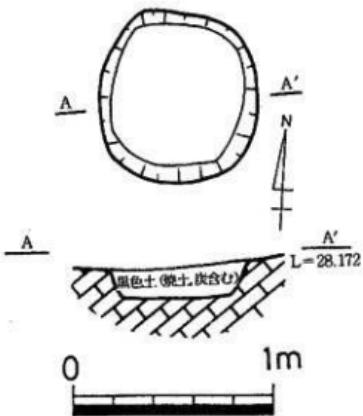
10×10mのグリッドで、深さ1mで地山面に至る。

その間、遺物包含層と呼べるものではなく、各層からは少量ではあったが、須恵器、土師器の小片が出土しており、とくに表土下30cmの所の擾乱土中で小馬が1個体出土しているのが注意された(第35図)。

グリッドの南壁側の地山面で円形の土壙(SK 01)を検出したのみで、それ以外の遺構は確認できなかった。

### <SK 01>

調査区の南端中央に位置する円形の土壙である。



第35図 SK 01平面及び断面図

規模は上縁で80×88cm、下縁で70×72cm、深さ15cmである。底面はほぼ水平になっていた。遺物が出土していないので、時期は不明である。

### (A 3 区)

東西10m×南北5mのグリッドである。表土下40cmまで掘り下げたところで、幅1.5m、深さ80cmの溝が東西方向に延びているのが認められたが、その先は擾乱を受けていた為に、長さ5mまでしか検出できなかった。

遺物は須恵器、土師器の細片しか出土しなかった。

この溝は第3層目から掘り込まれてい

るので、昭和初期にここがまだ田として利用されていた時に作られたものであろう。

#### (B区)

調査の進行上、B1区とB2区のグリッドをトレンチに変更して調査をした所である。

南北15m、東西4.5mのトレンチ及び、このトレンチの南端から東へ延びる6×2mのトレンチと北端から西へ延びる5×2mのトレンチを合せてB区とする。

調査の結果、土壌1(SK02)、溝状遺構2(SD-01, 02)、集石遺構1を検出した。遺物は第4層目の暗褐色土層から小型丸底壺が出土しているほか、磨滅した須恵器、土師器片が少量出土している。

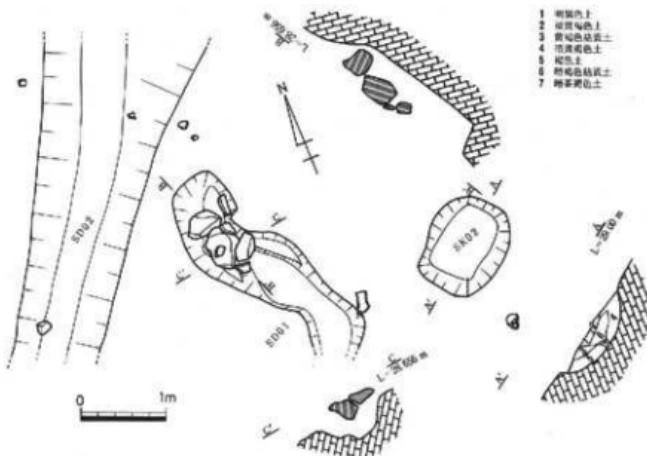
(第39図) 小型丸底壺は肩部がやや張り気味で、口縁部は外傾して伸びるものである。全体的に磨滅が激しいが、口縁部内面に一部ハケ目が残る。口径8.8cm、器高8.1cmを計る。

#### <SK02>

調査区の北側で検出した長方形の土壙である。

規模は上縁で1.2×0.95m、下縁で0.85×0.58m、深さ30cmである。底面は円形になっている。壁面は焼けているが、底面には見られず、埋土中に炭化物と焼土が多量に含まれていた。

遺物が出土していない為、時期、性格は不明である。



第36図 B区遺構平面図

#### <集石遺構>

S K 0 2 の西側 2 m の地点で検出した。

8 個の石で構成されており、各石はいずれも角張った自然石であり、18~50cmまでのものである。積み方には規則性はなく、無造作に石を集めて積んだような感じである。

#### <SD-01>

集石遺構の石の下から検出した、幅 80cm、深さ 40cm の溝で、南北に延びている。

溝の北端は集石遺構の下で終っているが、南側は調査範囲が限られていた為に調査ができず、長さは確認し得た範囲で 2.8 m であった。

平面形は直線状、断面は「U」字形を呈す。

溝内からは遺物が出土していないので、時期は不明である。

#### <SD-02>

SD-01 の西に位置する。幅 1 ~ 1.9 m、深さ 約 10cm 程度のもので、地山から掘り込まれており南北に延びている。長さについては調査範囲が限られている為、確認し得たのは 3.7 m であった。

平面形は浅い「コ」の字形を呈する。

遺物は須恵器の壺の胴部片が出土しているが、詳細な時期は不明である。また、SD-01 や集石遺構の周辺からも SD-02 内出土の須恵器壺片と同じものが出土しているので、SD-01、02、集石遺構は同時期のものと思われる。

#### (C区)

南北 20m、東西 5.5 m のグリッドである。深さ 1.1 ~ 1.3 m で地山面に至る。遺構は全て地山面に掘り込まれており、調査区の南側で円形の土壙 1 (SK 03)、溝状遺構 1 (SD-03)、中央部分付近でピット群を検出した。遺物は第 2 層目の黒色土中で子持ち壺の破片が出土しているほか、須恵器、土師器の小片が出土している。

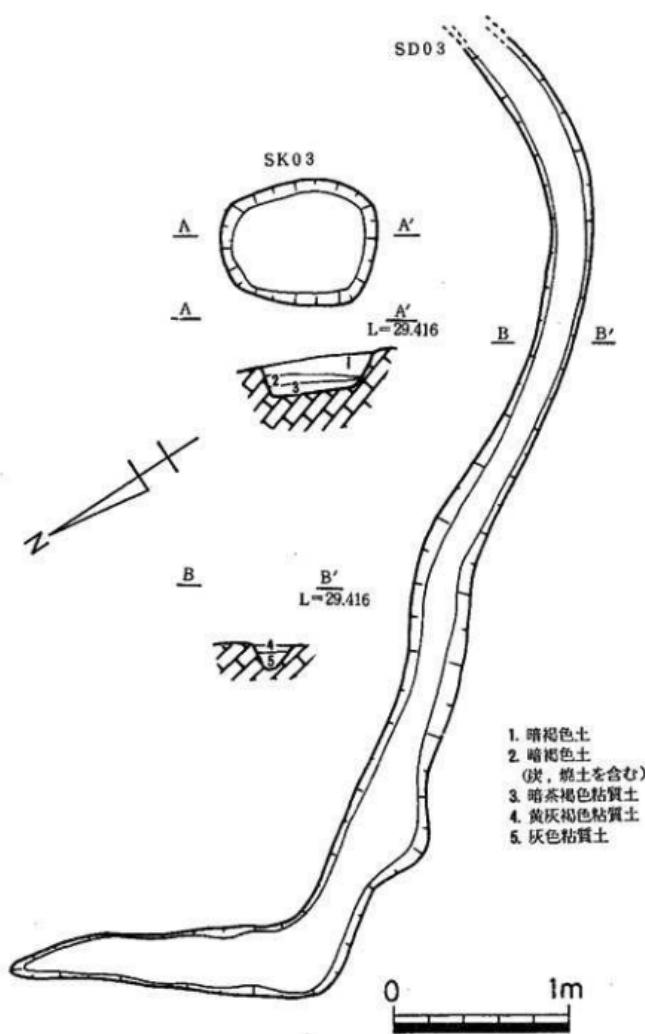
(第39図) 2 子持ち壺は、小壺の部分だけのものであり、親壺との境の面に孔が 1 つ穿たれている。内面にはあて具痕があり、外表面はナデが施される。

#### <SK 03>

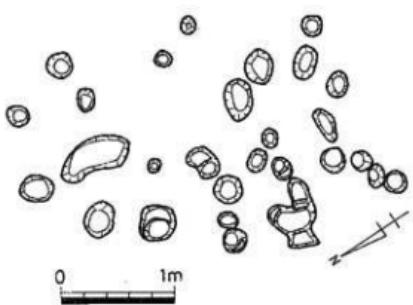
規模は上縁で 92 × 72cm、下縁で 74 × 58cm、深さ 20cm である。平面形は隅丸長方形を呈している。底面はほぼ水平になっていた。

壁面は焼けているが、底面には見られなかった。埋土中には SK 02 同様に焼土と炭化物が含まれていた。

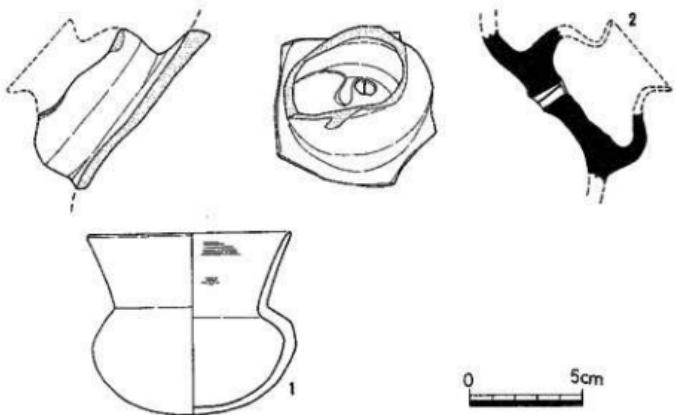
土壙内から遺物が出土していないので、時期、性格は不明である。



第37図 SK03, SD03 平面図



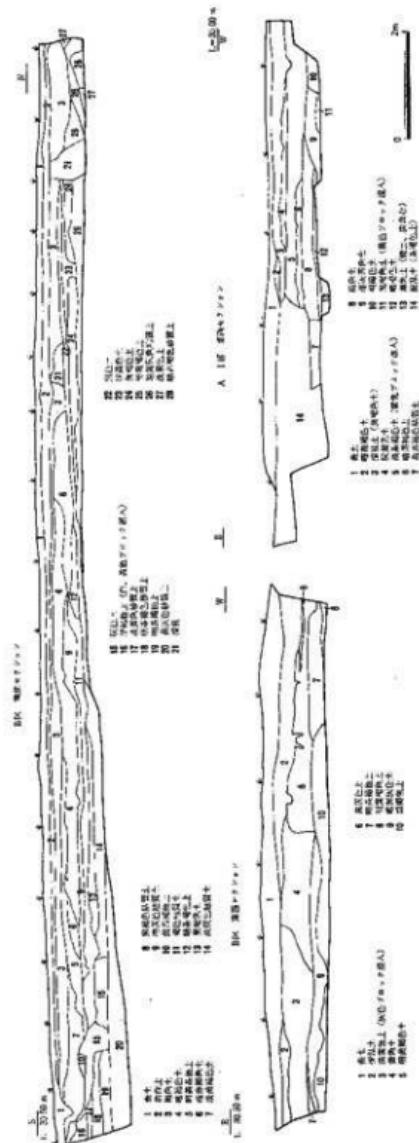
第38図 ピット群平面図



第39図 出土遺物実測図

<SD-03>

SK 03の南側1mの地点にあり、東西に伸びる溝である。幅は25~40cm、深さ15cmで、断面は「U」字形を呈する。遺構の東端は調査区外に延びる為確認できなかった。西端は調査区の西壁側で北に屈曲しているのを確認したが、その先は消滅していた。長さは確認し得た範囲で約7mであった。



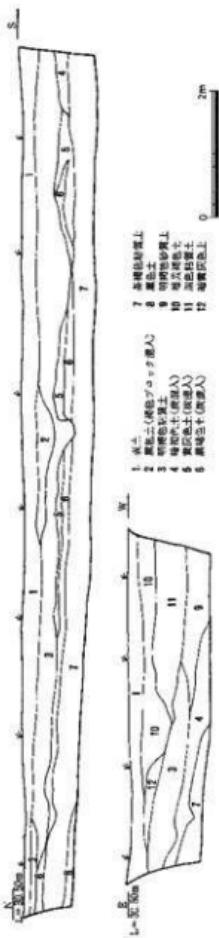
時期については遺物が出土していない為に

不明である。

#### <ピット群>

S D - 0 3 の北側約 5 m, 調査区の中央付近に位置する。確認できたものは28穴であり、 $4 \times 3$  mの範囲に集中して存在していた。径約40~12cmまでのもので、深さは10~20cm程度のものである。これらピットの埋土は全て褐色土層であるので、同時期のものと思われる。このピットの性格については、集中して存在し、かつ小規模なものである為、建物であったのかどうか、今のところ不明である。

ピットの中より磨滅した小師器の小片が出土地しているが、時期を決定するには至らなかった。



第41図 C区断面図

### 3. 小 結

本遺跡では、土壌3、溝状遺構3、集石遺構1、及びピット群1を検出した。遺物は須恵器、土師器片が少量出土しているが、時期の判明するものは数少なかった。

SK02、03はともに壁面のみ焼土層となり、底面には焼土が見られない土壌であった。しかし、壁面が焼土層になっている為、やはり火を焚く為に穿った土壙の可能性が高く、炉のようなものとして使用されたものであろうか。

註1

このような土壙は県内では類例が少なく、管見では浜田市の中川原遺跡の1例のみである。ここでは底面にも焼土層の見られる土壙が検出されているが、本遺跡の土壙と同様なものと思われる。

溝状遺構については調査範囲が限られていた為に、規模などを知ることができなかつた。また、その性格についても水路であったのか別の用途をもつたものなのか、調査区内ではその様相を伺うことができず、SD-02においては溝の上に石が積まれていたことから他の溝状遺構とは別の性格を持っていたのかも知れない。

ピット群については全部で28穴検出したが、これらが建物の柱穴としての機能をはたしていたかどうか判断できなかつた。しかし発掘調査区全体から見ると、ピットを検出したのはC区のみであり、ここは他の調査区より高い所に位置している為、住居が営まれていた可能性も考えられる。

以上のように、薺沢B遺跡について、遺構の性格や、時期など不明な点が數多く残された。今後、薺沢A遺跡や別所遺跡との関連も考慮しながら明らかにしていかなければならぬであろう。

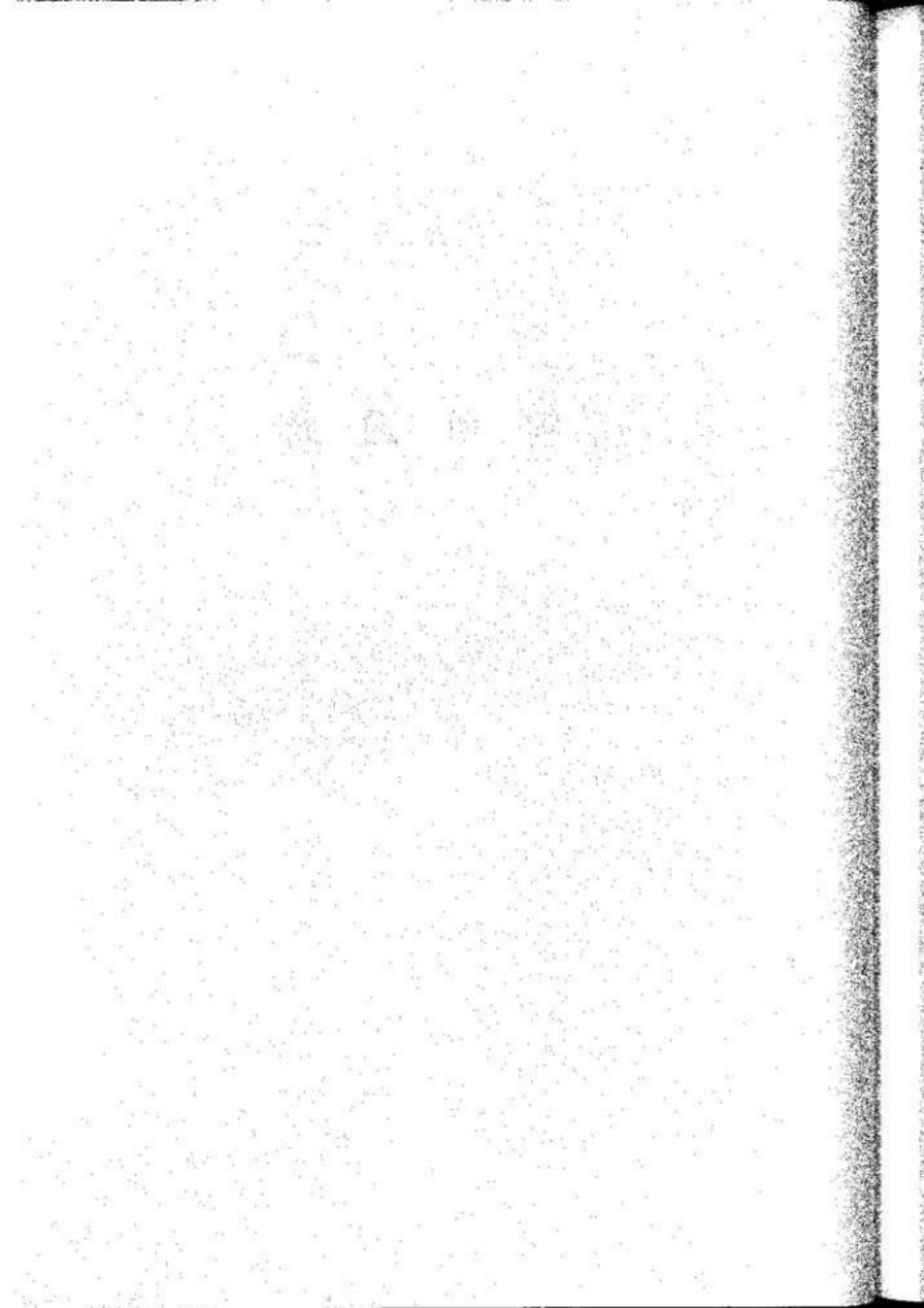
(今岡一三)

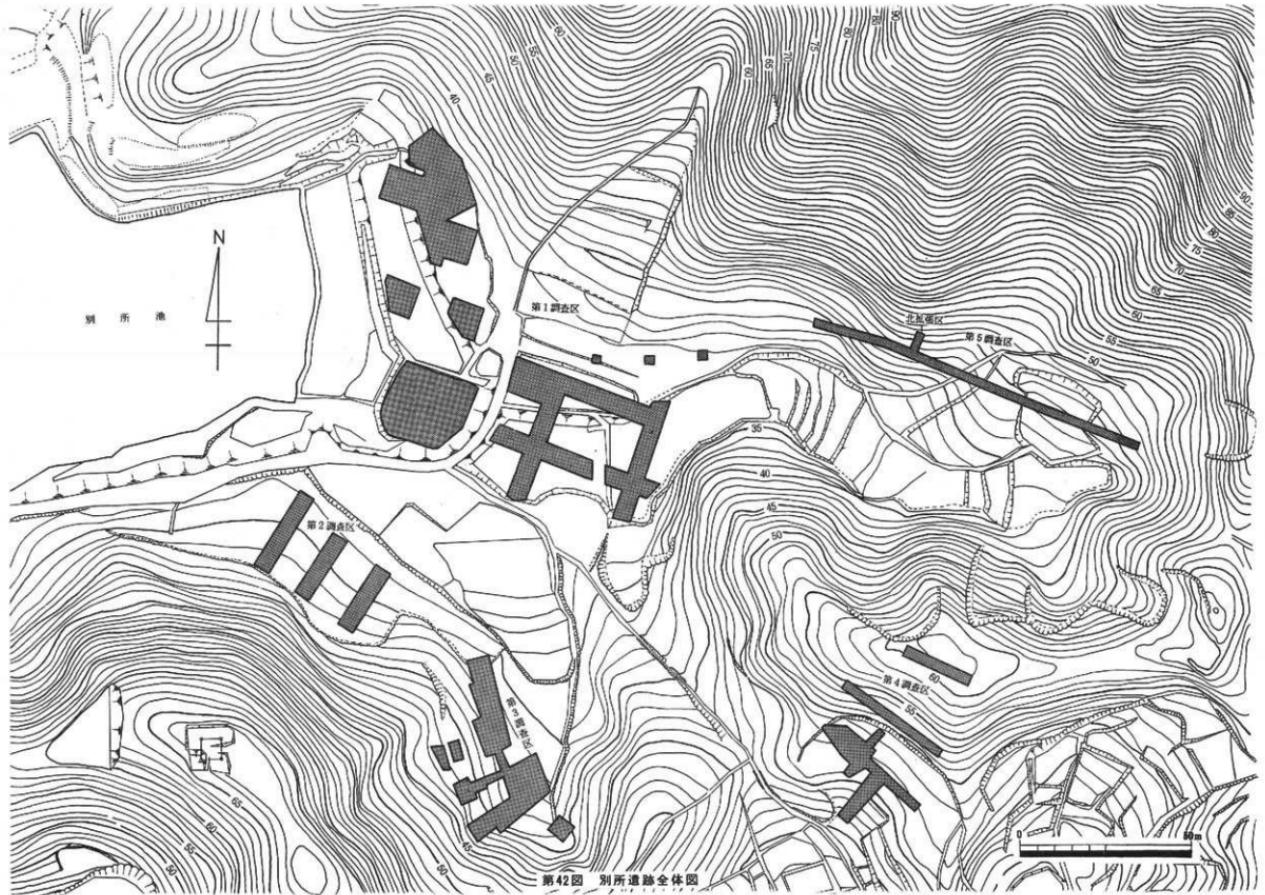
註1 島根県教育委員会 日本道路公团広島建設局「中川原遺跡」

(『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』 1985年3月)



V. 別 所 遺 跡





第42図 別所遺跡全体図

## V. 別所遺跡

### 1. 調査に至る経緯

本遺跡は南北幅50m、奥行200mほどの西方へ入口をあける小さな谷間である。谷の中ほど南側には薺沢B遺跡に通じる峠道が所在する。東部から北部にかけては標高60~120mの急峻な山なみが連なる。薺沢A遺跡にいくには、南部の高い尾根を越さなければいけない。谷間の西方入口には、現在別所池と呼ばれる溜池がある。谷奥部の山裾と入口の溜池付近では10mほどの比高があり、かなり傾斜していることが分かる。

この谷間に遺跡があることが判明したのは、昭和57年度に実施した試掘調査の結果である。すなわち第43図に示す通り、谷の中ほどに4mグリッドを設定し調査した結果、耕作土の下は概して砂層で、須恵器に混じって中世陶器片も出土した。このことからこの谷間には古墳時代後期から中世にかけての住居跡のあることが推定された。

### 2. 調査の概要

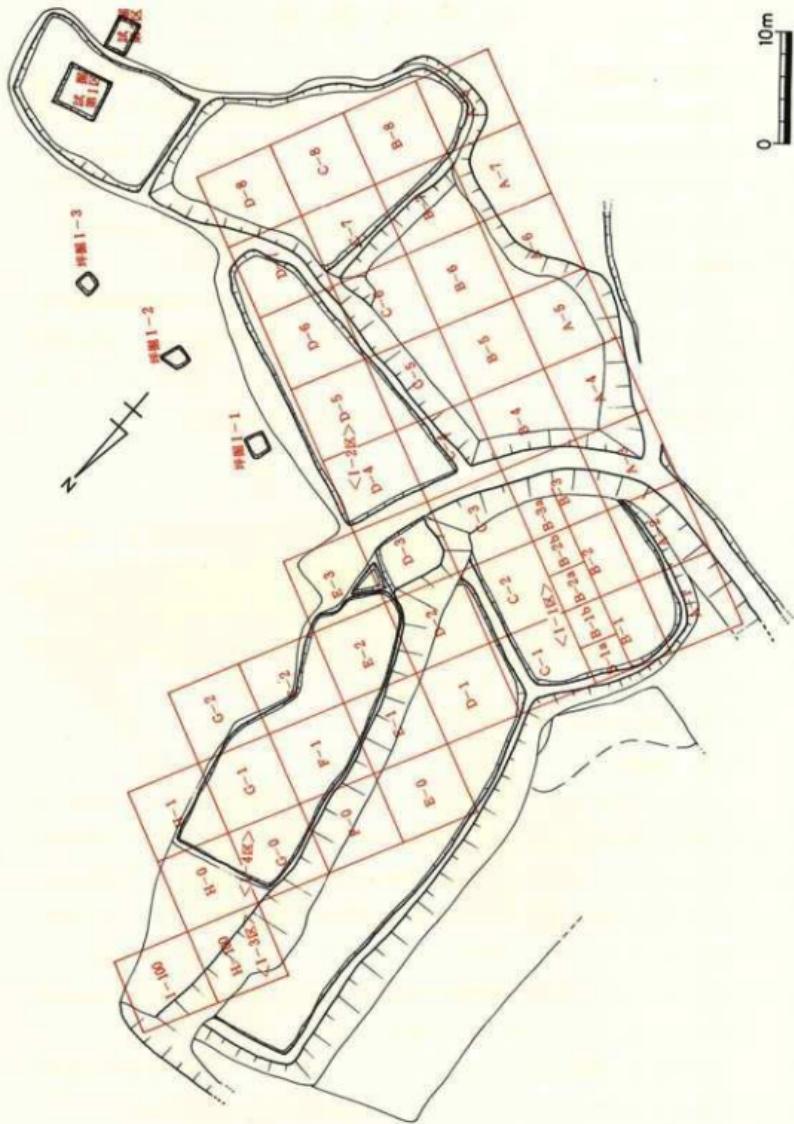
本調査は昭和59年7月24日から昭和60年2月5日までの内、計128日間を要して実施された。調査区は遺構の残っている可能性の高い緩傾斜地と水田谷底部を中心に設定し、その後調査の進捗状況に応じて周囲に一部拡大すると共に、県教委の指導により第2、3、4、5調査区を新たに設定した。

### 3. 各調査区の概要

#### 〔第1調査区〕

別所池の東に広がる水田中に所在する。昭和57年に試掘調査を行なった。谷の最も奥にある水田中に設定した4×4mのグリッド(第1区)からは、転石に混じって中世の土器片が出土している。第1区の南側の山林中に設定した2×3mのトレンチ(第2区)からは若干の須恵器片が出土したのみである。昭和59年度の本調査にあたっては、水田一帯に10mグリッドを設定し、南から北へむかってA、B、…Iとし、西から東にむかって1、2、…9としたが、調査範囲の拡張に伴い、1よりさらに西へ0、100として調査を行なった。グリッドの南北軸はN29°Eである。

調査の結果、遺構はなかったが、B-2、B-3を中心として中世の土器片、須恵器等がコンテナに約8箱分出土した。この区域を記述の都合上I-1区とする。D-4、D-5では中世のピット群が検出された。この区域をI-2区とする。H-100では6



第43図 第1調査区グリッド設定図

— L=30.000m

B-1 a

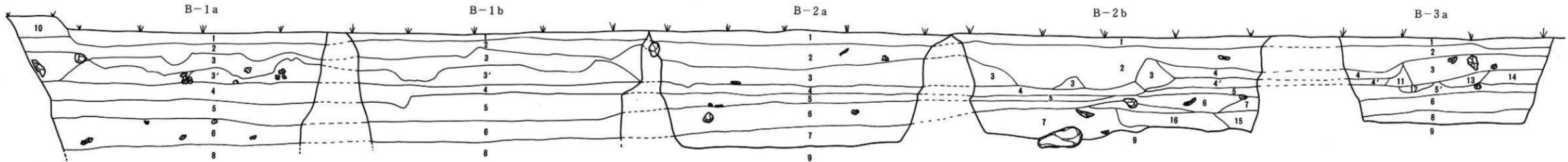
B-1 b

B-2 a

B-2 b

B-3 a

B-1～B-3 北壁セクション



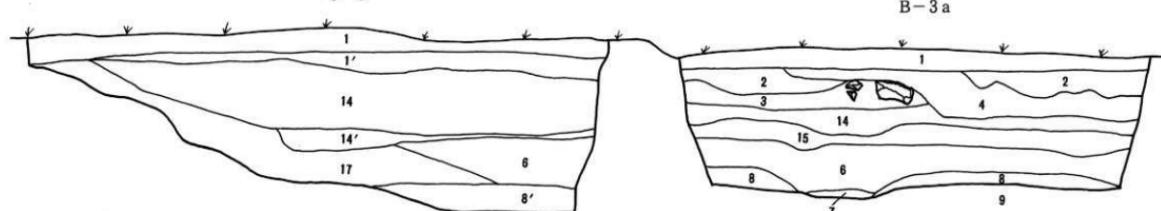
- |                    |                          |
|--------------------|--------------------------|
| 1 水田耕作土(茶褐色粘質土)    | 9 灰色砂質土(地山)              |
| 2 赤褐色粘質土(礫混入)      | 10 褐色土(小礫混入)             |
| 3 青灰色粘質土(礫, 転石混入)  | 11 茶色土                   |
| 3' 茶褐色粘質土(礫, 転石混入) | 12 茶灰色粘土                 |
| 4 暗緑色土(旧水田耕作土)     | 13 茶褐色シルト                |
| 5 灰褐色粘質土(礫, 転石混入)  | 14 濃茶色粘質土(礫, 転石混入)       |
| 6 黒褐色粘質土(礫, 転石混入)  | 14' 14に礫のみを含む            |
| 7 淡緑色砂質土(礫, 転石混入)  | 15 青灰色粘土                 |
| 8 灰色粘質土            | 16 蒼褐色土                  |
| 8' 淡黄～灰色粘質土        | 17 暗茶褐色粘質土(桃色大, 中, 小礫含む) |

— L=30.000m

C-3

B-3 a

C-3～B-3 a 東壁セクション



第44図 第1調査区・I-1区のB-1 a～B-3 a北壁セクション図

～7世紀を中心とした多量の須恵器が数層にわたって出土した。この区域をI-3区とする。I-3区の東側のF-1, G-0, G-1, H-0, H-1, I-0では古墳時代後期から中世にかけての掘立柱建物とピット群が検出された。この区域をI-4区とする。(第43図)

#### <I-1区>

##### 遺物包含層について

B-1～B-3区の北壁土層断面(第44図)で、観察すると、1～3層(B-3a区では1, 2層まで)までとが、昭和53年旧水田面に客土して田面をかさ上げした部分である。従って遺物も層位的に把握できず、出雲国序2, 3型式の壺類や備前系の摺鉢等の中世陶器に混じって亀山系の雜器もある。

第4層は暗緑色七で、旧水田耕作土である。B-2b区の中途で一段高くなり、B-3a区でさらに一段と上がる。遺物は、かなり時期幅のあるものを大量に含んでいる。すなわち、山陰Ⅲ期、IV期の蓋壺類、出雲国序1～5型式の壺類、近世の陶器の他、窯壁塊も含んでいた。

第5層は疊や転石を多量に混じえる灰褐色を基調とした土で、亀山系土器の他出雲国序1～3型式の須恵器類や土師器の罐片を含んでいる。

第6層は、黒灰褐色粘質土で疊、転石を多く含む。亀山系土器の他、土師器の灯明皿や近世の摺鉢も含まれていた。

第5層と第6層の界面には遺物が多く、特にB-2a区では多量に包含されていた。

第7層はB-2a～B-2b区では淡緑色の砂質土で疊、転石を多く包む。第6層との界面には遺物が多く、特にB-2b区で多量に包含されていた。遺物には亀山系土器の他、高台付壺等の須恵器類を含んでいる。第8層はB-1a, B-1b, B-3a区では灰色粘質土で遺物はなくなる。

第9層は灰色砂質土で地山であり、この調査区では全体に東北方向から西南方向へ下がっていく。

以上見てきたように各層ともに遺構は全くなく、各時期の遺物が混在して包含されていた。又、土層も現耕作土と旧耕作土以外は殆んど疊や転石を混じえ、とりわけ5, 6, 7層は多量に認められた。これらのことから、この谷間は最初中世から近世にかけて大きく3回ほどの大きな山津波のような天災にみまわれ、住居部分等が多量の疊や転石と共に押し流されたことが考えられる。それは遺物が5層と6層、6と7層のそれぞれ界面に集中していることからもうなづける。

遺物の内、亀山系土器は谷間の北部（I-3区、I-4区）、南部（第3調査区）や東奥部でも少量出土していることから、もとの住居部分はそうした山裾に求められよう。

#### 出土遺物

出土遺物には第13表の通り須恵器、土師器、亀山焼系統の土器、土師質土器、陶器、磁器、鉄製品、銅製品の他、窯壁塊がある。これらの遺物はコンテナにして8箱分に相当し、その内1箱分が須恵器類、他の7箱分が亀山焼系統の土器片であり、土師器は非常に少ない。

又、層位との関係でみると、前述したように第1層から第3層までは近年の埋土であり、第4層から第7層までも各時代の遺物が混在している状況であるから、層位的に遺物の前後関係を知ることは残念ながらできなかった。

従って須恵器についてはこれまでに提示されている山本清、柳浦俊一両氏の編年を参考としたい。

一方、亀山焼系統の土器については当地域に類例が少ないと、広島県福山市草戸千軒町遺跡出土の亀山焼窯の編年を参考しながら前後関係を考えていくこととした。

**須恵器**（図版31） 年代観の分りやすい蓋坏類を中心に見てみると、最も古い段階の須恵器は山本編年でいうところの山陰Ⅲ期の蓋坏である。坏蓋は口縁部内面に沈線を付けるⅢ期の中でも典型的なものである。（S-1, 2）このⅢ期のものは量的に少ない。

山陰Ⅳ期のものはわずかに坏身が2点出土しているのみで、やはり数量は少ない。（S-3, 4）

次に山本編年Ⅳ期以降のものを見てみよう。まずS-5, 6はしっかりとしたかえりのつく式のもので、柳浦編年第1式に平行する。同じくS-7～14は高台の底外面を回転ナデで調整する坏や蓋類で、柳浦2式に平行する。S-15, 16は底外面を回転糸切りによって切離した後回転ナデ等によって調整する段階のもので、柳浦3式に平行する。柳浦2式又は3式のいずれかに所属するか決し難いものにS-17～21がある。

S-22～25, 26, 27～33, 34, 35, 36, 37, 38～43は、底外面を回転糸切りによって切離しその痕跡を調整しない坏や蓋で最も破片の量が多い。柳浦4式に平行する。柳浦3式又は4式のいずれかに所属するか分からぬものにS-44, 45がある。柳浦5式に該当するものは見当たらない。

このように須恵器について見ると、山本編年のⅢ期頃から始まり柳浦編年の第4式まで連続していることが分かる。相対年代でいうと本遺跡は西暦6世紀後半頃から8世紀

代まで何等かの生活領域に含まれていたことが分かる。

その他の須恵器についていえばS-46, 47, 48のように通常の形態とやや異なる盤や鍋もある。又、カメ(S-49, S-53)や壺(S-50)の他に特異な鉢(S-51)や瓶(S-52)もある。須恵器壺片の中には、内面の押当具が通常の同心円文ではなく菊花文状或は放射線文の特異な押当具を使用した破片が見受けられる。(図版32, S-54~59)

**土師器**(図版32) 土師器は全体的に量が少なく、実測できたものはわずかである。H-1は土製支脚である。H-2は壺の突帯部分と思われる。

**土師質土器** (図版32) H'-1は軟質の皿で口縁部に油煙痕跡が認められるので灯明皿である。H'-2は有脚小壺の実足式のもので、壺部内面は炭素が吸着し黒色を呈する。壺部から底部外面にかけては一部にベンガラ様の橙色の顔料を塗装している。H'-3は皿で、体部内外面と底部内面は細い横ナデ、底部外面は静止糸切りによる切離しと思われる。

**龜山系統の土器** 鍋：(図版26)2種ある。第1類は口縁を外反させ端部を内湾させるものでK-1~8がある。この内、K-6は口径43.5cmを計る大型のもの。草戸千軒町遺跡出土のものに比べて端部がよりシャープに仕上げられている。

第2類は口縁部が直線的に外傾するものでK-9~20がある。この中でも硬質で須恵器質のものについてはこね鉢の可能性もある。

K-9, 10, 11は、口縁部断面が直角で口唇部がやや凹む傾向を示しており、壺の変遷と同じであれば鎌倉期の段階のものであろう。

次にK-12のように口縁部断面がやや銳角状となり、更にK-13, 14, 16, 17のように口縁部が上下方向に肥厚する傾向となり、K-19, 20では更に下方に拡張していく。

その他、K-21~25はいずれも浅い鍋状の器型となるが、類例に乏しくはっきりした用途は不明である。ただこの内K-23, 25はほうろく鍋によく似ているといわれ、案外そのような用途であったかも知れない。

蓋：K-26, 27, 28は釜である。この内K-26は口径22cm、胴部最大径25cmを計る。3点ともに口縁が内湾し端部から2~3cm下方に幅1~1.5cmのつばを付ける。口縁からつばまでは横ナデ、それ以外は横ハケ調整を施す。

三足：K-29, 30は三足の部分である。鍋又は釜に付くもので、いずれも瓦器質。K-30の体部内面は横ハケ調整である。

鉢：K-31～34はこね鉢の片口部である。口縁部の断面を見るとK-31、34は直角で、他のものより古い時期のものである。

壺：K-35、36は出土位置と土層が違うとはいえる、同一個体の可能性がある。口径11cm、頸部径9.4～9.8cmを計る。小型のもので全体に瓦質で暗灰～黒色を呈する。K-37は小型の壺で底外部はヘラ切りと思われる。全体に淡灰色を呈する。

甕：(図版28) K-38～56(図版29)、K-57～66が該当する。草戸千軒町遺跡での編年からすれば本遺跡出土の例はかなり時期的に幅がある。すなわち、K-39は頸部から口縁部にかけ大きく外反し、口唇部の断面はほぼ直角であることから草戸のⅠ期に該当するものである。

又、K-40の口唇部の断面はK-39と変わらないが、口唇部外面に縦ハケ目調整が施されており、新しい要素である。草戸のⅡ期後半の段階に比定できるものである。

次にK-41は口唇部の断面がやや鋭角になる。頸部から口縁部の外反が強まるタイプのものであるが、これは草戸ではⅣ期の前半に位置づけられている。

さらにK-54、56、58、59、60、66はこの口縁部が上下に拡張し始めるものであり、草戸のⅣ期後半に比定できる。草戸のⅤ期に比定できるものは無い。

底部：鍋又は鉢の底部と思われる。全て平底でK-67、68、69、71は体部に比べて底部の厚みが一様に薄く5～6mmしかない。他にK-70が該当する。

その他体部の破片として、図版29のK-72、73、74、75、76、77、図版30のK-78、79、80があるが、図版29の72～77は、内面に同心円押当具痕をわずかに残すものである。

陶器(図版32) T-1は備前系の摺鉢だが時期は不明。T-2は内外面共に灰白色系統の陶器である。T-3は口縁部を折返して肥厚させた摺鉢で近世のもの。その他(T-4、5)も全て近世のものである。

磁器 J-1、2、3はいずれも青磁碗の破片で、この内J-1は蓮弁文を表現するもの。

#### 遺物の検討

以上、遺物を概観してきたように古墳時代後期(西暦6世紀後半頃)から8世紀末～9世紀初頭までの蓋杯類を主体とした須恵器類が見られ生活の痕跡があるが、直接的な遺物である土師器が非常に少なく、どの程度の居住空間があったのか不明である。

平安期のものははっきりと特定できないが有脚小壺又は台付皿と呼称されているものが1点出土している。これと同類の物は松江市・石台遺跡、同・天溝谷遺跡、同・出雲

国造館跡遺跡で多量に出土しており、平安～鎌倉という大雑把な年代観が与えられているに過ぎない。本遺跡出土例は、外面が赤色顔料で塗彩されているので祭祀用具として使用されたものだろう。

次に中世の土器では、コンテナにして7箱分というかなり大量の亀山系統と目される一群の土器がある。これらは時期的に平安期に含まれるものは無く、鎌倉以後15～16世紀代まではほぼ継続してその変遷がみられる。

県内では広瀬町・富田河床遺跡、東出雲町・大木椎現山古墳、松江市・竹矢小学校藏品、同・出雲國造館跡遺跡、同・上東川岸地区遺跡、同・大井町岩沙地内遺跡、同・天満谷遺跡、鹿島町・塚田遺跡、大東町・狩山経塚、仁万町・坂灘遺跡で出土しており、外面に格子目印を有する整は出雲國造館跡遺跡、狩山経塚、天満谷遺跡では13世紀前半という年代が与えられている。

亀山系の土器の中には須恵器と変わりない青灰色で硬質のものがいくつか見受けられる一方、灰色の軟質の焼きのものも相当有り、瓦質と思われる。こうした焼きの違いが、同じ窯の中でもその置かれた位置によって火度の高低が違うために生じた結果であるのか、或は全く別の系統を持つのか今後検討を要するところである。さらに注目すべきことは、これらの大量の破片の中に二次的に加熱を受けた破片がかなり大量に含まれていることである。

これは総数3,875片の内、371片に達し全体の1割弱になる。二次的に加熱を受けた原因については土器の収納されていた住居が焼失し共に壊れて焼けたことが考えられるが、K-18、34、39のようにかなり高温を受けないと見られないような器面の変化が認められるので、それらの土器を焼成していた窯の焼き損じの破片かもしくは焼き台等窯道具として使用された破片ではないかと考えられる。

そのように考えてみると、亀山系土器に併行する時期の土師器が異常に少ないこともうなずけるような気がする。つまり、あまり生活臭のしないことの裏返しは中世において亀山系の土器の生産の場であったからではないかということである。

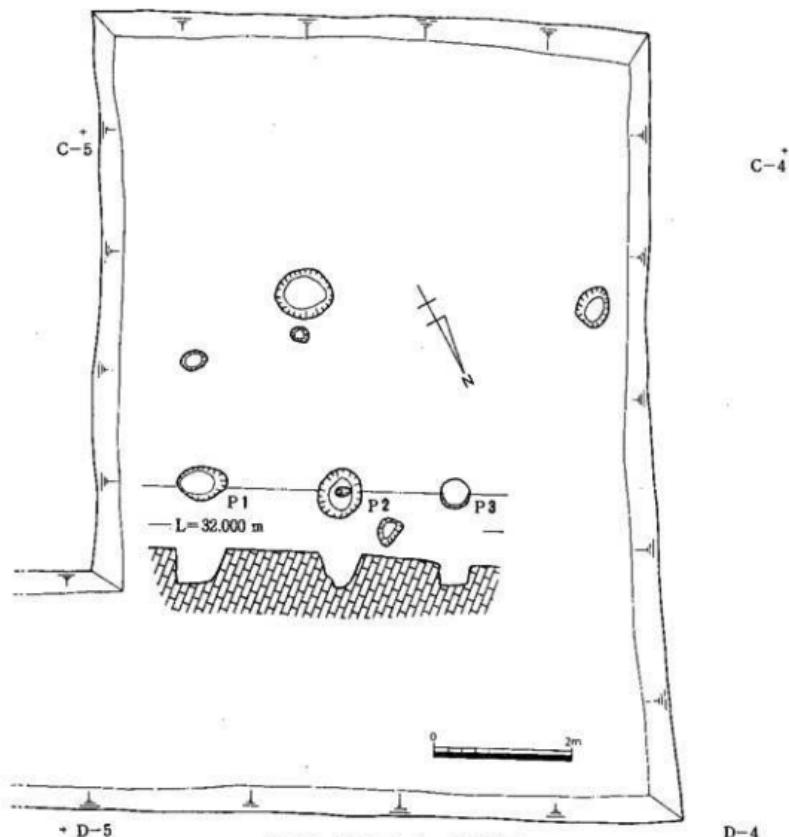
土器の出土状態や包含層の関係からすれば窯体は既に崩壊し消失しているものと思われる。出土した窯壁塊が関係するものかどうかも分らない。窯体は恐らくA区の南側斜面か谷奥部の斜面であろう。調査範囲が狭いので窯体を確認するに至らなかったのは極めて残念である。

こうした土器の成形、調整が岡山県を中心に検出されるいわゆる「亀山焼」に類似していることはいうまでもないが、窯関連の遺物が認められたことから山陽地方で生産さ

れた亀山焼そのものが当地域へ搬入されたものとは考え難く、むしろ大井地区における古墳時代以来の須恵器生産の伝統を背景にし、山陽との経済交流の上に形成された中世の土器生産と流通の実態を伺い知ることができる好資料ではないかと考える。

こうした中世窯業が成立した背景には須恵器生産の技術を持合せた前代からの職能集団が存続していたことが考えられる。

ただ今回、平安後期の実態が殆ど解明されておらず、別所地区では空白期があるやに見受けられるが、今後周辺地域の調査が進めばかならずその空白が埋められていくものと考えられる。



第45図 第1区・I-2遺構図

今後は、平安期の須恵器、土師器と共に中世の日常雑器の生産と流通の問題を地域的視点からとらえ、検討しなければならないだろう。

(岡崎雄二郎)

#### <I-2区>

I-1区からは農道を隔てて北東に位置し、一段高くなった山裾の水田中にある。標高は約33mである。表土下1.5mの地山の1層上層で、柱穴と思われる並んだビット3穴、及びその他のビット5穴(第43図)を検出したので、南北に拡張して精査したが、新たなビットは検出できず、建物と断定することはできなかった。ビットの法量は、P1(上端径70×47cm、深さ50cm)、P2(60×70×50)、P3(42×43×38)、P4(58×47×37)、P5(80×70×30)、P6(37×25×16)、P7(27×21×17)、P8(38×30×28)である。P3内より備前焼の摺鉢の口縁部(図版33、G-1)(室町後期)が出上しているので、これらのビットが掘り込まれたのもこの頃であろう。

周辺の出土遺物では、上層より出土の鉢型土器(1-9)、中層より出土の円形透かし孔を持つ須恵器の高坏(1-11)、及び紹聖元宝(宋銭、1094年初鑄)(F-1)、最下層より出土の坏蓋(1-82)(山本編年I期)、高环形器台(1-63)(1-82と同時期か?)等が注目される。

#### <I-3区>

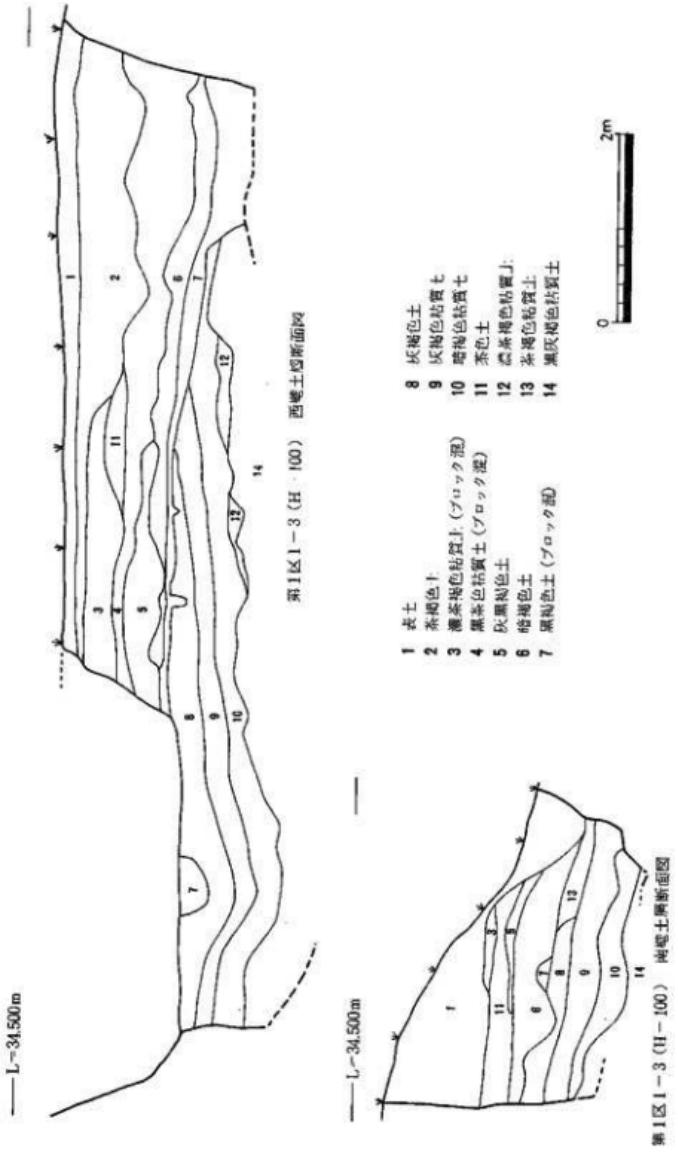
第1調査区北部の水田は東側の山裾から三段に分かれているが、その最上段の水田の土手にあたる部分であり、堆積土及び地山面はかなり西に落んでいる。広さは約40m<sup>2</sup>である。

#### 土層について (第46図)

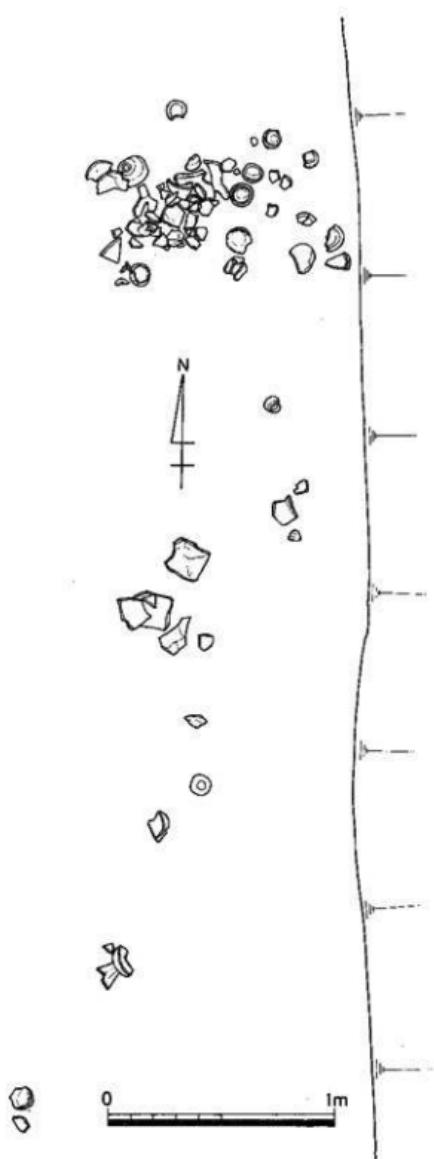
表土から第4層までは0.6~1.4mを測り、茶褐色系の土層が占める。第5~7層は、北東部分では黒褐色系の土層、南西部では褐色系の土層が0.3~0.6m堆積している。第8層は灰褐色土で0.2~0.6mを測り、南東部を中心に浅くV字状に堆積し、北及び西ではなくっている。第9層灰褐色粘質土は0.2~0.4m、第10層暗褐色粘質土は、0.15~0.35mを測り、いずれも第8層と同じような堆積状況を示しているが、西側にはまだ続いているようである。第8層の上面において、土壤1(SK01)と小ビット2を、第10層が北側でなくなる地点から土壤1(SK02)を検出した。これらの遺構には全て第7層の黒褐色土が流入していた。第10層の下には部分的に濃茶褐色粘質土が堆積する以外は黒褐色粘質土の地山面であり、表土から地山までは1.7~2.3mを測った。

#### 遺構について

SK01(第48図)：プランは不整形で、南西部では済状を呈す。最大長(北東~南



第46図 第1区・I-3(H=100)の土層断面図



第47図 第1調査区（I-3）第8層遺物出土状況

西) 2.2 m, 南北長 1.15 m, 深さ 0.2 ~ 0.4 m を測る。埋土は黒褐色土であった。遺物は、土壇の南壁に沿ってずれ込んだ形で、須恵器の壺蓋（1-121）（山本編年IV期）が出土した。  
SK 02（第48図）：東側が切られているが、プランは長方形であろう。上縁の残存長径 0.9 m, 短径 0.6 m, 深さ 0.3 m を測る。埋土は黒褐色土で遺物はなかった。

#### 各層出土の遺物について

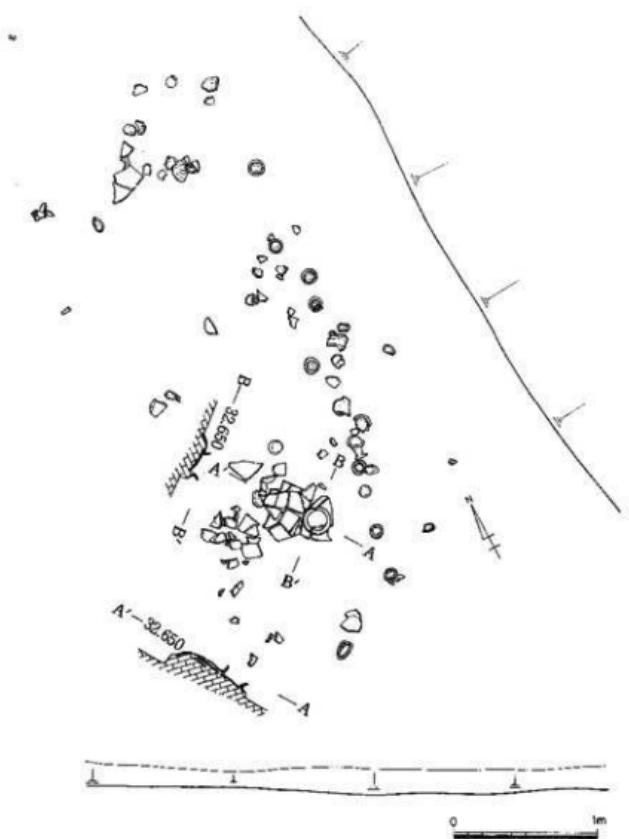
表土から第7層までの土層では山本編年のⅢ期から室町時代までの遺物が混在しており、水田造成時等の擾乱の結果によるものではないかと思われる。第8層では山本編年IV期の遺物が大部分を占め、それに山本編年Ⅲ期頃のものが少し混じる。第9層ではIV期のものが中心であるが、歴史時代のものも数点あり、Ⅲ期のものは少し増える。第10層では、Ⅲ期のものがほとんどで、IV期のものは数点混じるといった状況が見られる。以下実測図（図版34~37）に示したものと土層の関係をまとめるところ次の通りである。

第5表 1-3区各層出土遺物一覧表

	須 馬 山本駒作 1期の跡跡	須 馬 山本駒作 2期の壺环	須 馬 山本駒作 3期の壺环 たちがわの壺环 ある壺环	須 馬 山本駒作 4期の壺环 歴史時代の壺环	高环・要・壺等	土 器	陶器、その他	備 考
表土~ 第4層								
第5層~ 第7層	环蓋1(1-132)	环蓋1(1-121) 〔指宝珠つまり かえりあり〕 环身1(1-128) 〔輪伏つまり き〕		环(1-124) 高环(1-131) 高环脚部2			中古青白磁(13 ~14世紀西洋) (G-2)	
第8層	环身(1-81)	环身1(1-127)	环蓋1(1-113) 环身9(1-114, 116,他に6 点)	环(1-120他に4 点) 高环脚部(1-83) 短颈金(1-84) 用(1-74)	高环6(1-87, 4点) 高环(1-134) 短颈金(1-83)	螺(1-123) 土製支脚 (1-125)	造物出土状況 (第47図)	
第9層	环身2(1-106, 112)	环蓋6(1-71) 环身6(1-68, 69,72,73, 108,他に11 点)	环(1-111) 〔つまみなし,か えりつき〕 盖(1-67) 〔つまみかえり つき〕 环2(1-88) 他に1点)	高环7(1-76, 80,89,107 カマド片 (1-102)) 高口串(1-103) 盖(1-109) 短颈金(1-100) 短颈金2(1-70 他に1点) 螺(1-130)	螺(1-98) カマド片 (1-102)	鍍金螺2(F-2)	造物出土状況 (第48図)	
第10層		环蓋8(1-77) 70,86,101 环身6(1-85, 90,91,92 他に2点)	环蓋1(1-122) 环身1(1-165)	高环 高环 螺(1-104) (1-78)	螺又は螺6(1- 93,94,95 カマド片 (1-110) 把手2(1-96 97)			

## まとめ

地形の傾き、土層の堆積状況、遺物の出土状況からみて、大きくは3度にわたる遺物を含んだ土砂の流れ込みがあったと思われ、本区の東側にあたるI-4区の遺構群との密接なつながりを考えることができよう。

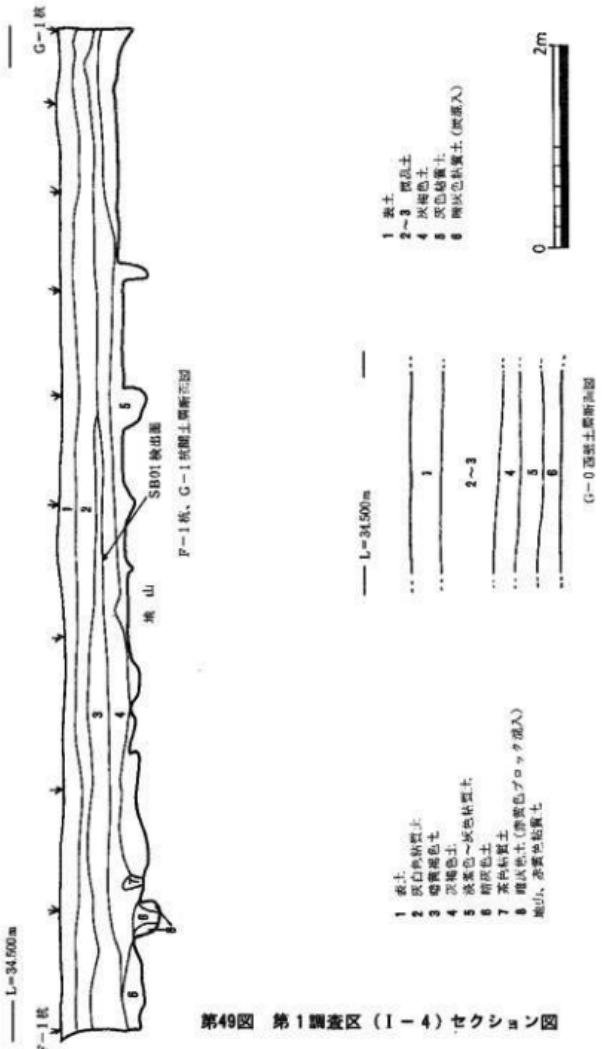


第48図 第1調査区(I-3)第9層遺物出土状況

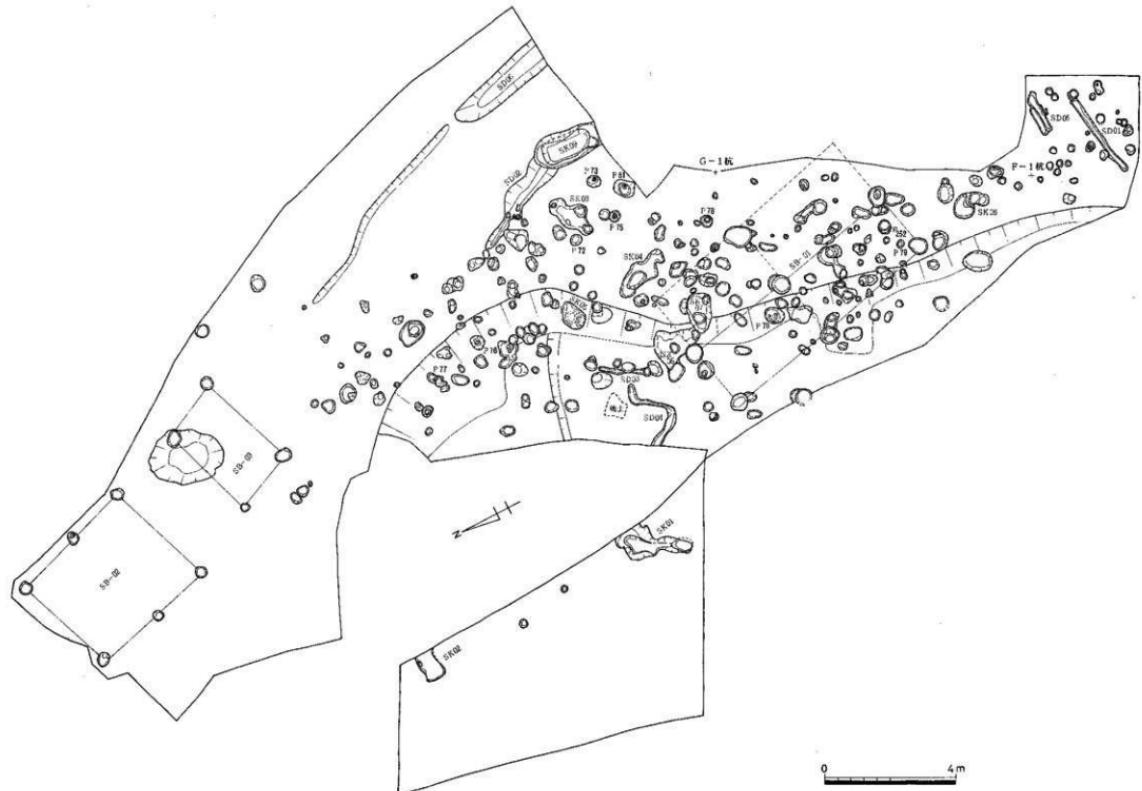
< I - 4 区 >

第1調査区の最も北に位置し、I - 3 区の北東から南東に広がる 300 m 程の細長い区域である。標高は約34 m である。

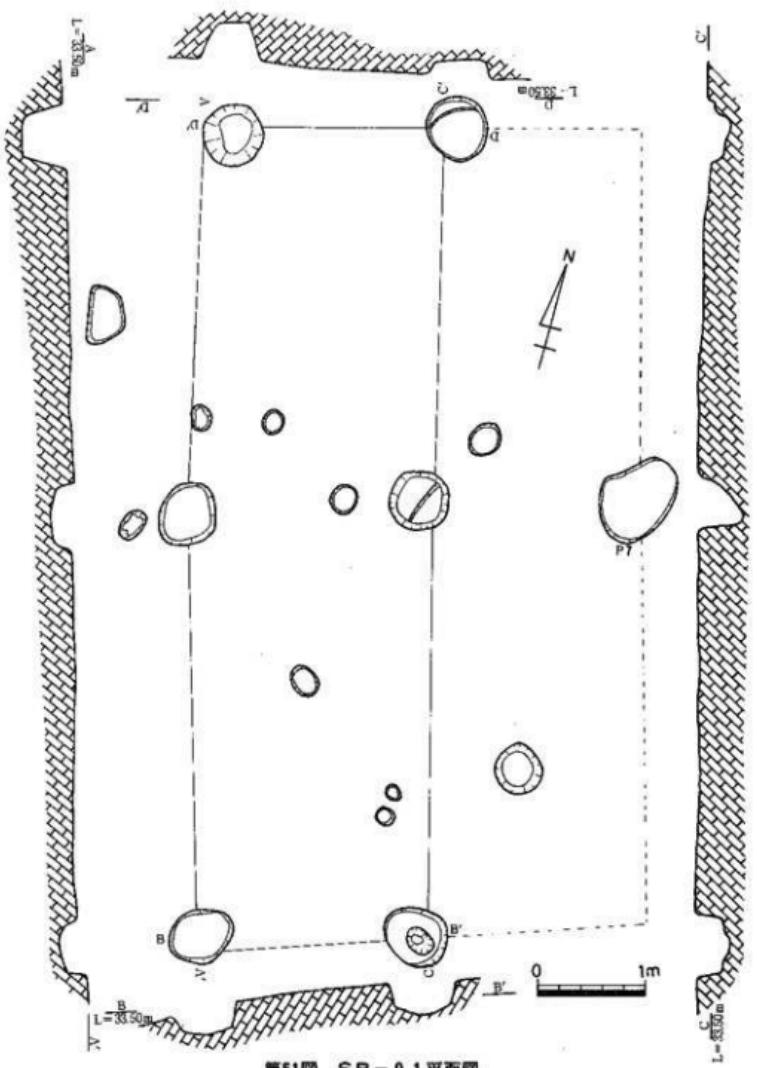
土層について (第49図)



第49図 第1調査区 (I - 4) セクション図



第50図 第1調査区 (I-3, I-4) 調査成果図



第51図 SB-01平面図

F-1杭からG-1杭の間では、表土層（水田耕作土）0.2m、第2層灰白色粘質土0.1～0.25m、第3層暗黄褐色土0.1～0.3m、第4層灰褐色土0.1m、第5層淡紫色～灰色粘質土0.2mを測り、第6層で赤黄色粘質土の地山に至る。G-0の西壁では、

表土0.3m前後、第2～3層軟塑土0.5～0.6m、第4層灰褐色土0.2m、第5層灰色粘質土0.2m、第6層暗灰色粘質土（炭混入）0.2mを測り、第7層で暗緑褐色土の地山に至る。I-100、0では削平されて黄赤色～青緑色粘質土の地山面がすでに露出していた。

#### 遺構について

検出した遺構は掘立柱建物3棟（SB-01～03）、その他のピット258、土壙7（SK03～09）、溝状遺構6（SD-01～06）、焼土1であった。（第50図）

**SB-01**（第51図）：G-0の第4層（灰褐色土）上面で検出した桁行2間（7.4m）、梁行1間（2.1m）の掘立柱建物で、主軸方向はN12°Wである。桁行の柱間距離は3.5+3.9m、柱の掘り方寸法及び埋土は次表の通りである。

第6表 SB-01ピット一覧表

	上端径cm	深さcm	埋 土	備 考
P 1	60×59	19	暗黄褐色土	
P 2	55×54	74	暗黄褐色土+暗灰色粘質土	
P 3	56×58	30	暗黄褐色土	
P 4	50×58	29	暗黄褐色土	
P 5	60×54	18	暗黄褐色土+（暗灰+青緑色粘質土）	
P 6	57×56	40	暗黄褐色土+暗灰色粘質土	

ここではP7（上端径80×68cm、深さ14cm）をプランに入れずに考えたが、もしP7をこの建物の一部と考えれば2間×2間の縦柱の建物になる可能性もある。

柱穴出土の遺物はなく、検出面より上層での遺物も確認されていないが、柱穴を掘り込んだ土層中より出土した遺物の内最も新しいものが回転糸切りの高台付环（1-18）であるので、この建物は少なくとも奈良時代かまたはそれ以降のものである。

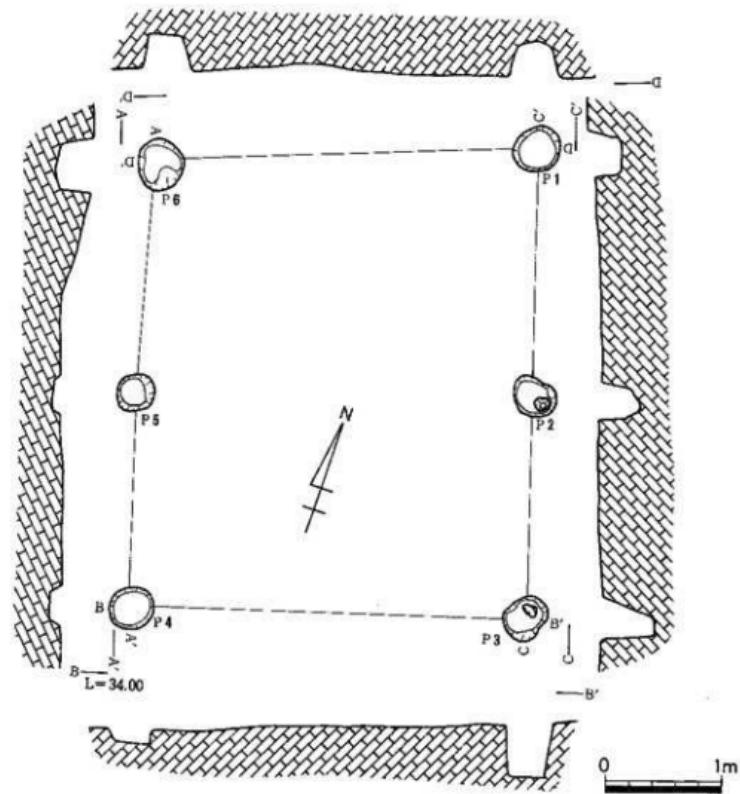
**SB-02**（第52図）：調査区の最北端I-100の地山面で検出した桁行2間（4.1m）、梁行1間（3.4m）の掘立柱建物で、主軸方向はN16°Wである。調査区の北側は小さな谷川になって落ち込んでいたので、この建物がさらに北に伸びていくことはないと判断した。桁行の柱間距離は2.2+1.9m、柱穴の掘り方寸法及び埋土は第6表の通りである。

柱穴内からも近辺からも遺物の出土はなかったので、時期の判断はできなかった。

**SB-03**（第53図）：I-0の地山面から検出した1間（3.1m）×1間（2m）の掘立柱建物で、SB-02の南側から2.5mの距離に隣接し、方位も02とほぼ同じである。柱穴掘り方寸法及び埋土は次表の通りである。

第7表 SB-02ピット一覧表

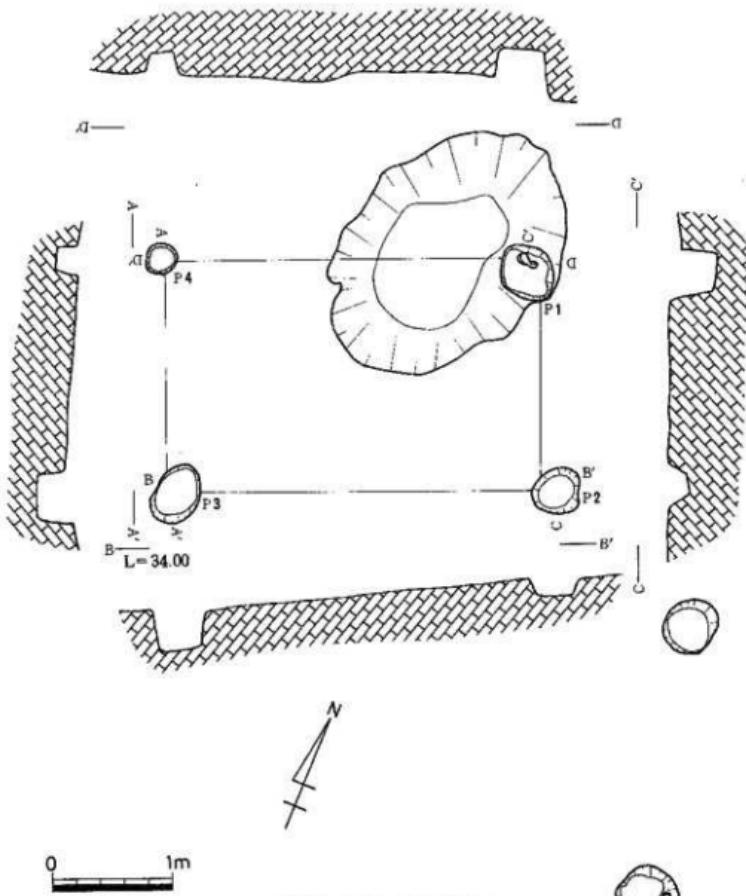
	上端径(cm)	深さ(cm)	埋 土	備 考
P 1	43 × 40	32	紫灰色粘質土	
P 2	35 × 38	35	"	
P 3	42 × 40	49	"	底部に柱あたりあり
P 4	37 × 37	12	"	
P 5	36 × 34	8	"	
P 6	40 × 45	34	"	



第52図 SB-02 平面図

第8表 SB-03 ピット一覧表

	上端径 cm	深さ cm	埋 土	備 考
P 1	42 × 55	37	紫灰色粘質土	
P 2	39 × 40	16	"	
P 3	41 × 50	32.5	"	
P 4	28 × 24	22	"	



第53図 SB-03 平面図

柱穴内からも近辺からも遺物の出土はなかったので、時期の判断はできなかったが、建物の方位と柱穴の埋土が等しいことから見て、SB-02と同時期のものと思われる。

その他のピット群：方形のプランにはまとまらないが、柱根を残し、明らかに柱穴と認められるものが10あった。柱穴の掘り方寸法、埋土、残存柱根寸法などは次表の通りである。

第9表 その他のピット一覧表

	検出区	層位	上端径cm	深さcm	埋 土	柱根寸法cm	柱根断面形	備 考
P 70	G-0	地 山	38×30	34	暗灰色粘質土 (炭、漆緑ブロック混入)	現存長32 幅17.8	角 形	第75図-1
P 72	H-0	地 山	36×40	54	暗灰色粘質土	現存長30		第77図-11
P 73	H-0	地 山	42×35	59	不 明	現存長39.7 最大径20.7	円 形	第76図-6
P 75	H-0	地 山	35×36	54	暗灰色粘質土 (炭、漆緑ブロック混入)	現存長32 最大径14	円 形	第76図-8
P 76	H-0	不 明	50×44	56	暗紫色粘質土 (炭多量に混入)	現存長22.1 最大径11	円 形	第75図-2
P 77	H-0	不 明	52×26	52	暗褐色粘質土 (灰混入)	現存長14.5 最大径6.0	円 形	第77図-12
P 78	H-0	地 山	35×38	47	暗灰色粘質土			
P 79	G-0	地 山	26×24	34	暗灰褐色粘質土	現存長22.6 最大径9.5		第75図-5
P 81	H-0	地 山	66×50	58	暗灰褐色粘質土	現存長18.7		第75図-4
P 252	G-0	地 山	43×47	50	暗灰色粘質土			

この他にも柱痕跡のあるものや、掘り方しかわからないがしっかりしたつくりのもの等、充分に柱穴となり得るピットが多数あったが、現場では建物としての確認はできなかった。

土壤：SK 03～09まで7基ある。法量、埋土その他は次表の通りである。

第10表 土壌一覧表

検出区	層位	プラン	法量cm(径は0.7以外は上縁のみ)					埋 土	備 考
			東	西	南	北	深さ		
SK 03	H-0	地 山	不 整 形	160	90	50～70		暗灰色粘質土 (炭、漆緑ブロック混入)	
04	"	第5層	"	185	80	50～60		暗灰色粘質土	
05	"	"	"	100	65	40～60		"	
06	"	"	"	110	150	50～70		"	
07	"			120	85	50			
08	G-0		不 整 形	70	115	30～40			二段になつて いる
09	H-1	地 山	膨丸 長方形	上縁 中段 下縁	217×100 155×75 140×55	25 + 20～30			

SK 03 から 09 までは全て不整形なプランをもち、中にピット状の落ち込みをもつものもあって、これらの土壤がどういう性格のものは全く判らなかった。SK 09 (第50図) は形の整った隅丸長方形のものであり、SD-02 を切っていることからして、水溜めのような用途のものであろうか。いずれの土壤からも遺物は出土しなかった。

溝状遺構：SD-01 から 06 まで 6 条を検出した。法量その他詳細は次表の通りである。

第11表 溝状遺構一覧表

検出区	層位	法量(cm)(幅は上縁で)			埋 土	遺 物	備 考	
		幅	長さ	深さ				
SD01	F-0	地山	20	275	10~20	暗灰色粘質土	(高杯脚部 环身(IV期))	(1-48) (1-44)
02	H-0	"	25~70	300	8~17			SK 07 につながる
03	"		10~18	165	10~20	暗灰褐色粘質土 (炭, 海綿ブロック混入)		南端はピット状に落ち 込み、深さ30cmを計る。
04	"		13~34	290 以上	6~12			
05	F-1	地山	14~28	135		暗灰色粘質土		
06	H-1	"	60~90	330	11~25	淡青灰色粘質土		

SD-02 は SK 09 に流れ込む水路であろう。SD-04 は H-0 西南隅で検出しが、蛇行して調査区の外に続く。SD-06 は調査区東端で検出し、調査区の外に続く。

焼土：H-0 西南隅の第4層で検出した。65×70cm, 厚み4~7cmを測る。

#### 遺物について (図版37~38)

ピット中より出土の遺物は、P78より長頸壺底部 (1-65), P96より須恵器壺底部 (1-13), P258より環身 (1-27) (山本編年III期), P270より土師器壺口縁部 (1-36), 須恵器の壺口縁部 (1-54), 須恵器壺 (1-56), 高杯 (1-57), 電片 (1-62) がある。

また、SB-01 検出面の灰褐色土層から地山までの間に土層が3層あり、いずれの層にも遺物を含んでいた。遺物は主にG-0 で出土した。

第4層灰褐色土からは、回転糸切りの高台付杯 (1-18), 壺蓋 (1-51) (山本編年III期), 環身 (1-17, 50) (III期) がある。

第5層淡紫色~灰色粘質土中からは壺蓋 (1-19, 20, 21) (III期), 環身 (1-25, 26) (III期), 高杯 (1-22, 28), 電片 (1-61), 須恵器壺の口縁部 (1-31) が出土した。

第6層暗灰褐色粘質土中からは、乳頭状つまみ, かえり付の蓋 (1-15), 壺蓋 (1-

-16)(Ⅲ期)が出土した。

地山直上からは糸切りの高台付坏(1-59), 坏蓋(1-23)(Ⅲ期), 坏身(1-24, 29, 32)(Ⅲ期), 土師器甕の口縁部(1-34)が出土した。

ほかにG-1(土層不明)より中国青磁の雷文甕(G-6)(15世紀), 坏身(1-35)(IV期)が, またH-0の第2層より青磁小皿(G-7)(14~15世紀), 第3層より備前焼の猪鉢(G-8)(室町後期), 李朝の陶器皿(G-9), 龜山系の鉢型土器(G-10)等も出土している。

### ま と め

出土遺物をみると, 6世紀後半頃のものが最も多く, 次いで飛鳥, 奈良期のものが数点, 14~15世紀の陶磁器類が数点みられるので, これにI-3区の調査結果を加味して考えてみると, この区域で掘立集落を営んだ人々は, 6世紀後半から7世紀の第一四半期をピークとして栄え, 銀金環等も持っていた在地の有力者層だったのではないか。飛鳥, 奈良時代にも引きつき人が住むが, 平安, 鍛冶期に入って一時途絶えるようである。この時期の遺物が全く出土していない。南北朝から室町にかけて中国産, 李朝産の陶磁器類を持てるような階層の人々が再び住み, 室町時代の終り頃には廃絶したものようである。

(齋古諒子)

### 〔第2調査区〕

本調査区は, 別所池の南の標高70m程の山が, 北東に降った山崩の急斜面下部から緩やかに傾斜する平坦面にかけて位置し, 標高34~41mを測る。調査前は竹林であった。住居地の可能性があるとの県教委の指導を得て, 調査を実施したものである。調査にあたって, 平坦面に巾5mのトレーナーを10m間隔に3本設定し, A, B, Cトレーナーとした。長さは当初それぞれ25m, 20m, 20mであったが, 調査途中で南斜面に延長したため, 最終的には34m, 28m, 29mとなった。また, トレーナー北端より5m毎に1, 2, 3…6とし, トレーナー内を5mグリッドに分けた。(第55図)

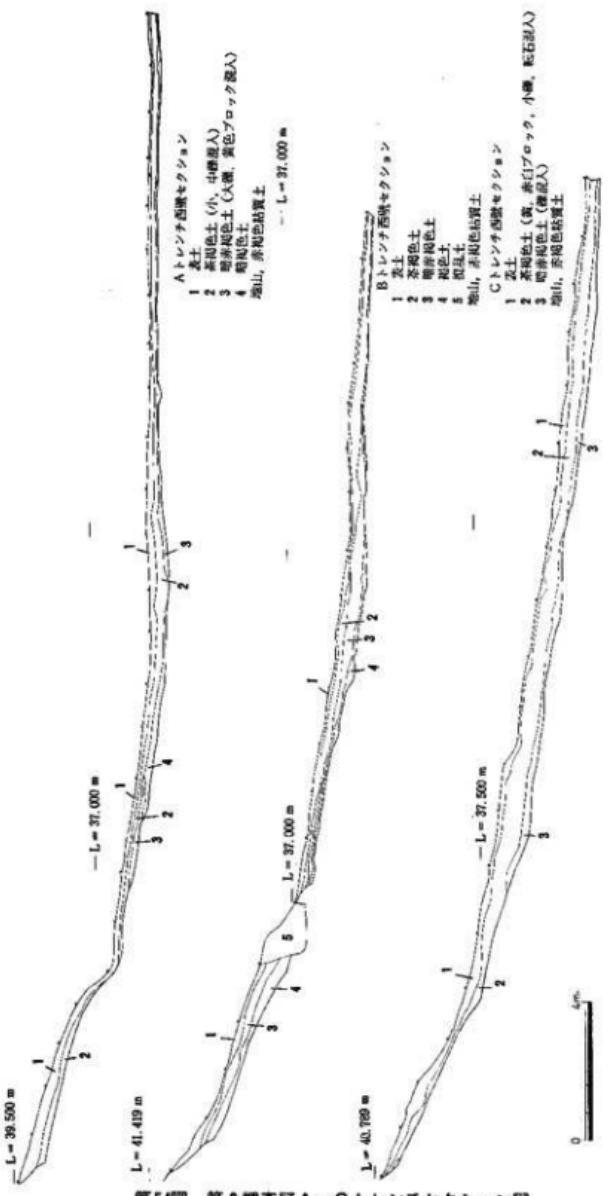
### <Aトレーナー>

#### 土層について(第54図)

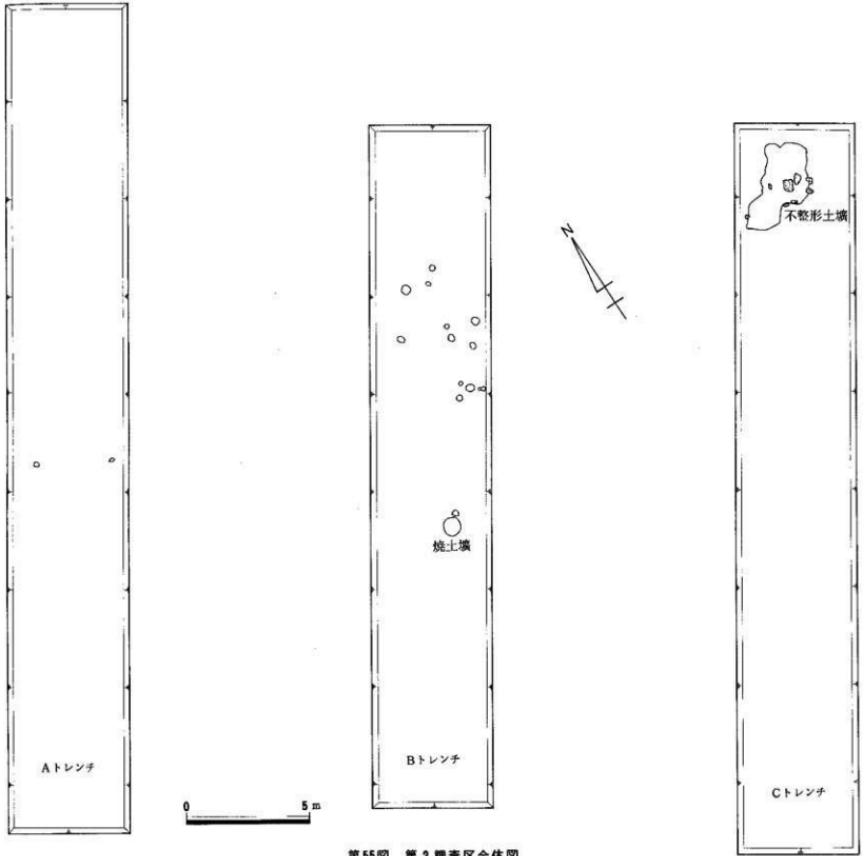
表土は0.1~0.2m, 第2層淡黒褐色土及び茶褐色土が0.1~0.4m, 第3層は暗赤褐色土が0.2m, トレーナー中央部では炭混じりの暗褐色土が0.2mを測り, 全体に0.3~0.6mで赤褐色粘質土の地山に達する。延長区では, 表土の下は茶褐色土のみで, 第3層目が地山となる。

#### 遺構について(第55図)

トレーナー中央部の地山面で, ピット2を検出した。プランはP1(21×24×18cm), P



第54図 第2調査区A～Cトレンチセクション図



第55図 第2調査区全体図

2 (19×20×15cm) であった。

#### 遺物について (図版39)

A-5区の第2層中より若干の須恵器類が出土している。杯蓋 (2-12)(山本編年IV期)、直線的に開く静止糸切りの杯 (2-5) 等である。

A-4区の第3層より、杯身 (2-10)(III期) 及び、玄武岩質製のスクレイパー (F-3) が出土している。

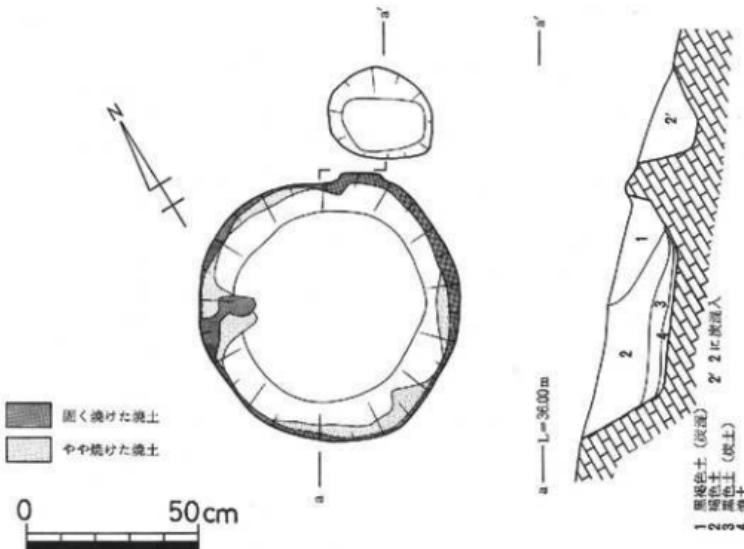
#### <日トレンチ>

##### 土層について (第54図)

表土は0.05~0.15m、第2層茶褐色土は0.1~0.3mを測る。第3層暗赤褐色土はトレンチ中央部に多く堆積し、0.05~0.4m、第4層褐色土は0.1~0.2mを測り、第5層で赤褐色粘質土の地山に達する。南側延長区では第2層暗赤褐色土が0.1~0.3m、第3層褐色土が0.1~0.4mを測り、第4層で地山となる。

##### 遺構について

第3層上面でピットを13検出したが、大小様々なピットが不規則に並び、建物とはな



第56図 第2調査区、日トレンチ焼土壙図

らなかった。

第4層上面で焼土壙1基(第56図)を検出。プランは円形で、上端径75×75cm、下端径50×55cm、深さ20cmを測る。土壙内には、上層に炭まじりの黒褐色土及び褐色土が堆積し、下層には炭の層が堆積し、壁面と床面は橙色～赤褐色に焼けている。土壙の北側に近接して26×30×12cmの落ち込みが認められた。周辺及び第3層の出土の遺物から見れば、6世紀後半頃の遺構と考えられる。

#### 遺物について(図版39)

第2層ではB-2区から円盤状の板に3ヶ所小さな脚をつけた近世の焼き台(F-2)が、B-3区から須恵器の杯身(2-11)(皿期)が出土している。

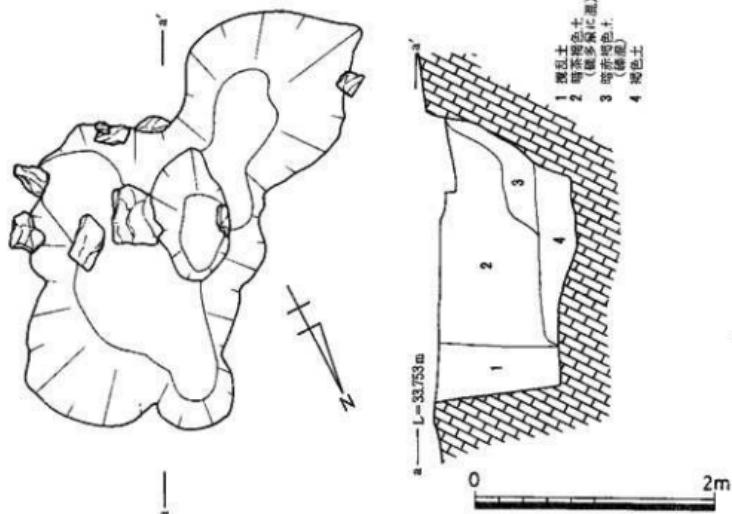
第3層からは、B-3区で杯蓋1(2-13)、杯身2(2-8、他1)が、B-4区で杯蓋(2-1)が出土しており、いずれも山本編年Ⅲ期の所産になるものである。

第4層上面では瓦片が出土している。

#### <Cトレンチ>

##### 土層について(第54図)

Bトレンチとはほとんど変わらない堆積状況を示しており、平均0.4mで赤褐色土の地山となる。



第57図 第2調査区Cトレンチ不整形土壙図

### 遺構について

C-1区の地山面で、不整形な土壙1基(第57図)を検出した。上縁で長径4m、短径2m、深さ1.2mを測る。土壙の一番北側の落ち込みは1層上から掘り込まれており、後出のものである。

### 遺物について(図版39)

C-1区第2層より須恵器の坏(2-7), 坏身2(2-2, 4)(Ⅲ期)が出土している。

C-1区の不整形土壙中からは、多くの礫、転石に混じって須恵器の坏蓋(2-3, 6, 他3)(いずれもⅢ期)、坏身(2-9)(Ⅳ期)、竪焚き口(2-14)、陶器の皿(G-11)(近世以降の地元産)等が出土している。

### <まとめ>

Bトレンチ検出の焼土壙については、鶴沢A遺跡、B遺跡、60~61年度調査のイガラビ遺跡でも検出されているが、プランは円形又は隅丸方形を呈し、大きさは0.5~1.5m位、深さは0.2~0.4m位であり、かなりの高温で長時間火を焚いた遺構であるという以外は判然としない。出土遺物は、上層の流入土に限られるようである。上記の出土例では焼土壙の周辺にピットの検出されている例が多いので、住居に伴なう炉のようなものとして考えられるかもしれない。

Cトレンチ検出の不整形土壙については、性格、用途はよく判らなかった。(斎古諒子)

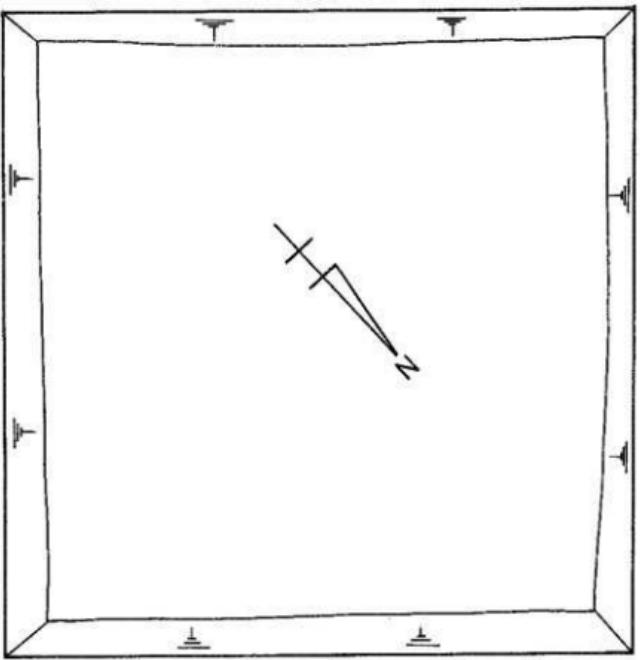
### (第3調査区)

#### 遺跡の概要

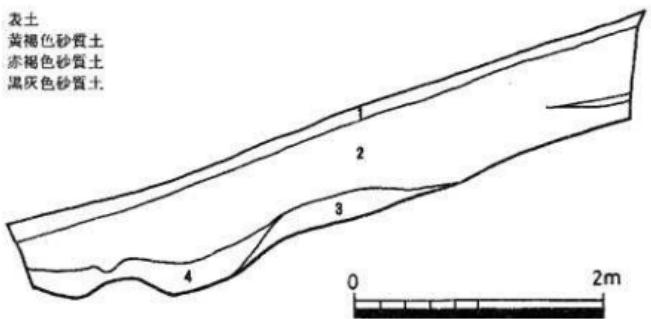
第3調査区は、鶴沢A遺跡と別所遺跡の間に所在する、標高70mの山の北西部の山腹から裾にかかる部分に位置する。山腹斜面に不自然な段が認められたことから、遺構の有無を確認するため、任意の2m幅のトレンチ2本(D, Eトレンチ)と5m四方のグリッド1カ所(Hトレンチ)、3~8mの幅の坪掘4カ所(坪掘1~4)を設定した。その結果、Dトレンチからはピットと土器、Eトレンチからは堅穴住居(SI-01)、ピット群、土器溜を検出した。また4カ所の坪掘の内、坪掘-3、坪掘-4から広範囲の焼土の堆積(SX-01)を検出した。

#### <Dトレンチ>

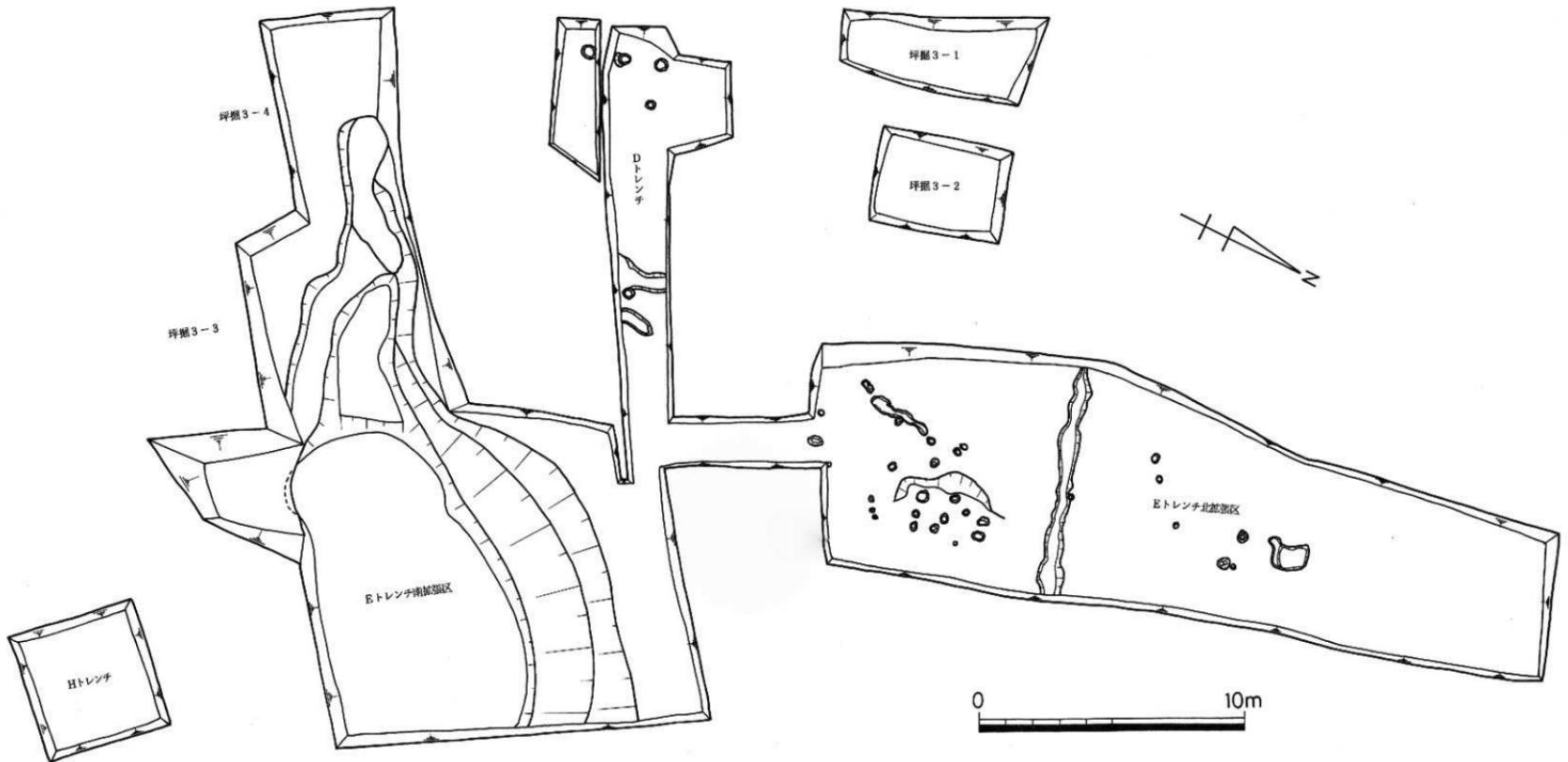
幅2m、長さ17mのトレンチを山腹斜面に設定した。その結果、一部トレンチを拡張したところを含め地山面からピットを6穴と溝状遺構2本を検出した。これらのピットは径23~45cm、深さ19~38cmを測る。溝状遺構は検出したトレンチ内で、SD-03が長さ1.3m、幅0.48m、深さ18~30cm、SD-04が長さ1.9m、幅0.6~1.5m、深



- 1 表土  
 2 黄褐色砂質土  
 3 赤褐色砂質土  
 4 黒灰色砂質土

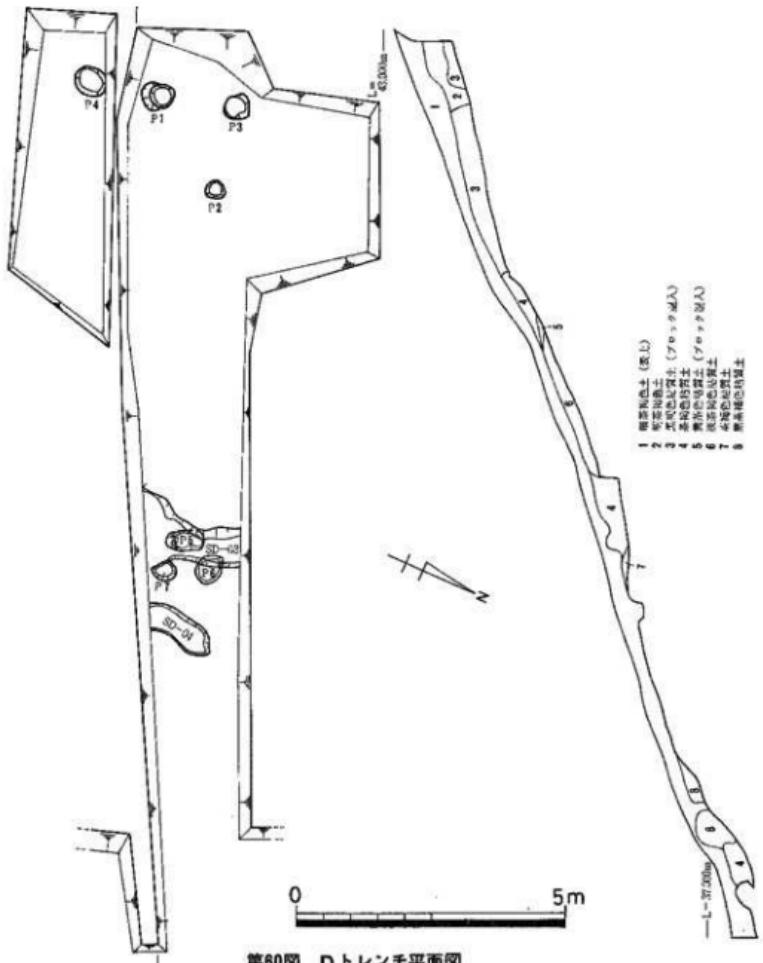


第58図 Hトレンチ平面図



第59図 第3調査区全体図

さ10~30cmをそれぞれ測る。ピットから建物を復元することはできなかった。Dトレンチからの出土遺物としては、P 4から須恵器の杯が、SD-04から須恵器、杯蓋他が出土した。また、地山面から須恵器の破片が数点出土している他、表土及び埋土から須恵器の蓋杯類や甕、長頸壺が検出された。ピット及び溝状造構の時期は出土土器から7世紀中頃と推定される。

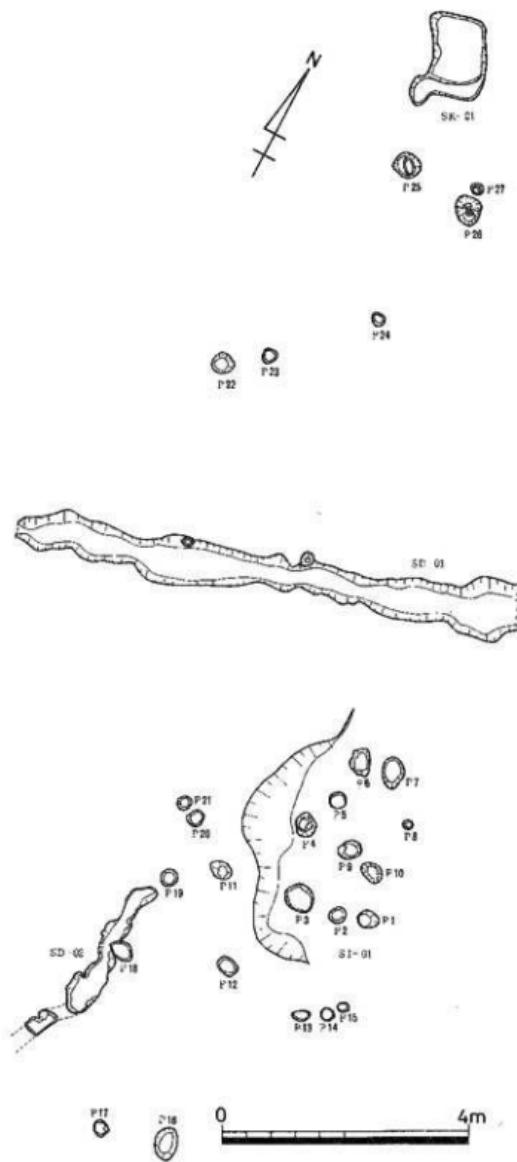


第60図 Dトレンチ平面図

<Eトレンチ>

当初は幅2m、長さ30mのトレンチをDトレンチ東側に直交するかたちで設定した。その結果、E-1杭付近の地山面から須恵器の蓋、高坏、土師器の支脚片、甕片等が出土したため、Dトレンチから北側を東西に10m、南北に22mの拡張を行なった。拡張後、ピット27、土壤1、溝状遺構2、竪穴住居1を確認した。またDトレンチより南側でも須恵器と土師器が多数出土したことからトレンチを東西は坪掘3と4を含めた27m、南北は14mにわたって拡張を行なった。拡張後、斜面に多数の土器が堆積する土器溜りと焼土層が2層にわたって堆積する遺構を確認した。以後、Dトレンチを境にして北側を北拡張区、南側を南拡張区と呼称する。

北拡張区の地山面か

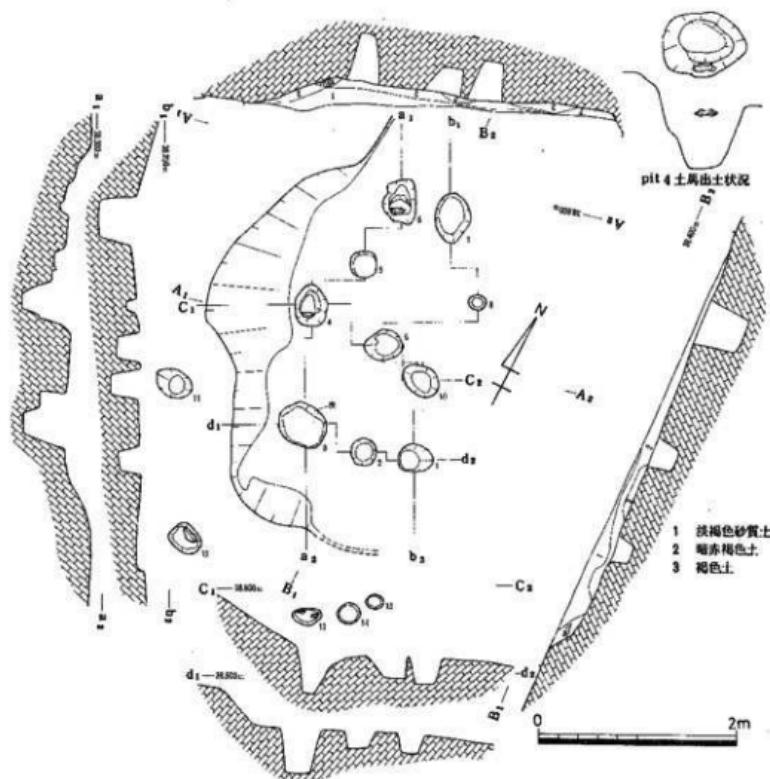


第61図 Eトレンチ西拡張区平面図

ら検出したピットは径10~56cm、深さ6~38cmを測る。この内ピット1~10は竪穴住居(S I - 0 1)に関連するものと思われる。S I - 0 1は北拡張区の南東隅に位置し平面形は不整な隅丸方形になると思われる。残存する一辺は南北で4mを測り床面はやや傾斜し、周溝は認められなかった。

住居内には10のピットが認められるが、位置が不規則であることから主柱穴を断定するにいたらなかった。P 3からは多量に炭化物と小礫の混入した埋土を検出した。P 1~10は径は24~48cm、深さ10~38cmを測る。

遺物は住居内の埋土及びP 4内より古墳時代の後期から奈良時代にかけての須恵器が出土した。埋土の1層及び2層は、出土した土器の時期幅が大きくまた堆積状況からみ

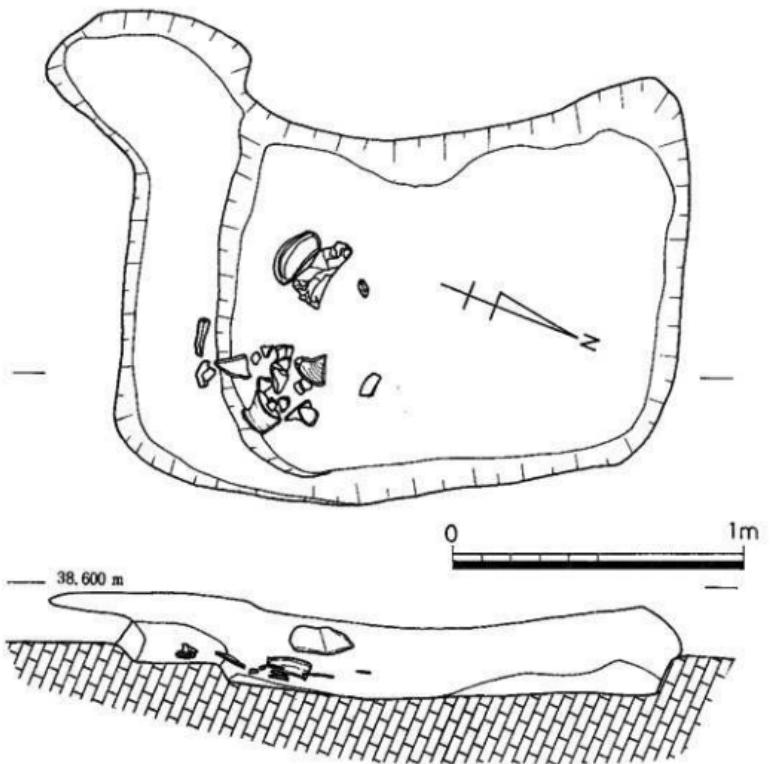


第62図 S I - 0 1 平面図

ても住居内に流入した土層であると考えられる。P 4 内より出土した土器は細片のため断定はできないが、形態から見て少なくとも古墳時代後期を下る時期のものではないと思われる。

この他、体長12cmの首と手足を欠損した須恵器の土馬も出土している。また3層から出土している土器も山陰Ⅲ～Ⅳ期に該当することから、S I - 0 1 も古墳時代後期～末頃に営まれていたのではないかと考えられる。

P11～27は径が10～56cm、深さ6～32cmを測り、掘り方に画一性が見られない。このため建物の復元を行なうことはできなかった。ただ、P11～15はS I - 0 1 の周辺に穿たれていることから住居関係のものであった可能性も考えられる。



第63図 SK-01 平面図

S I - 0 1 の北側と西側には 2 本の溝状遺構が存在する。西から東へ走る S D - 0 1 は幅 0.4 ~ 1 m, 長さ 8.4 m, 深さ 10 ~ 17 cm を測り、さらに東へと続くものと考えられる。S I - 0 1 の西側に位置する S D - 0 2 は幅 0.2 ~ 0.4 m, 深さ 3 ~ 5 cm の浅い溝である。いずれの溝もその性格をつかむことはできなかった。

北拡張区の最も北側に位置する隅丸方形土壙 S K 0 1 は東西 2.8 m, 南北 0.8 m, 深さ約 40 cm を測る。一部が 0.4 × 0.5 m, 深さ 15 cm の 2段掘りになっており、この埋土内より須恵器の蓋坏が出土した。これらの土器は土壙内に流入したような状況で検出された。土器の時期はいずれも奈良時代中頃のものと考えられ、付近からそれ以後の遺物も出土していないことから、S K 0 1 はこれに近い時期のものと思われる。

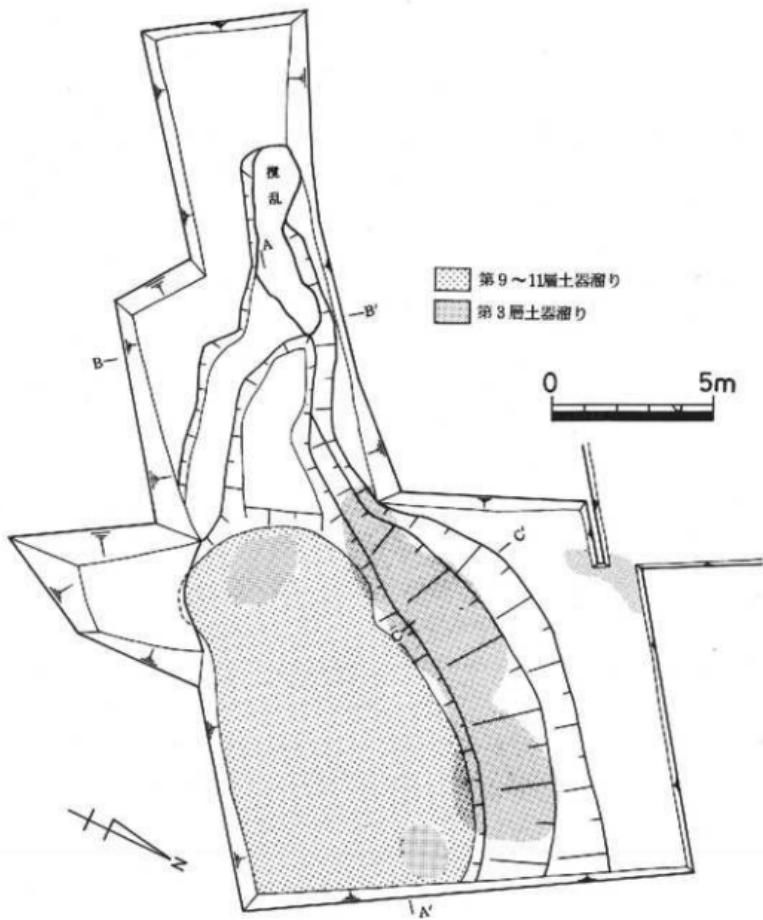
S I - 0 1, S K 0 1 以外の遺構内からは遺物を検出できなかったが、S I - 0 1 の西側を中心とする範囲で須恵器、土師器、須恵質の土馬等が出土している。遺物の時期は高広編年 I A ~ I B 頃であり、S I - 0 1, S K 0 1 の時期と考えあわせて北拡張区で検出した遺構は古墳時代後期~奈良時代中頃に営まれたものと考えられる。

南拡張区では山腹裾部の斜面から谷底部にかけての幅 9 × 11 m, 地表からの深さ 0.6 ~ 3.0 m に及ぶ範囲で土器溜りを検出した。遺物包含層は第 3 ~ 11 層の 9 層に分かれており、検出した地山面の傾斜から見て西側の高い所から東の谷へ向って流入したものと考えられる。第 6 層以下は、水を多量に含む粘質土層或はシルト層のため、遺物の出土状況実測が不可能な状態にあった。只、水が多いことが幸いして木製品の残存状態が良好であった。

出土遺物はコンテナ 34 箱に及ぶが、その内実測可能であった遺物は図版 40 ~ 52 の通りである。

第 3 層は暗褐色土層で、須恵器の蓋坏類、盤、皿、壺、甌類、高坏、鈴、土師器の壺、甌、瓶、土製支脚、竈、土馬（胴部 2, 足 1, 尻尾 1）、砥石、鉄製の刀子片等が出土した。遺物の時期は須恵器の高広遺跡編年の I A ~ V 期にわたる時期のものが見られ、各時期の土器が混在した様相を呈する。数量的には IV B 期が最も多く、続いて IV A 期のもののが多かった。

第 4 層は茶褐色土層で、須恵器の蓋坏類、盤、壺、甌類、高坏、碗や磨製石斧が出土していた。須恵器の時期は高広編年の I B ~ V 期のものが見られ、IV A 期のものが最も量が多く IV B 期がそれに続く。この層の最も新しい出土遺物が高広編年 V 期のものであることから、第 4 層は高広編年に与えられた年代からいえば 9 世紀中頃~後半にかけての時期のものと考えられる。器種は第 3 層、第 4 層ともに蓋坏類が最も多く、皿、盤がこ



第64図 Eトレンチ南拡張区平面図

れに続く。

第5層は、炭化物を多く含む暗灰色土層であり、須恵器の蓋杯類、高杯、皿、盤が出土した。遺物の時期は高広編年のIB～IVB期までのものが見られ、量的には各時期ともほぼ同量ずつ出土した。

炭化物を多く含む淡灰色粘質土層の第6層と炭化物と指頭大の礫を含む青灰色粘質土層の第7層は他の層に比べ出土遺物がかなり少ない。出土遺物は第6層では須恵器の蓋

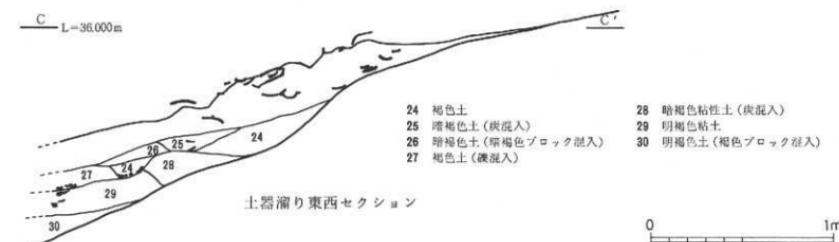
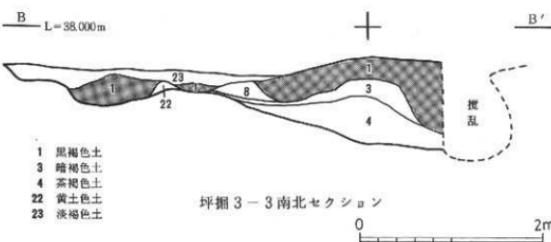
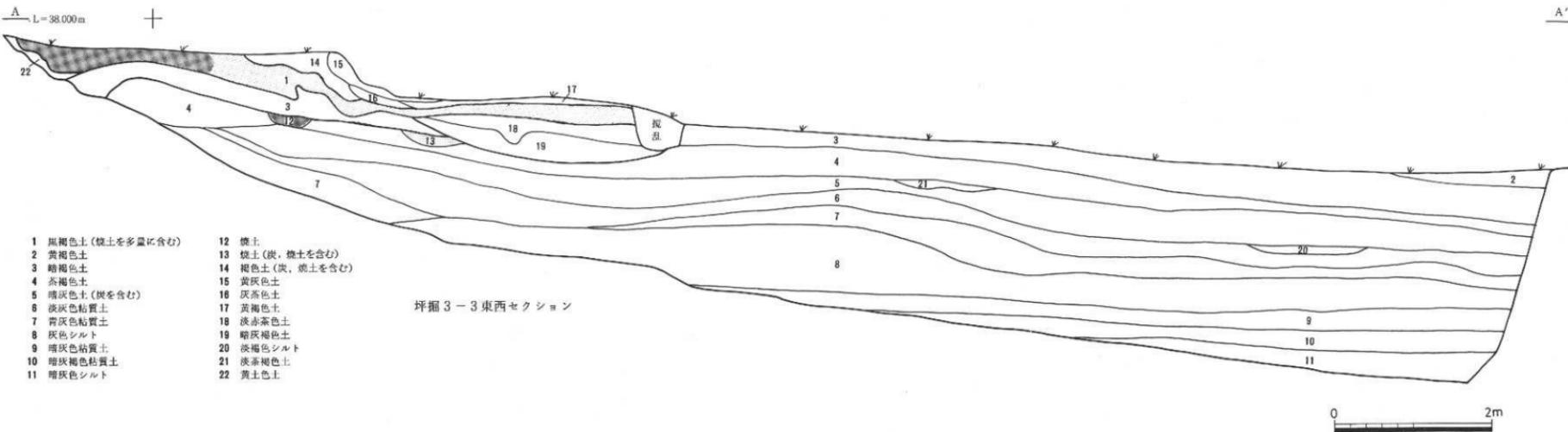
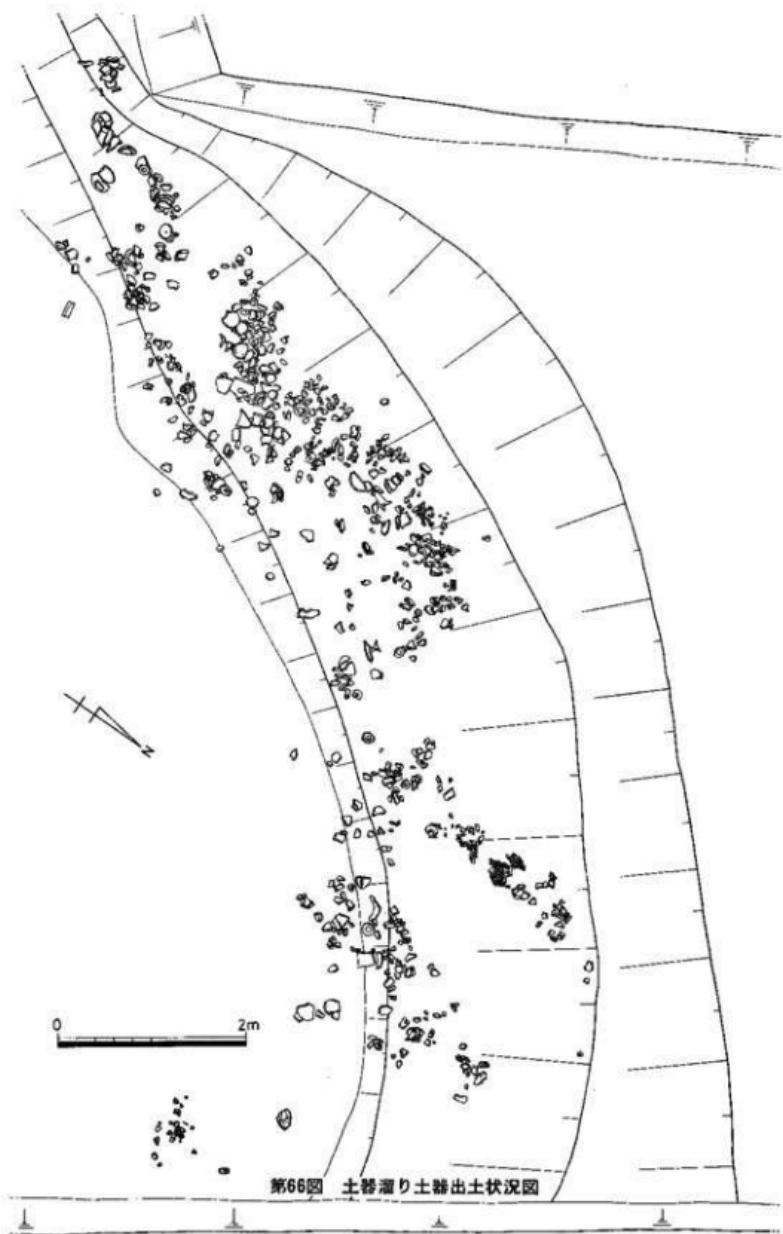


圖65圖 Eトレンチ南拡張区セクション図



第66図 土器満り土器出土状況図

坏類、壺壺類、高坏、土師器の土製支脚が出土した。遺物の時期は高広編年ⅢB期とⅣA期のものが見られる。

第7層では須恵器の坏身、高坏、土師器の壺と須恵質の土馬(胸部)が出土した。須恵器はいずれも高広編年ⅡA期のものである。土馬は手足、顔を欠損していた。

炭化物を含む灰色シルト層の第8層は、遺物包含層の中で最も遺物が多く、須恵器の蓋坏類、盤、皿、壺壺類、壺、碗、土師器の壺、甕、瓶、土製支脚、電、須恵質の土馬(胸部)、木製品等が出土した。須恵器の時期を見ると高広編年ⅠA～Ⅴ期にわたる広い年代の土器が見られ、器種は蓋坏が圧倒的に多く高坏がこれに続く。最も個体数が多いのはⅣA期の土器で、これについてⅠA期、ⅠB期、ⅡA期、ⅢB期の土器がほぼ同数で並ぶ。土馬は、手足、顔を欠損していた。木製品では鐵の未製品、曲物の蓋、柱材、柄状木製品、板材等が土器と共に出土した。

第8層の出土土器で最も新しい時期のものは高広編年Ⅴ期、実年代をあげれば9世紀中頃～後年にかけてのものであることから第8層もそれ以降に堆積した土層だと考えられる。

この結果から、高広編年Ⅴ期の須恵器が出土していない第5、6、7層も堆積状況から見てⅤ期以降の堆積層と判断した。

第9層の暗灰色粘質土層では、須恵器の壺が1点のみ出土しているか時期は不明である。

続く第10層からは須恵器の蓋坏類、盤、皿、鏡、土師器の甕、土製支脚、木製品等が出土した。須恵器は高広編年ⅠA～ⅣB期までのものがあり、量的にはⅣA期のものが最も多かった。木製品では田下駄が出土しており、第8層からも鐵の未製品が出土していることから本遺跡近辺において農耕を行なっていた様子が伺える。

最下層の第11層では須恵器の蓋坏類、土師器の電、木製品が出土している。須恵器の時期を見ると、高広編年ⅡB～ⅣA期までのものが見られる。木製品では柱材、柄状木器、板材等が出土している。第10層と第11層の最も新しい時期の遺物が高広編年ⅣA期であることから、この2層は8世紀後葉までに堆積したものと考えられるが、第9層には遺物がほとんど含まれないため堆積した時期を推察することはできなかった。

各層から出土した遺物の時期を比較すると、第3～4層と第8層までの各土層では、最も新しい時期の遺物が高広編年Ⅴ期の遺物であり、それ以下の土層ではⅣA期のものが最も新しい時期の遺物であることから、第10(あるいは第9)層から第11層にかけての土層が8世紀後葉までに短期的に堆積し、やや時期をおいて第3～8層が再びあまり時期をおかずして次々と堆積していったものと考えられる。また、第2層からは14～15世紀

代の青磁碗や備前系の摺鉢等がわずかながら検出していることから第2層は15世紀以降の堆積層と考えられる。

次に同じ層の中に300年近く時期差のある土器が多量に混在する事実が認められることから、この周辺で長期間にわたって集落が営まれていた可能性が考えられる。それは、出土土器に蓋環類が多いことや、土師器の瓶、甕、土製文脚といった生活用具が相当数出土していることや、本調査区の北方100mに位置する第1調査区から6世紀後半～8世紀末と15世紀代の2期にわたる住居跡が検出されていることからもうなづける。ただ第1調査区では6世紀後半の遺物が最も多いに対し、当土器通りでは8世紀中葉から後葉にかけての土器が群を抜いて多いため、第1調査区の住居址群以外にも、8世紀中葉頃からピークをむかえる住居址群が近接してあったものと推察される。

さて、この様な谷になぜ土器通りができたかという問題であるが、土器の出土状況及び土層の堆積状況からみて、斜面に投棄された土器が徐々に堆積していくことを考えるのは不可能であり、やはり上方の斜面から土と共に出土位置へ流入してきたと見る方が自然であると考えられる。しかしDトレンチ及びEトレンチ北拡張区、下記にて説明する坪掘1、2、南側斜面に位置するHトレンチからは明確な遺構が検出されておらず、これらの土器の原位置がどこであったのか、また何のためにそれほど多量のしかも幅広い時期にわたる土器が出土したのかを究明するにはいたらなかった。

#### <坪掘-1>

当初、Eトレンチの西側斜面に幅4～5m程の平坦面が多数見られたことから遺構の存在する可能性があるのではないかということで坪掘1～4を設定した。坪掘-1は第3調査区のEトレンチの西側斜面上に位置し、東西4m、南北5mを測る。調査の結果、地表から約30cm下げたところで炭化物を多く含む層を検出したが遺構はなく、さらに30cm程下げたところで炭化物及び焼土を多量に含んだ層を確認した。しかし地元の人の話によると近年までこの場所で炭を焼いていたということで、遺物もまったくないところから現代の炭焼跡と判断し、地山まで掘り下げて遺構がないことを確認して調査を打ち切った。

#### <坪掘-2>

坪掘-2は坪掘-1の西方に設定したグリッドで、東西3m、南北7.5mを測る。調査の結果、東壁より坪掘-1で検出した現代の炭焼跡の続きたと考えられる炭化物を多量に含んだ層を確認した以外は、かくたる遺構は見られなかった。

坪掘-1で検出した現代の炭焼跡の続きたと考えられる。

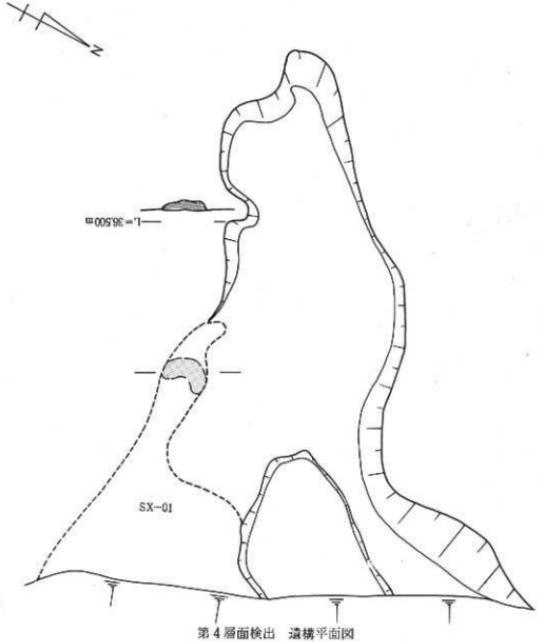
### <坪堀-3, 坪堀-4>

坪堀-3, 4は山腹斜面に幅4~5m程の平坦面が見られたため遺構の有無を確認する目的で設定したグリッドである。各グリッドの大きさは坪堀-3が東西7m, 南北5m, 坪堀-4が東西6m, 南北4.5mを測る。坪堀-3を表土から約1m下がた面において幅2~5m, 長さ6m以上の焼土塊と炭化物を多量に含んだ黒褐色土層の広がりと数個のピットの平面プランを確認した。黒褐色土層の東側の縁については、水を多量に含んだ土が崩れたために検出することができなかった。黒褐色土層の平面プランのうち、特に西側では加熱を受けた焼土の塊が2×2mの範囲で、厚さ20~40cmにわたって堆積していた。同層は1層下の暗褐色土をやや掘りくぼめた後に堆積する状況を示すことから、何等かの意図をもってこの場に火を焚いたものと思われ、検出した焼土塊の大きさや厚さと炭化物の量から見て、少なくとも数時の使用があったものと考えられる。遺物としては須恵器や土師器、黒曜石の石器等が数点出土した。

この遺構面から大小合せて11個のピットを検出した。ピットの規模は表の通りであるがいずれも形が不整形で深さも比較的浅く、ピットというよりも土坑に近いものが多い。また焼土層との切り合い関係であるが、P1, P2, P3, P7は焼土層に掘り込んでいることから焼土堆積後に掘り込まれたものと考えられる。その他のピットについても焼土層と同じ面から穿っているためほぼ同時期かそれ以後のものだと考えられる。ピットはいずれも浅く不整形なことから、柱穴とは考えにくく、建物の復元はできなかった。出土遺物としては、P1とP8から須恵器片が出土している。また焼土の西側で2.2×0.5mの落ち込みを確認し掘下げてみたところ、内部は空洞になっており伏流水が流れていた。このためこの落ち込みは伏流水の水路と判断した。

坪堀-3から上記の遺構を検出したことから遺構の西側の広がりを見るために坪堀-4との間にあった壁を排除した。坪堀-4では表土から約1m掘り下がたところで急斜面な地山にあたり、地山面で幅2.0mの溝状の落ち込みを検出した。溝状の落ち込みは斜面を下りながら東方向へ約3m伸た後、伏流水の流水路へとつながっていた。また出土遺物もないことから、この溝も伏流水が通ってきたものと判断した。

遺物については、焼土層中より須恵器の蓋坏類や土師器の壺片が出土している。須恵器は高広編年のⅢBからⅣAの時期のものが見られた。P1とP8からも須恵器片が出土しているが、時期は不明である。焼土層を検出した面の北東側の一部では下層の暗褐色土を検出しておらず、須恵器と土師器の一群が焼土と同じレベルから出土した。須恵器は壺類、皿、盤、高坏、土師器は壺等であった。時期的には高広編年のⅣA~ⅣB期の土器だと考



第67図 烧土遺構平面図

えられる。

焼土層を除去した後、下層の暗褐色土の上面を精査したところ、幅0.5～2m、長さ2.2m以上、深さ最大50cmの土坑状の落ち込みを検出した。層位的には焼土層の直下の層で、同じように第3層を掘込んでいるが焼土層との直接の関連はわからなかった。土坑状の落ち込みの埋土は2層にわたって堆積しており、そこから須恵器片が若干出土している。暗褐色土は、土器窯りでも見られた層であり、同じようにかなりの数の土器が出土した。須恵器では蓋坏類、盤、皿、高坏、甕、鉢型土器、土師器の甕、瓶等が見られた。時期的には高広編年のⅡB～IVB期までのものが見られ、量的にはIVA期の土器が最も多かった。

第3層の暗褐色土を除去した結果、下層の茶褐色土面は幅1.7～2.3m以上、長さ9mの規模で扁状に東側へひろがりながら堆積していた。同層上面から再び大きさが0.4×0.7m、厚さ15cm程の焼しまった土を検出し、周辺の土にも焼土の細片や炭化物が混入していた。この状況から第4層面でも数回火を焚いたものと考えられる。第4層の出土遺物としては須恵器の蓋坏類、甕、土師器の甕、瓶等が出土している。須恵器は高広編年のIB～IVA期のものが見られる。

第12表 坪3-3SX-01近辺のピット

	上端 径 cm	下端 径 cm	深さ
P 1	東西100×南北52	東西 78 ×南北36	29
P 2	" 24 × " 46	" 18 × " 38	31
P 3	" 26 × " 66	" 14 × " 36	13.2
P 4	" 22 × " 80	" 12 × " 66	12.5
P 5	" 74 × " 36	" 60 × " 24	15.2
P 6	" 56 × " 88	" 24 × " 46	27.3
P 7	" 150 × " 77	" 115 × " 60	10.3
(S <sub>1</sub> )	( " 48 × " 29)( " 45 × " 25)	( 1.4 )	
(S <sub>2</sub> )	( " 28 × " 25)( " 16 × " 15)	( 45 )	
(S <sub>3</sub> )	( " 58 × " 28)( " 53 × " 18)	( 11.8 )	
P 8	" 78 × " 60	" 68 × " 46	15
P 9	" 24 × " 28	" 20 × " 20	11.1
P 10	" 28 × " 22	" 20 × " 16	22.9
P 11	" 52 × " 34	" 40 × " 20	13.3
P 12	" 26 × " 26	" 16 × " 16	8.7

第5層以下からは、遺構を検出することができず、土器滲りで検出したのと同じような遺物包含層が堆積していた。第5層の暗灰色土では須恵器の壺片が2片出土した。第6層の淡灰色粘質土層からは須恵器の环身が1点出土しており、高広編年のⅡA期頃に相当するのではないだろうか。

第7層の青灰色粘質土層からは須恵器の蓋杯類、甕、長頸壺、土師器の甕、支脚の突起部等が出土している。須恵器の時期はⅡA～ⅣA期のものが見られる。第8層の灰色シルト層からは須恵器の蓋杯類、甕等が出土している。須恵器ではⅢA～ⅣA期のものが見られた。第5層以下の土器の出土状況は土器滲りの堆積層の状況とほぼ同じであるが、第5層からの遺物量がやや少なかった。

第8層除去後の地山の状況を見ると伏水路も含め急斜面から下方へ局形に広がり、全体としては谷状をなしている。またその北側は土器滲りのあった斜面へとつながっており、包含層が堆積する以前は谷奥部で東側へ入り込んだ形であったようである。そうして原地形の上にまず第8層から第5層までの土層が順次堆積していき、4層上面で一度加熱を加えたSX-02が作られた。

その後再度第3層が流入しその面を掘込んでSX-01を作ったという一連の流れが考えられる。また、いずれも幅広い時期の遺物が出土しており、第8層から第3層までの最も新しい時期の土器が似通っていることから土器滲りの堆積状況と同じく比較的短期間に堆積したのではないだろうか。

SX-01とピットの時期は、1層上の層から14～15世紀の陶磁器が数片出土していることと、黒褐色土層の下の暗褐色土層出土の最も新しい土器が高広編年V期の須恵器であることから考えて、年代幅がやや広くなるが、9世紀中頃から15世紀までの間と考えられる。

2層にわたって検出した焼土状遺構の性格については、第4層面から検出した焼土は小規模なためせいぜい1～数回使用されただけのものであろうことから、屋外の簡易炊事場や焚火をした可能性が考えられるかもしれない。上層の第3層を掘込んだSX-01は平面的な広がりや堆積した層の厚さから考えて数回から数十回の使用が考えられる。当時、島根県教育庁文化課の御教示によれば、共同炊事場や窯に使っていた可能性も考えられるということであったが、窯壁を検出することができなかつたり遺構に直接関連するような遺物の出土状況がなかったためいずれも決め手を欠き、明らかにすることはできなかった。

### <Hトレンチ>

HトレンチはEトレンチを設定した丘陵が東側へとまわっていく北向きの斜面に設定したトレンチである。規模は5×5mを測る。表土から約1m掘下げたが、遺構、遺物ともに検出できなかったため調査を打ち切った。

(荻 雅人)

### [第4調査区]

別所から鹿沢Bへ越える峠の北東側斜面に位置し、標高40~61mを測る。(第68図)調査前、斜面全域から多量の須恵器(図版53)(4-8, 10~13)と窯壁塊数個を表探していくので、窯の存在を想定して調査を行なったものである。トレンチは斜面の中程に2本と斜面に直交して1本、頂上の平坦面に1本設定した。順にF, G, K, Jトレンチと呼ぶ。(セクションは第71図を参照)

### <Fトレンチ>

斜面に平行に設定したうちの下側のトレンチである。幅2m、長さ26mである。表土と第2層褐色土はあわせて0.3~0.5mを測り、少量の須恵器片が出土したのみであった。その下層は大部分が明褐色土の地山であったが、トレンチの西から5mの範囲で0.1~0.25mの厚みの暗褐色~黒褐色土(炭混入)の堆積がみられたので、北、西、南の三方に拡張して、遺構と遺物の所在を追った。その結果が第69図である。この土層中の出土遺物は、須恵器の短頸壺(4-1, 9)、坏蓋(4-2, 17)、环身(4-16, 18)、長頸壺(4-14)、高台付杯(4-15)、土師器壺の口縁部(4-5)、窯壁塊2個等が出土した。黒褐色土の下層は明褐色土の地山で、この面から焼土1、溝状遺構2、ピット14を検出した。

焼土: 0.9×1m

溝状遺構: SD-01・幅30~40cm、長さ2.4m以上、深さ8~10cmを測る。

SD-02・幅30~40cm、長さ1.7m、深さ7~8cmを測る。

ピット群: 調査区西南の4穴は1列に並ぶので、柵列状遺構とする。(第70図)

### <Gトレンチ>

Fトレンチの上部に設定した幅2m、長さ33mのトレンチである。伐開直後に多量の須恵器片を表探していたが、表土から地山に至る0.5~0.6mの間に出土した遺物は須恵器壺口縁部(4-4)他数片であり、遺構はなかった。

### <Jトレンチ>

頂上の平坦面に設定した幅3m、長さ21mのトレンチである。Gトレンチ付近表探の壺片は頂上の平坦面から落ちてきたものではないかと考えて設定したものであるが、表

土した20cm前後ですぐ地山となり、遺構も遺物も皆無であった。

#### <Kトレンチ>

Fトレンチに直交する形で設定した幅4m、長さ16mのトレンチである。表土と褐色土の2層からなり、0.5~1mで地山に達する。表土中より須恵器小片が多数出土した。第2層からは、静止糸切りの高台付坏(4-7)の他、須恵器片、土師器片がかなりの量出土した。遺構はなかった。

#### <まとめ>

窯の存在を想定して設定した調査区であったが、残念ながら検出できず、多量の甕片が何に由来するものであるかを明らかにすることはできなかった。

唯一遺構らしいものが出土したFトレ拡張区でも、むしろ生活に関わりのある感触が強かった。

#### 〔第5調査区〕

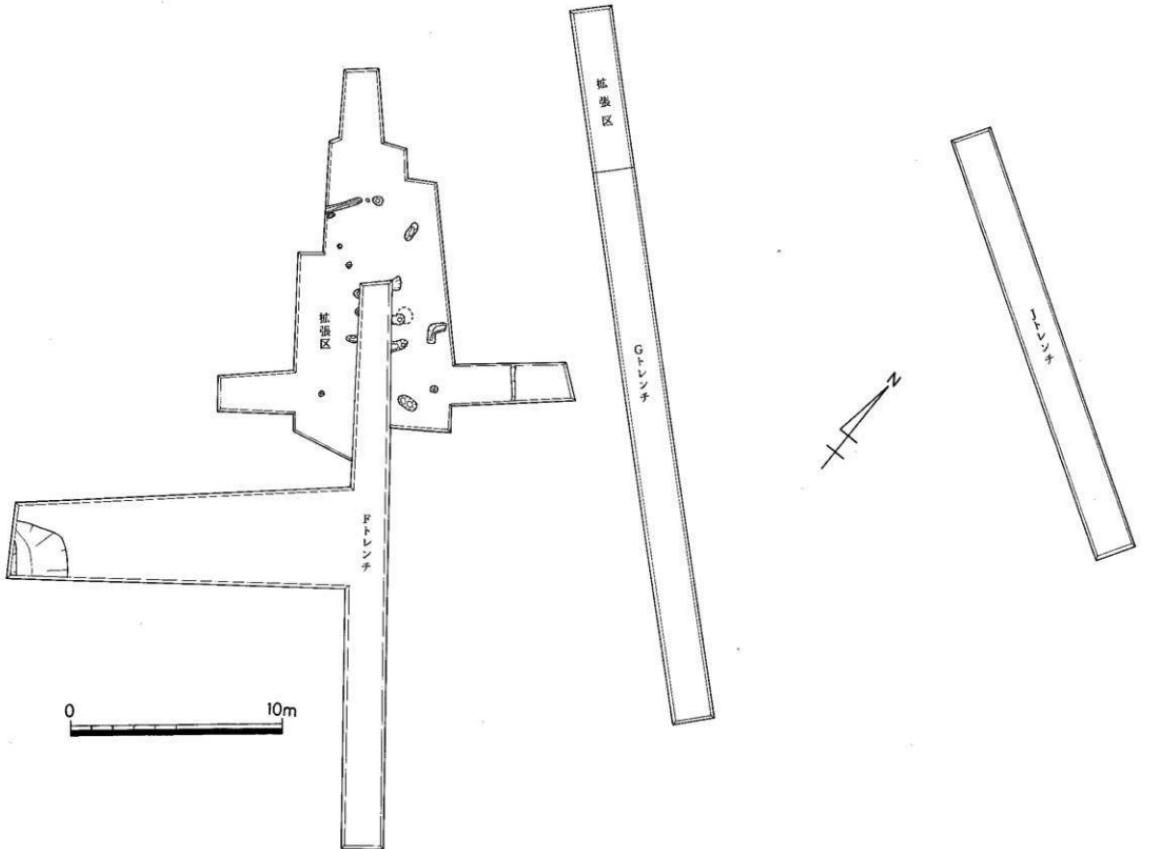
別所池東の水田からさらに東に分け入った細長い谷の北側斜面に設定したトレンチで、(第73図)幅2m、長さ100mを測る。標高は約38~48mである。

土層は、表土5~10cm、第2層茶褐色~赤褐色土15~30cmを測り、第3層で赤褐色土に礫を多く含んだ地山となる。

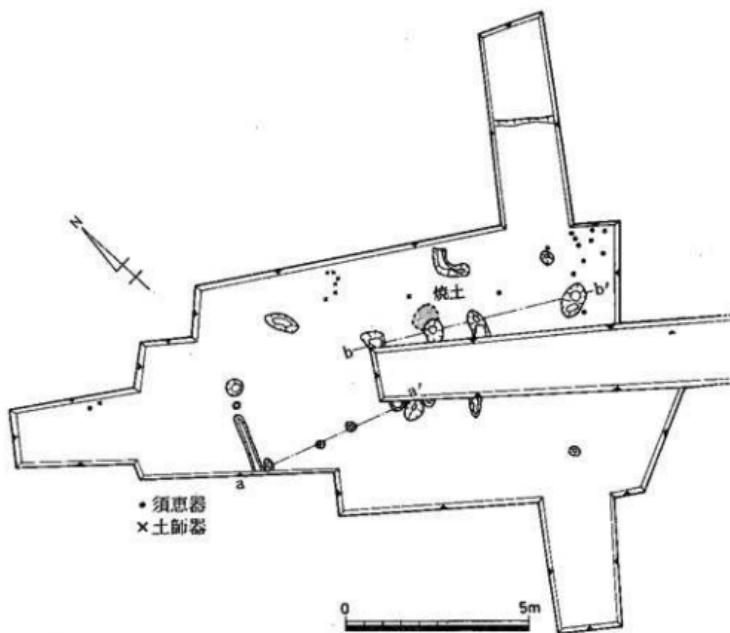
第2層の下部で、須恵器の高台付坏(5-1)及び土師器甕片が出土したので、(第72図)その地点でさらに北へ拡張したが、遺構は検出されず、わずかに土師器の把手(5-3)が出土したのみであった。

又、前述の土器出土地点より西へ3.5mの地山直上で、土師器の甕の口縁から体部片が2個体分(図版54)(5-4、5)まとまって出土した(第74図)が遺構ではなく、原位置は失っているものと考えられる。調査区内出土の遺物は以上の外に第2層より紡錘車3個体(F-5、6、7)、聰(5-6)、土師器甕口縁部(5-7)が出土しており、谷の東奥の表採品には高台付坏(5-2)がある。

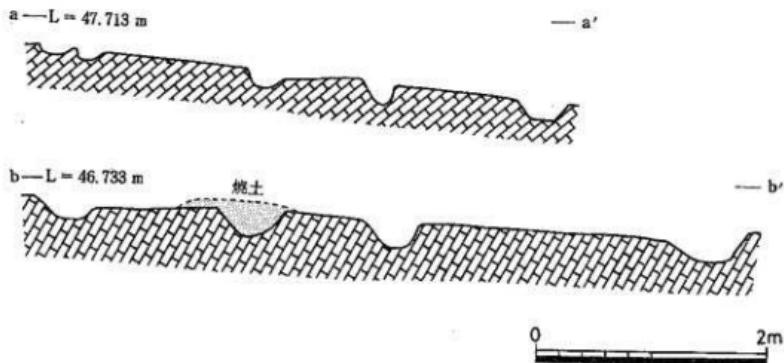
(瀬古涼子)



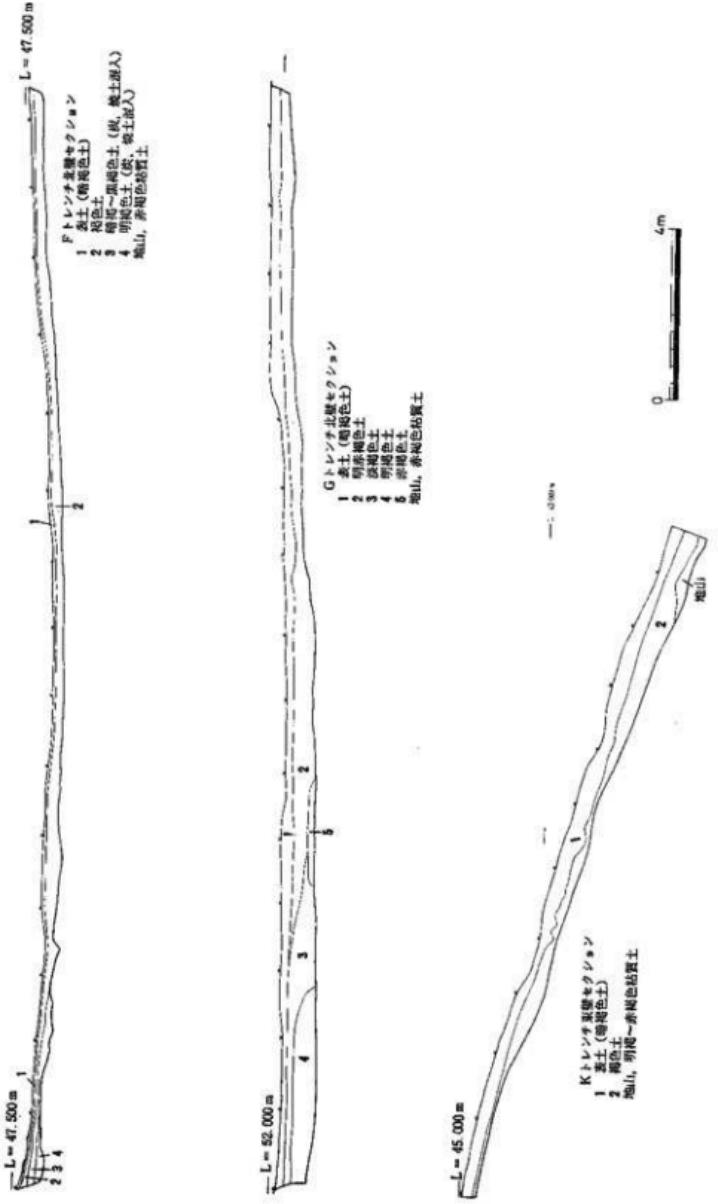
第68図 第4調査区全体図



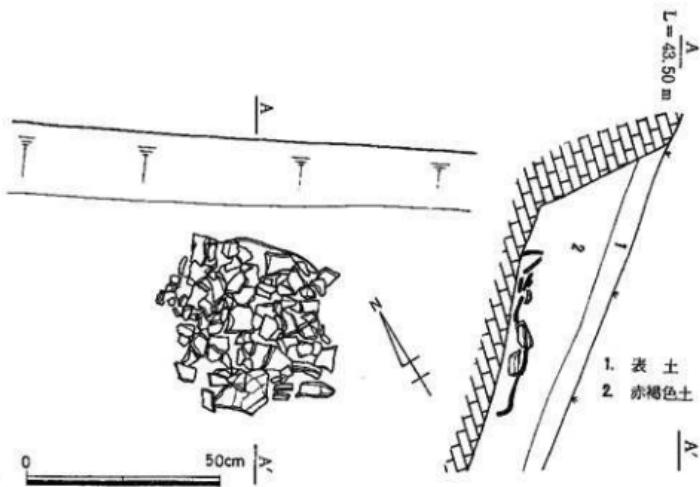
第69図 Fトレンチ拡張区平面図



第70図 Fトレンチ拡張区断面図



第71図 F・G・Kトレシクション図



第72図 第5調査区土器出土状況図

第74図 第5調査区土層図及び土器出土状況図



第73図 第5調査区全体図



#### 4. その他の遺物

##### (木製品)

別所遺跡では、総数260余点の木片が出土し、実測可能な遺物で木製品と認められるものは54点あり、うち41点を掲載した。

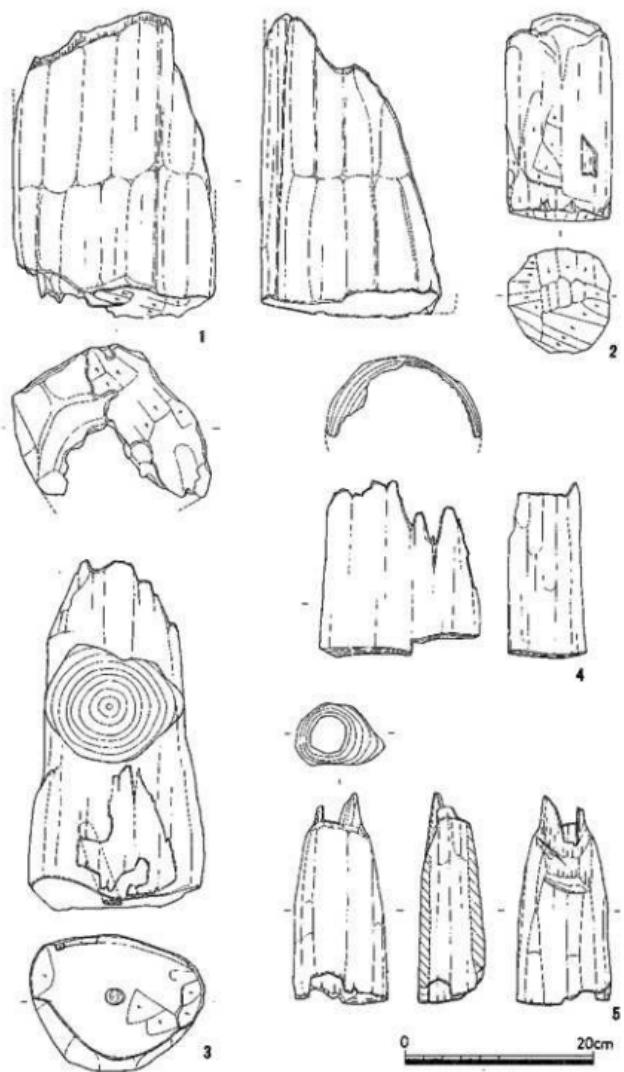
主な出土地点は第3調査区Eトレンチの第6~10層のシルト層中と、第1調査区のピット中である。

##### <柱材>

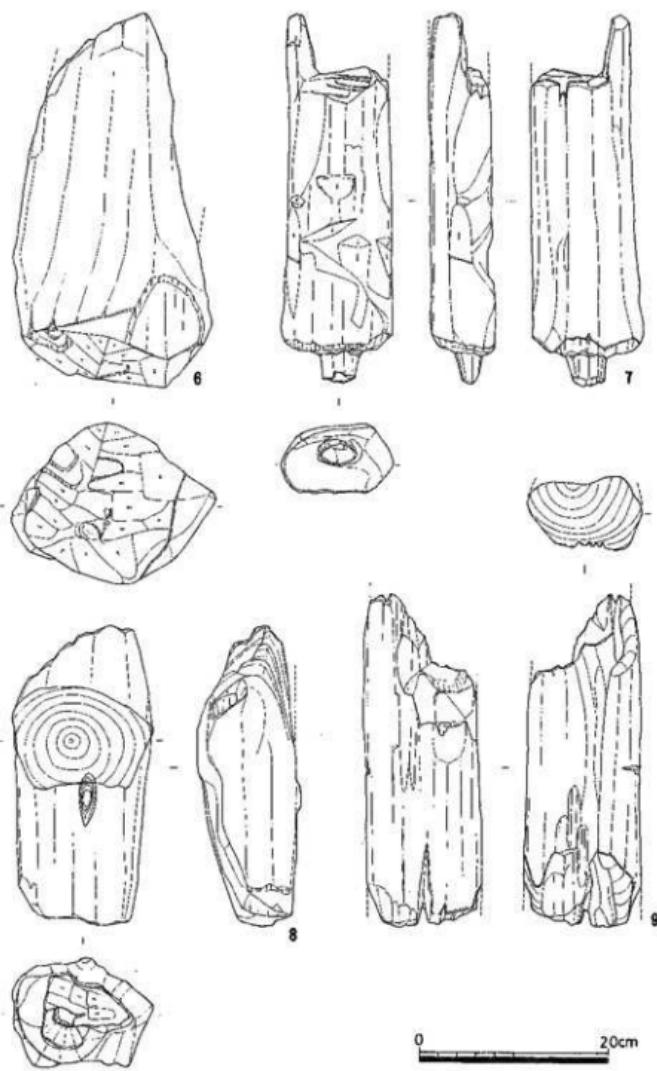
(1)は現存長32.0cm、幅17.8cmを測り、心持材を使用する。大部分腐蝕して欠損するが、形態から推定すると、角形柱根であろうと思われる。側面は面取りされ、底面は一部に削り痕が残る。(2)は現存長22.1cm、径11.0cmを測り、心持材を使用する。側面には一部削り痕が残り、底面にも加工時の削り痕が残る。(3)は現存長37.5cm、最大径18.7cmを測り、心持材を使用する。大部分は腐蝕しているが、一部に樹皮が残り、底面には加工時の削り痕が残る。また、底部より斜方向には深さ9.0cm程度の穴が穿たれているが、用途は不明である。(4)は現存長18.7cmを測り、元来は心持材を使用したものと想定される。大部分は腐蝕し、側面、底面共に加工痕は認められない。(5)は現存長22.6cm、最大径9.5cmを測り、心持材を使用するが、腐蝕のため、木心部分は抜けている。側面は面取りされている。(6)は現存長39.7cm、最大径20.7cmを測り、心持材を使用する。側面には加工痕は認められない。底面には削り痕が残る。(7)は現存長39.5cm、最大径12.0cmを測り、心持材を使用する。両端は折損しているが、側面には一部削り痕が認められる。(8)は現存長32.0cm、最大径14.0cmを測り、心持材を使用する。側面には加工痕が認められない。底面は腐蝕しているが、一部加工時の削り痕を残す。(9)は現存長35.6cm、最大径は12.0cmを測り、心持材を使用する。両端は折損し、加工痕は認められないが、柱材の一部と考えられる。(10)は現存長28.4cm、最大径11.4cmを測り、心持材を使用するが、腐蝕のため木心部分は抜けている。(11)は現存長30.0cmを測り、心持材を使用する。大部分が腐蝕して欠損し、原形を留めない。(12)は、現存長14.5cm、最大径6.0cmを測る。腐蝕のため大部分を欠損し原形を留めないが、元来は心持材を使用した柱材であろうと考えられる。(13)は現存長13.0cm、最大径4.3cmを測る。腐蝕のため大部分を欠損し、木心は抜けているが、元来は心持材を使用した柱材であろうと考えられる。

##### <容器>

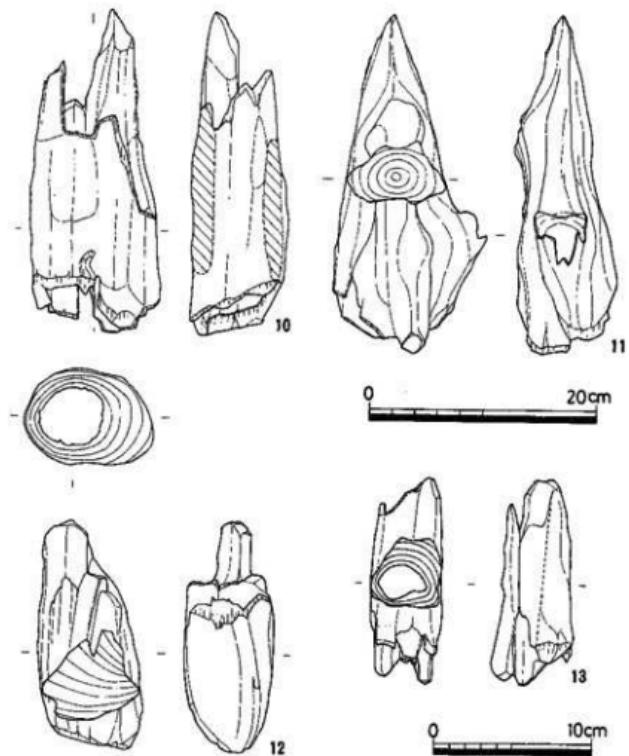
(14)は円形曲物の蓋板で18.3×17.7cm、厚さ0.7cmを測り、柾目材を使用している。3ヶ所に側板を取り付ける為の結合孔があり、一部側板も残り、桿皮紐によって取り付け



第75図 木製品実測図

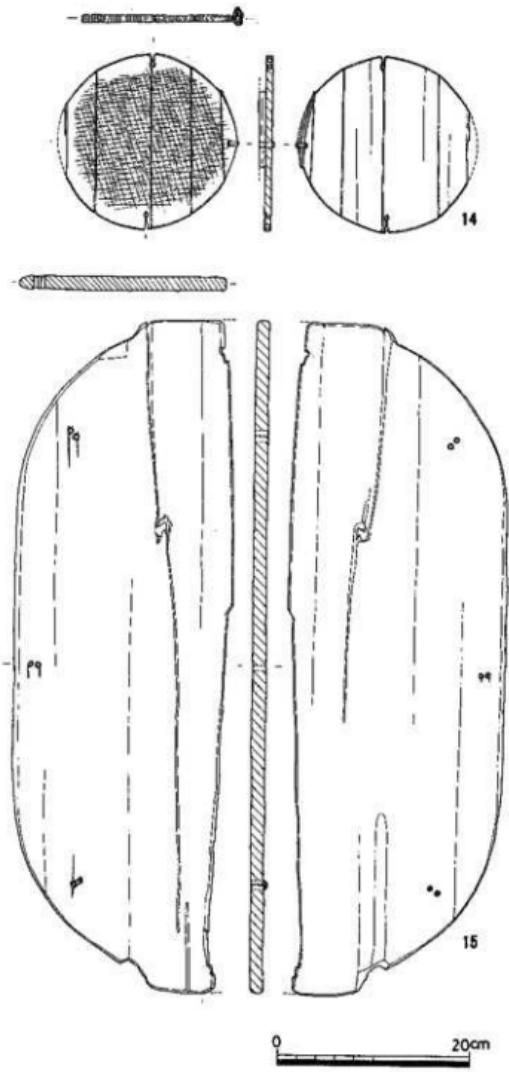


第76図 木製品実測図

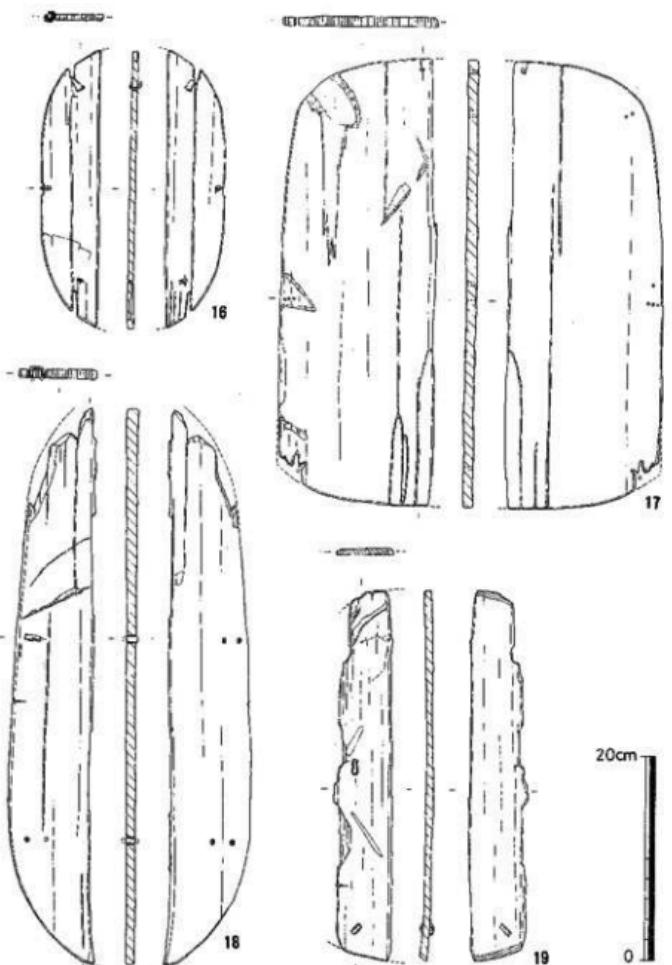


第77図 木製品実測図

られている。側板は幅 1.0 cm, 厚さ 0.1 cm の板目材の板を曲げたものである。また蓋上面には不定方向に無数の細かい刃痕がある。図は梢円形曲物の蓋板で、長さ 69.4 cm, 幅 22.5 cm, 厚さ 1.5 cm を測る大型のものである。柾目材を使用し、約 1/2 を欠損するが、5ヶ所に側板を取り付ける為の結合孔があり、1ヶ所に棹皮紐が残る。図は梢円形曲物の蓋板で、長さ 27.4 cm, 幅 5.6 cm, 厚さ 0.5 cm を測り、柾目材を使用している。約 1/2 が欠損するが、3ヶ所に側板を取り付ける為の結合孔があり、うち 2ヶ所に棹皮紐が残る。図は長方形曲物の蓋板で、長さ 44.0 cm, 幅 15.4 cm, 厚さ 1.0 cm を測り、柾目材を使用する。約 1/2 が欠損するが、3ヶ所に側板を取り付ける為の結合孔があり、1ヶ所に棹皮紐が残る。図は梢円形



第78図 木製品実測図



第79図 木製品実測図

曲物の蓋板で、長さ54.7cm、幅8.0cm、厚さ1.0cmを測り、柾目材を使用している。 $\frac{1}{2}$ 以上は欠損するが、2ヶ所に側板を取り付ける為の結合孔があり、桟皮紐が残る。図18は曲物の蓋板片で、長さ36.3cm、幅5.5cm、厚さ0.7cmを測り、板目材を使用する。 $\frac{1}{2}$ 以上が欠損し、原型を復元し得ないが、1ヶ所に結合孔があり、桟皮紐が残る。

### <板 材>

Ⓐは現存長44.2cm、幅6.0cm、厚さ1.5cmを測り、板目材を使用する。納穴部分で折損し、わずかに痕跡を留めるのみである。Ⓑは現存長34.3cm、幅11.0cm、厚さ2.3cmを測り、柾目材を使用する。1.5×1.3cmの納穴を1個穿つ。両端は折損している。Ⓒは現存長46.5cm、幅20cm、厚さ1.9cmを測り、柾目材を使用する。両端は折損している。Ⓓは現存長28.5cm、幅8.0cm、厚さ1.6cmを測り、柾目材を使用する。一部折損している。Ⓔは現存長25.3cm、幅5.0cm、厚さ1.0cmを測り、柾目材を使用する。表面は削られて平坦であるが、裏面は未調整で起伏が激しい。一部折損している。Ⓕは現存長19.0cm、幅5.6cm、厚さ1.4cmを測り、板目材を使用する。左側面に段状の加工を施す。両端は折損している。Ⓖは現存長35.6cm、最大幅10.6cm、厚さ1.2cmを測り板目材を使用する。一部折損している。Ⓗは現存長30cm、幅10.2cm、厚さ1.3cmを測り、板目材を使用する。一部折損している。Ⓘは現存長11.3cm、最大幅6.1cm、厚さ1.2cmを測り、柾目材を使用する。一部欠損する。Ⓛは現存長15.7cm、幅5.6cm、厚さ1.4cmを測り、板目材を使用する。側面2ヶ所に孔を有するが、用途は不明である。Ⓜは現存長9.0cm、幅11.8cm、厚さ2.2cmを測り、柾目材を使用する。表面及び側面に加工痕が残る。

### <田 下 駄>

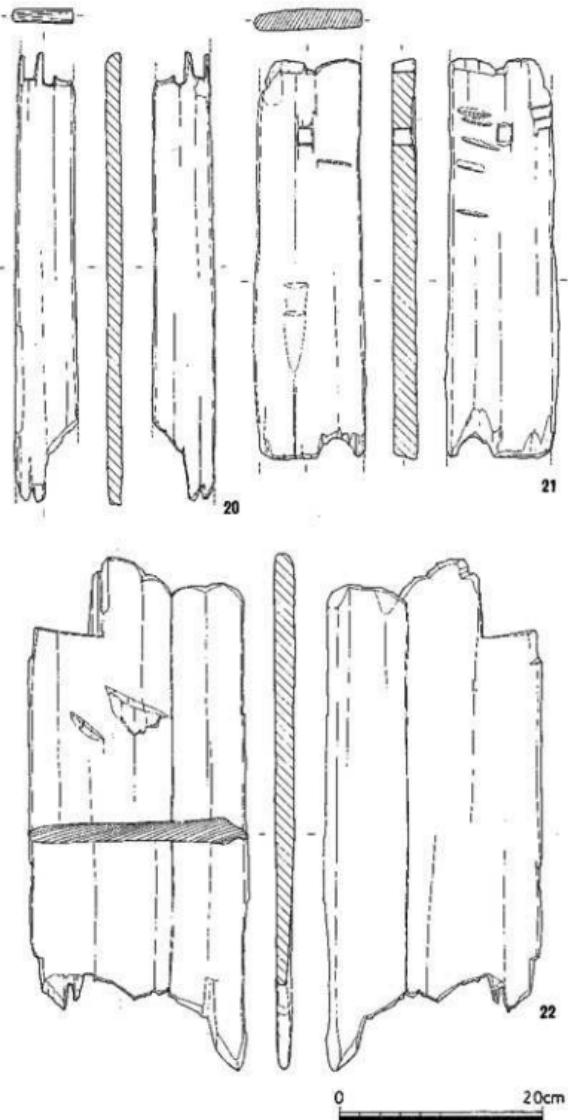
Ⓐは長さ28.1cm、幅6.6cm、厚さ2.9cmを測り、柾目材を使用する。歯は有さず、表面は摩滅して凹む。Ⓑは長さ27.0cm、幅10.0cm、厚さ1.4cmを測り、板目材を使用する。計3個の鼻緒孔が穿たれ、下方には一列に4個の小孔があり、内3孔には木釘が残存する。棒を取り付けた際のものであろうと考えられる。

### <火 織 板>

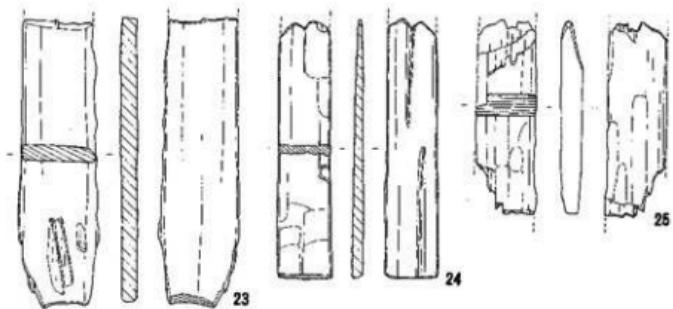
Ⓐは長さ17.2cm、幅4.7cm、厚さ2.3cmを測り、板目材を使用する。穴は左側辺と上側辺に計6個あり、いずれも内部が黒く焦げ、使用された痕跡が伺える。

### <その他の木製品>

Ⓐは杭状木製品で、現存長34.0cm、最大径5.0cmを測り、心持材を使用する。Ⓑは杭状木製品で、現存長26.7cm、最大径4.5cmを測り、心持材を使用する。ⒸⒹⒻⒼはいずれも折損しているが、断面は梢円形を呈し、表面は摩耗しており、農具等の柄に使用されていたものと考えられる。Ⓗは杭状木製品で現存長12.6cm、径7.0cmを測り、心持材を使用する。先端は片面のみを削って尖らせてある。側面には一部に表皮が残る。Ⓜは杭状木製品で現存長35.2cmを測る。上部の穴は枝の節が抜けてできたものであるが、内部が焦げている。また先端部分も一部焦げている。Ⓝは現存長20.3cm、幅31.3cm、厚さ



第80図 木製品実測図

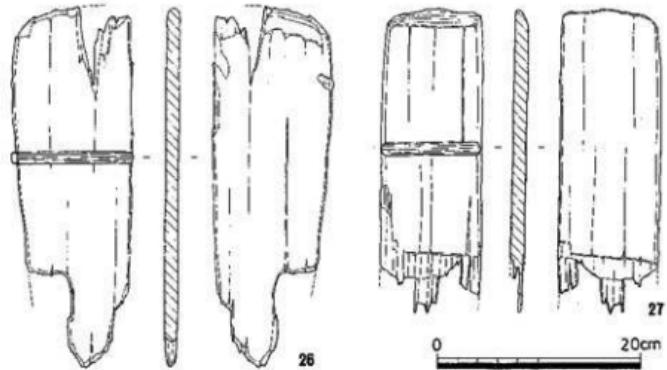


23

24

25

26



26

0

20cm

27

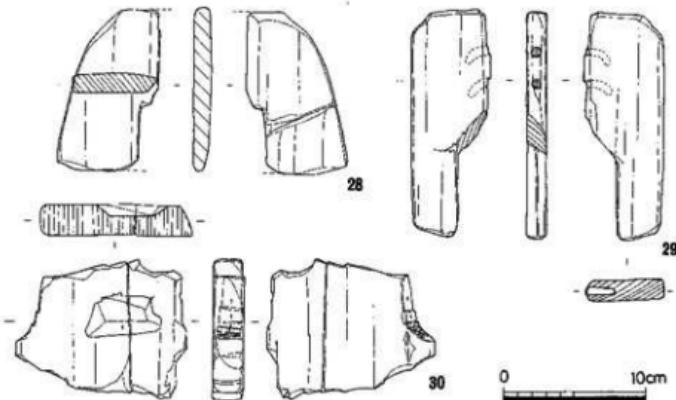
28

29

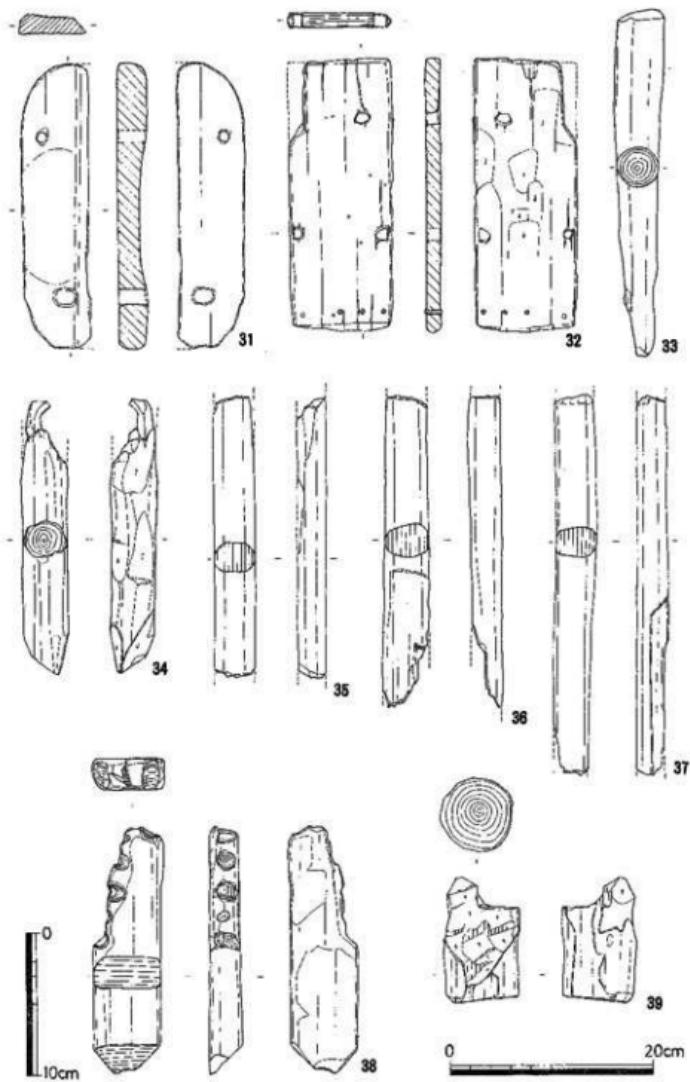
30

0

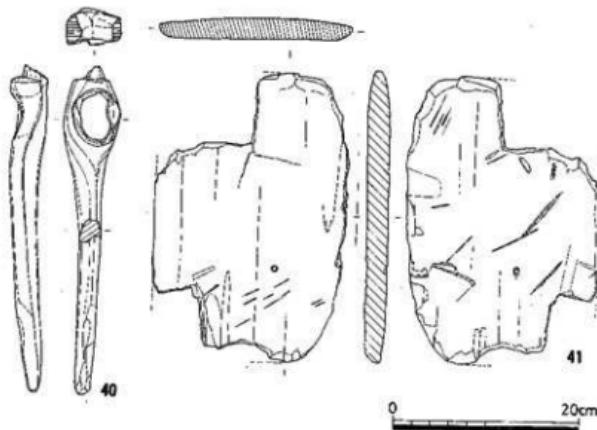
10cm



第81図 木製品実測図



第82図 木製品実測図



第83図 木製品実測図

2.3 cmを測り、柾目材を使用する。表裏とも削り痕が残る。鍛等の未製品であろうと考えられる。

#### <小 結>

本遺跡出土遺物については柱材等の建築用材と、容器、火鐵板等の生活用具、田下駄等の農耕具に分かれる。

柱材は本遺跡では13点出土している。第1調査区ピット中より出土した柱根については底面の調整が残るものは少ないが外方から内方へ向かって削る特徴が見られる。時期は出土遺物から推定すると、6～7世紀であろうと考えられる。

生活用具類は、第3調査区Eトレンチから出土した。Eトレンチには土器溝りが検出され、木製品は遺構に伴うものではなかった。

曲物容器は、本遺跡では6点出土している。本遺跡出土のものは円板の上にひとまわり小さい側板を当てて、円板に2孔1対、側板に1孔の結合孔をあけ、縫紐で結合したもので、木器集成図録の中で、樺皮結合曲物Bに分類されるものである。しかしこの分類に従えば、本遺跡出土の物は全て蓋板になるので、樺皮結合曲物Bをもって蓋板と底板に共用した可能性も考えられる。時期は土器溝りの出土須恵器から推定すると、6世紀後半～9世紀の頃であろうと考えられる。<sup>註1</sup>

火鐵板は本遺跡では1点出土している。類例はタテヂュウ遺跡3例、才ノ岬遺跡4例<sup>註2</sup><sup>註3</sup>

があるが、それらに比べて本遺跡出土の資料は小型で、不整形な刃も使用している。時期は土器溜りの出土須恵器から推定すると、6世紀後半～9世紀にかけての頃であろうと考えられる。

農耕具も第3調査区Eトレンチから出土した。

下駄は本遺跡では2点出土している。いずれも歯を持たず田下駄であろうかと考えられる。<sup>註4</sup>32は木器集成図録の中に類例が見られる。時期は土器溜りの出土須恵器から推定すると、6世紀半～9世紀にかけての遺物であろうと考えられる。

柄状木製品は本遺跡では3点出土しているが、おそらく農耕具用のものと思われる。

農耕具未製品は1点出土している。鍔等の未製品であろうと考えられる。

板材については、用途不明のものが多く、枘穴等の加工のあるものは建築部材とも考えられるが、今後の資料増加を持って検討せざるを得ないであろう。

以上の出土遺物の組み合わせから考えると、生活の痕跡を感じさせるものが多く、付近に住居址の存在が推定される。

(飯塚康行)

註

註1 奈良国立文化財研究所「木器集成図録」(1985年)

註2 島根県教育委員会「タテチョウ遺跡発掘調査報告書」I (1979年)

註3 島根県教育委員会「才ノ峰遺跡」(『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』IV 1983年)

註4 註1と同じ。本文中の0815と同じタイプのものと思われる。

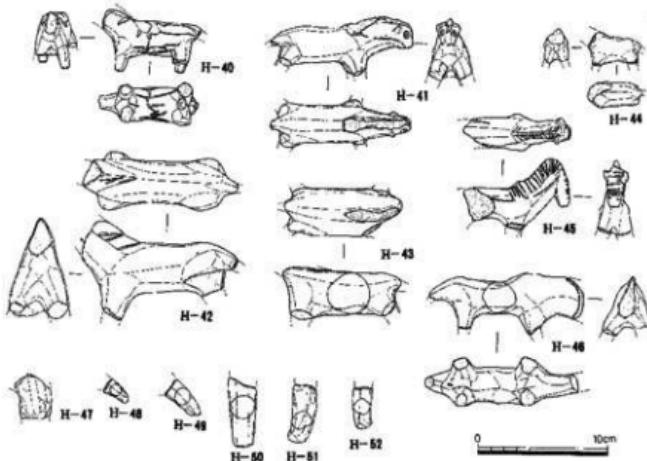
## (土馬)

別所遺跡(以下本遺跡とする)出土の土馬は総数13点を数えるが、全てが須恵質で、その内胸部があるものが7体あり、他は脚部が4点、尾が2点ある。胸部が残存するものの内顎部がつくものは2点しかない。これらの土馬の中で、注目すべき点はH-46がS I - 0 1中のピットから出土していることである。ではまず、住居址出土の土馬から見ていくこととする。

★ 住居址出土の土馬 H-46はS I - 0 1(第62図)の中のP 4の上層壁際より出土した裸馬である。大変焼きが悪く軟質で、顎、四肢を欠損している。中型で肛門孔を有する。この竪穴住居からは山陰Ⅲ～Ⅳ期、高広編年のI B～II A期と並行する須恵器が出土しており、この土馬もこの時期だと考えることができる。

次に本遺跡出土の飾馬について見る。飾馬は3体出土しているが(H-40, 41, 45)、馬具を全て備えた皆具式のものは1体しかなく、他は沈線で手綱を表現するのみである。

★ 飾馬 H-40は小型であるが、男根を表現する突起を股間に持つ。粘土紐貼付によって馬具を表現するが、粘土紐の幅は均一でなく、雑な馬具表現をしている。頭部、前肢1、後肢1、尾を欠損する。H-41は手綱のみを沈線で表現する。中型で尾の下に肛門孔を穿つ。四肢及び尾を欠くが、顎部が残存している。目は粘土粒を貼付その上から刺突して表現するもので、薗沢でも同じ表現のものが3点出土している。この土馬は丁



第84図 別所遺跡出土土馬実測図

寧なナデを施しているが、形態的には頭部に比して首が太くアンバランスな形状をしている。H-45は腹部から頭部にかけて残存しているが、前肢は2本共に欠損している。顔は刺突して目、鼻を表現し、口は凹みをつけている。沈線で手綱のみを表現するもので、たてがみは縦方向に沈線を施している。沈線は顔部にも横方向に数条ある。たてがみを縦方向に沈線で表現するものはH-42がある。またH-39も同様な表現を行なっている。他府県での例を見ると、京都府高槻市山上郡衙跡<sup>註3</sup>、三重県斎宮跡<sup>註4</sup>、滋賀県供養塚古墳<sup>註5</sup>、同県新旭町波瀬布神社遺跡<sup>註6</sup>、石川県鹿島郡鹿島町芹川遺跡<sup>註7</sup>、同県小松市月津茶臼山祭祀遺跡<sup>註8</sup>、熊本県宇土郡小曾部等に類例があり、全国的に行なわれた表現法であることがわかる。

次に本遺跡でも鷹沢同様出土した性別のある土馬についてであるが、雄1体のみが検出された。飾馬のところで紹介したH-40がそれである。鷹沢出土のものと比較して本遺跡のものは、粘土紐を下腹部に密着させたものではなくて、粘土を突起させて表現したものである。本遺跡での性別をつけた土馬の出土割合は観察可能なものの中の20%にあたる。更に引継ぎ各割合について調べてみると、飾馬は全体の43%あり、残り57%が裸馬である。本遺跡では大型の土馬は出土例がなく、全てが中型と小型の土馬で、71%が中型、29%が小型の土馬である。小型の土馬の内H-40は前述の通りであるが、II-44は大変小型のもので、鷹沢、別所遺跡の中で最も小型のものと言つていいであろう。<sup>註10</sup> 残存長4.0cm、推定全長6.0cm位と思われる。この土馬は小笠原好彦氏の分類によるところではH・I形式に相当すると思われる。次に肛門穿孔したものを見ると3体あり、これは観察可能なものの中の60%にあたる。

以上見てきように本遺跡の土馬は鷹沢遺跡のものに比べると出土個数が少なく、性別をつけた土馬の割合も低い。しかし、飾馬の全体に占る割合は別所43%対鷹沢8.6%と圧倒的に高く、また小型馬の占る割合も同様に29%対12%と2倍以上である。この点が本遺跡が鷹沢遺跡の土馬と異なるところであり、特質として考えられるところである。その特質については、IV出土遺物の検討に預けたいと思う。

(鈴嶺慶樹)

註

註1 山本清『山陰古墳文化の研究』(山本清先生退官記念論集刊行会 1971年)

註2 島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書 一和田園地造成工事に伴う発掘調査-1』(1984年3月)

註3 大阪市立博物館『動物の考古学』(1987年10月1日)

註4 根岸駒馬記念公苑(馬の博物館)学芸部『馬の博物館特別展古代文化・馬形の謎』(1986年10月)

3月)

註5 註4に同じ

註6 註4に同じ

註7 村上吉郎「土馬祭祀と漢神信仰」(『石川考古学研究会誌』第25号)

註8 註7に同じ

註9 小田富士雄「第八章 古代形代馬考」(『九州考古学研究』古墳時代編)

註10 本編高沢遺跡の土馬参照

註11 小笠原好彦「土馬考」(『物質文化』25 1975年)

## 5. 小 結

調査の結果、1区からは掘立柱建物3棟、建物跡と考えられる260余穴のピット群、それに伴なう土壤及び溝状遺構、2区からは焼土壙と大型不整土壙、3区からは堅穴住居1棟、土器漬り、焼土遺構(SX-01, 02)、4区からは溝状遺構をそれぞれ検出した。この他、コンテナ90箱に及ぶ遺物が出土した。

出土した遺物から別所遺跡の営まれていた時期は、6世紀後半から室町期までと推察される。ただ平安時代後期に空白期が見られることから、この地では断続的に集落あるいは中世土器の窯が営まれていたことになる。当初は高沢A遺跡と同じく6世紀後半に湿地の多い広い谷間の微高地を選んで住居として利用しはじめたものと思われる(I-4区、第3区S-I-01等)。I-4区からの出土品の中には鏡金環等もみられ、経済力の優れた人々も居住していた可能性も考えられる。その後、I-4区のピット群では6世紀後半をピークに8世紀末まで、3区では8世紀中葉から後葉をピークとして9世紀後半まで、場所を移動しながら約300年間にわたり断続的に住居が営まれたものと考えられる。その後住居と考えられるものは14世紀まで見ることができず、13世紀には住居よりはむしろ土器生産地としてこの地を利用したものと考えられ、14世紀から15世紀後半は窯業と集落が併行して営まれたものと推定される。

当遺跡周辺には、越谷窯跡、勝出谷窯跡、明曾窯跡、池ノ奥窯跡といった5世紀末から8世紀末にかけての須恵器窯跡が多数知られており、こういった須恵器生産の伝統を背景として中世窯業が成立していったものと推察される。

いずれにしてもこの地に住居を構えた人々は、大井地区の土器生産と大きく関わりを持っていたものと思われ、本遺跡は大井地区の土器製作工人の一つの生活の拠点であったのではないかと推定される。

(萩 雅人)

第13表 I - 1区出土遺物一覧表

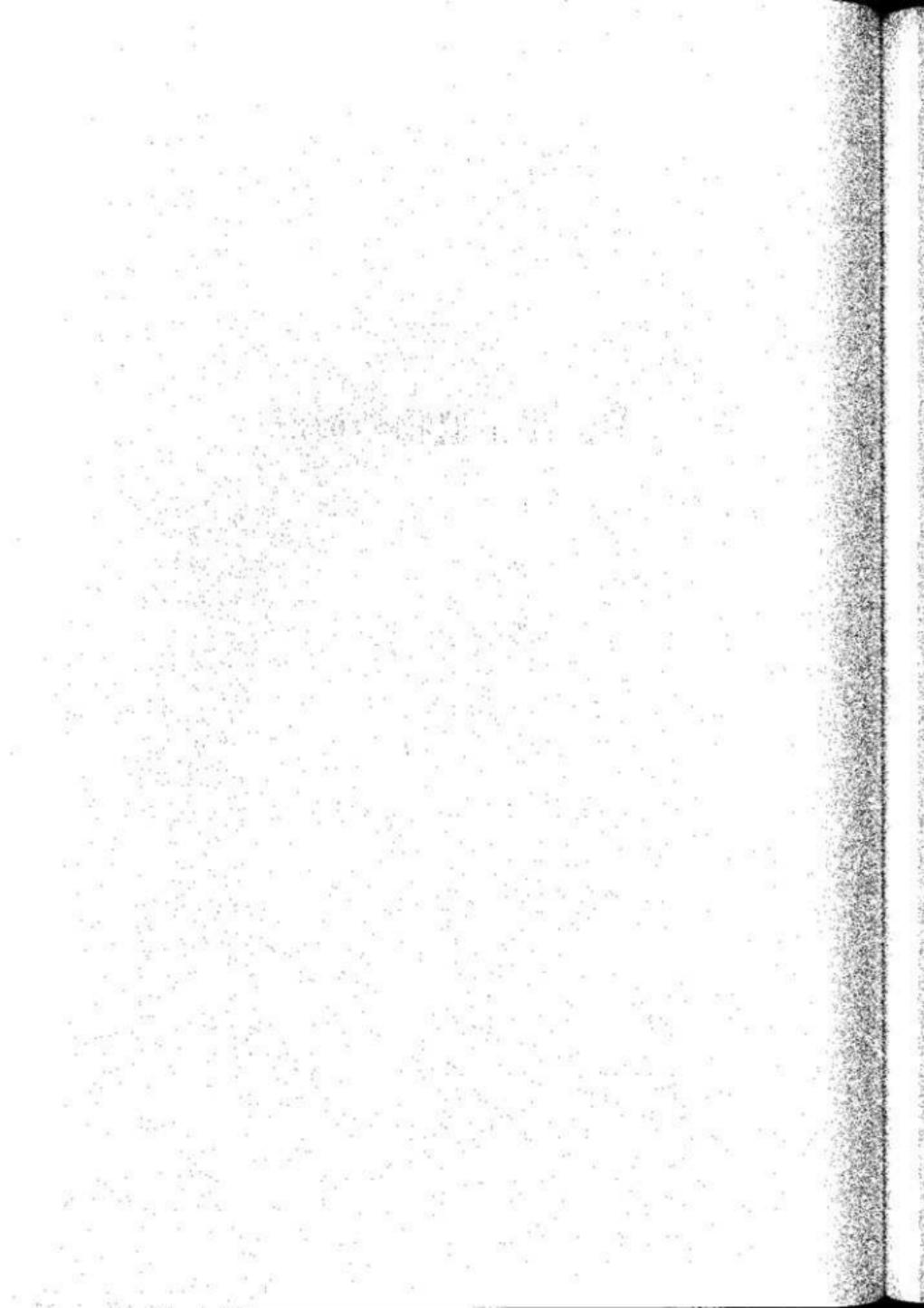
	第1層	第2層	第3層	第4層	第5層	第6層	第7層
龜山燒系統の土器	鍋 I 類			○	○	○	
	鍋有段II類	○			○	○	
	釜				○		
	甕	○	○	○	○	○	
	壺				○	○	
	三足				○	○	
	片口				○		
土師器	皿				○		
	かまと				○		
	土製支脚				○		
土師質土器	灯明皿					○	
	有脚小杯				○		
	皿				○		
須恵器	杯	古墳時代		○	○		
		無高台		○	○	○	
		高台	○		○	○	○
	蓋	古墳時代			○		
陶器	輪状	輪状			○	○	
		甕	○		○		○
		高杯			○		○
	瓶			○	○		
磁器	搗鉢		○			○	
	鉢					○	
	甕					○	
鐵製品				○	○		
銅製品				○			
麻壁塊				○			

第14表 別所木製品出土一覧表

器種		出土位置
1	柱根	第1区 G-0 Pit-70
2	同上	第1区 H-0 Pit-76
3	同上	第1区 H-0 Pit-121
4	同上	第1区 H-0 Pit-81
5	同上	第1区 G-0 Pit-79
6	同上	第1区 H-0 Pit-73
7	柱材	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
8	柱根	第1区 H-0 Pit-75
9	柱材	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
10	柱根	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
11	同上	第1区 H-0 Pit-72
12	柱材	第1区 H-0 Pit-77
13	同上	第1区 H-0 Pit-71
14	曲物蓋	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
15	同上	第3区 坪掘3-3
16	同上	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
17	同上	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
18	同上	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
19	同上	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
20	板材	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
21	同上	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
22	同上	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
23	同上	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
24	同上	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
25	同上	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
26	同上	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
27	同上	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
28	同上	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
29	同上	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
30	同上	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
31	田下駄	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
32	同上	第3区 Eトレンチ 南拡張区第10層暗灰褐色粘質土
33	杭状木製品	第1区 G-0 Pit-118
34	同上	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
35	同上	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
36	同上	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
37	同上	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
38	火鐵板	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
39	杭状木製品	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
40	同上	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト
41	蹠等の未成品	第3区 Eトレンチ 南拡張区第8層灰色シルト



## VI. 出土遺物の検討



## VII. 出土遺物の検討

### 1 須恵器について

#### (1) はじめに

今回の発掘調査によって、古墳時代後期から奈良時代にかけての多量の須恵器、土師器を検出した。薺沢A遺跡ではコンテナ(55×40×25cm)で約200箱、個体数にすると約20000点を数え、別所遺跡ではコンテナで約90箱、個体数にして約9000点を数える。両遺跡合せて約29000点近くの土器が出土している。これらの内訳は杯身40%、坏蓋20%、高台付杯4%、高杯13%、壺類(須恵器)8%、壺類(土師器)9%、その他6%を示し、杯身、坏蓋が大半を占めている。

これまで山陰地方で調査された遺跡の中で、これだけの多量の土器を出土した遺跡は類例が少なく、またこれが住居址からであるのも注目されるところである。しかしこれだけ多量の土器が出土していても、その内の9割は遺構に伴なうものでなく、残り1割の中でも住居址床面上のものや、層位的に捉える事ができるものがどれだけあるのかと言うと実にわずかであると言わざるを得ない。このような状況から、一括資料として捉えられるものを抽出し、編年を試みることは困難な作業であると言える。

薺沢A遺跡、別所遺跡の両遺跡の中で編年の資料として使用できるものは唯一薺沢A遺跡の住居址床面出土の遺物のみである。別所遺跡のものは包含層出土のものであるが、土層の混亂が激しく各層出土遺物をそのまま一括資料として捉える事が不可能であり、また層位的な上下関係が出土遺物の年代を正確に示していなかったので、層位による土器編年は不可能であった。

よって今回、薺沢A遺跡、別所遺跡出土の須恵器を整理する方法としては、もっとも普遍的な器種である蓋坏の形態分類のみを行ない、本遺跡と同時期頃の高広遺跡等の編年を参照して、蓋坏だけの編年的位置づけを考察するに留めておきたい。<sup>註1</sup>また須恵器の概等についても簡単にふれてみたい。

#### (2) 蓋坏の形態分類

分類にあたっては、最も普遍的な器種である蓋坏を中心に形式分類を行なうことにする。

分類にあたって杯身はたちあがりの矮小化、坏蓋は口縁部と天井部を区別する腰の退化。杯身、坏蓋の形態の逆転、底部調整の変化と言う一般的な蓋坏の変化に着目して形式分類を試みることにする。

坏身 A類：たちあがりを有するもの（A-1からA-5に細分）

B類：たちあがりを有さないもの（2つに細分）

C類：高台の付くもの（2つに細分）

坏蓋 A類：坏身A類に付属するもの

B類：かえりをもつもの

C類：口縁端部が垂直に折れ曲がるもの

#### ★A-1類

SB-03, 08の床面出土のものを標式とする。坏身はやや浅めの底部丸味をおびるものと平らに近いものがある。たちあがりは約1.2~1.0cmまでの高さで、内傾の度合は少ない。たちあがり端部は無段で丸くおさめる。受部はやや上向きかげんにのびている。口径は10.8~12.2cmを測る。蓋は口縁部と天井部の境に2条の沈線によって鈍い稜を作り出すもので、器高は高く半球状を呈する。口縁部内面には沈線を1条廻らすものと段を作るものがある。口径は11.4~13.0cmを測る。身、蓋とも外面大半にヘラ削りが施されている。

#### ★A-2類

SB-03, 06出土のものを標式とする。坏身はかなり浅めの底部に長いたちあがりを持つものである。たちあがりは約1.3cm程度の高さで断面が厚く作られている。受部は横方向に短くのびるもので口径は10.8~11.8cmを測る。蓋は天井部が高めに作られ半球状を呈する。口縁部と天井部の境に鈍い稜を持つ。口縁部内面に段をもち口径12.2cmを測る。身、蓋とも外面大半にヘラ削りが施される。

#### ★A-3類

SB-02, 05, SI-03を標式とする。坏身はたちあがりがやや短くなり、約1cm程度の高さになる。受部は短く外上方にのびる。底部は浅めで丸みをおびる。口径は9.4~12.2cmを測る。蓋は天井部が低くなり、口縁部との境に2条の沈線で鈍い稜を作り出すものと、1条の沈線が廻っているものがある。口縁端部には段を有するものと無段のものがある。口径は10.9~13.6cmを測る。坏身は外面1/4程度ヘラ削りを施すが、坏蓋は外面1/4ヘラ削りを施すものと周辺のみを3~4周ヘラ削りし中央部はナデを施すものがある。

#### ★ A - 4 類

S B - 0 1 を標式とする。坏身、蓋ともにやや小型化している。坏身の口径は 9.0 cm を測る。たちあがりはかなり短くなり 0.6 cm 程度の高さである。底部は平らに近く、受部はたちあがりと同じくらいの長さで外上方にのびる。蓋は天井部が低くなり、口縁部との境にわずかに稜を残す。口縁内面にわずかに 1 条の沈線を残している。口径は 11.4 cm を測る。外面調整は坏身は底部と体部の境に 1 回りのヘラ削りを施し中心部まで及ばないものであるが、蓋は外面  $\frac{1}{2}$  程度ヘラ削りするものと周辺部のみのものがある。

#### ★ A - 5 類

S B - 0 4 を標式とする。A - 4 類よりもさらに小型化している。坏身のたちあがりは短く受部と同じ高さのものもある。底部は浅く丸みを持つ。口径は 7.2 ~ 8.6 cm を測る。蓋は口縁部から天井部にかけてなだらかに連なっており、口縁端部は丸い。口径は 10.2 ~ 11.9 cm を測る。外面調整は両者ともヘラ切り後ナデを施すものと、未調整のものがある。

#### ★ B 類（坏身）

たちあがりを有さないもので、口縁部がくびれるものと内湾するものがあり、くびれるものを B I 類とし、内湾するものを B II 類とする。

B I a 類：別所遺跡の 3-40, 3-52 を標式とする。体部は内湾気味にたちあがり、口縁部付近でくびれるものである。底部は丸みを持っている。底部調整はヘラ切り後ナデが施される。口径は 10.3 ~ 12.8 cm を測る。

B I b 類：3-159, 3-45 を標式とする。くびれた口縁部に平らな底部を持つものである。底部切離しは、回転糸切りと静止糸切りがあり、糸切り後ナデを施すものもある。口径は 11.6 ~ 13.0 cm を測る。

B II a 類：1-121 を標式とする。口縁部は内湾して端部に至るもので、底は丸みを持つ。口径は 9.8 cm を測る。底部はヘラ削り後ナデ。

B II b 類：3-90 を標式とする。B II a 類の底部が平らのものである。口径は 12.8 cm を測る。底部は静止糸切り、回転糸切りが施される。

#### ★ B 類（蓋）

3-156, 3-104 を標式とする。かえりを持つもので、天井部につまみが付く。つまみは輪状、擬宝珠状の 2 つがある。天井部の  $\frac{1}{2}$  に回転ヘラ削りが施されている。口径は 11.2 ~ 12.4 cm を測る。

★ C類（坏身）

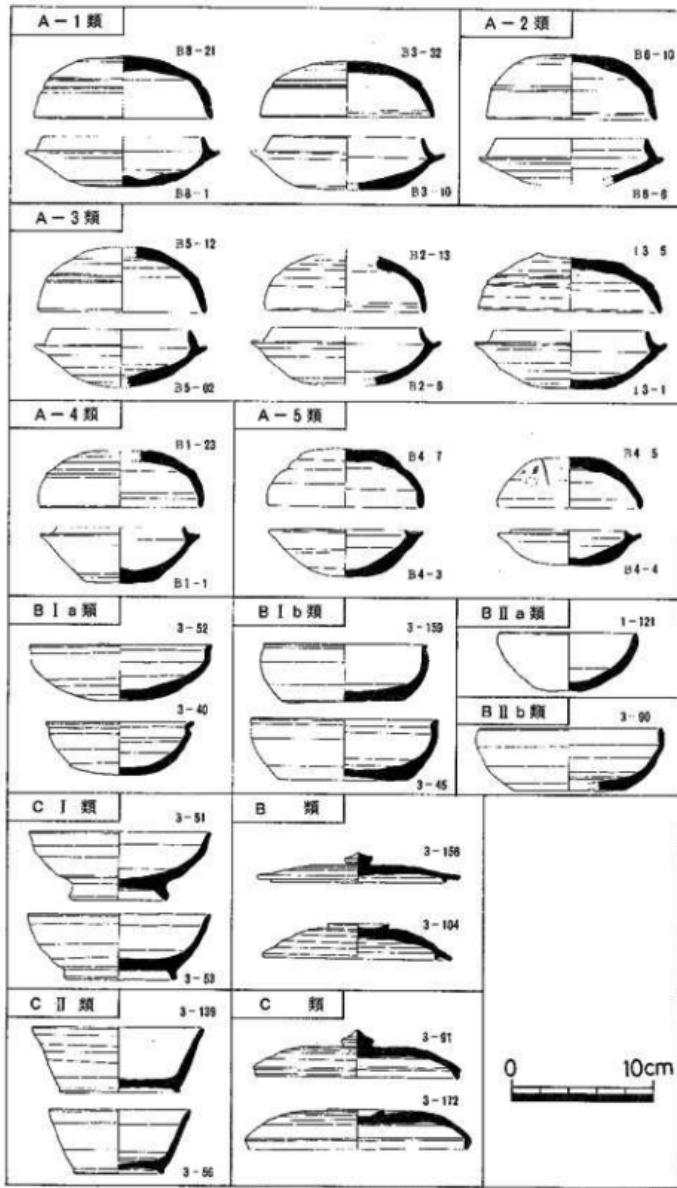
高台を有するものであり、2つに細分できる。

C I類：3-53、3-51を標式とする。高台を有し、内湾気味にたちあがる体部を持つ。高台は高めで横方向にふんばるようにのびている。口径は15cm未満である。底部は糸切り痕を残すものとナデ消しているものがある。口径は12.8~13.0cmを測る。

C II類：3-56、3-139を標式とする。高台を有し、体部が直線的にたちあがるものである。高台は低いものである。口径は9.9~12.2cm未満である。底部は糸切り痕を残すものと、ナデされているものがある。

★ C類（蓋）

3-91、3-172を標式とする。かえりを持たず、口縁部が垂直に屈曲するものであり、天井部にはつまみが付く。つまみは輪状と擬宝珠状の2つがある。口径は14.6~15.6cmを測る。天井部はヘラ削りが施されている。



第85図 須恵器形態分類図

### (3) 編年的位置

以上のように蓋坏の形態分類を行なったが、これら蓋坏で見る限り 6 期に区分できるようである。これらを住居址の切り合い関係と從来のいくつかの編年案を参照しつつ編年の位置づけをすると、

西沢 I 期 — A - 1, A - 2 類	(高広 I A 期)
" II 期 — A - 3 類	( " I B " )
" III 期 — A - 4 類	( " II A " )
" IV 期 — A - 5 類	( " II A " )
" V 期 — B I a, B II a, B (蓋)	( " II B ~ III A 期)
" VI 期 — B I b, B II b, C - 1, C - 2, C (蓋) ( " III B 期以降)	

以上のような編年案が考えられる。これはあくまでも本遺跡における須恵器編年である。それ故、他遺跡出土の須恵器蓋坏と若干の違いが認められるであろうことは言うまでもない。また、V, VI 期のものは細分が可能であるが、資料が乏しいため現時点ではあえて細分をひかえることにした。よって今後の資料の増加を待って検討を要するものである。

### (4) 外面調整について

A 類の蓋坏に施される外面調整を観察した結果、次のような事が明らかとなった。

A - 1 類 坏身、坏蓋ともに外面大半にヘラ削りが施される。

A - 2 類 A - 1 類と同様である。

A - 3 類 坏身は A - 1, 2 類よりも簡略化され底部少程度ヘラ削りを施すが、坏蓋は天井部少程度ヘラ削りを施すものと、周辺部のみ 2 ~ 3 周ヘラ削りするものの 2 通り認められる。

A - 4 類 坏身は底部の最外周のみ 1 回のヘラ削りを施すものであるが、坏蓋は A - 3 類とあまり変化しない。

A - 5 類 坏身、坏蓋ともにヘラ切り後ナデを施すものと未調整のものがある。

ここで問題になるのが A - 3, A - 4 類のヘラ削りの施しかたである。A - 1, A - 2 類では丁寧なヘラ削りが施されていたが、A - 3, A - 4 類ではヘラ削りが簡略化されたり、坏身と坏蓋のヘラ削りの施しかたに相違が見られる。どちらか一方がしっかりととしたヘラ削りを施していれば、一方は雑なヘラ削りを施すといったような変化が認められる。ここで住居址以外から出土したものであるが、坏身と坏蓋がかぶさった状態で出土したものがあり（その他 4, 6），これは確実にセットとして捉えられる蓋坏と見

られ、坏身の方はヘラ切り後ナデが施されているのに対し、坏蓋の方は天井部最外周のみヘラ削りを施している。これを坏身だけで見ると山陰Ⅳ期の古い段階のものであるが、坏蓋だけを見ると山陰Ⅲ期の新しい段階のものである。この様に両者の比較をしてみると、坏身の方が坏蓋よりも新しい様相を呈しているようである。しかしこのことは、坏身の方が坏蓋よりも新しい要素を持つものと古い要素を持つものの2タイプが混在していると言うことであり、山陰Ⅲ期からⅣ期へと移行する中間的な段階のものと考えられる。

外面調整をもう一度簡単に整理してみると、全面ヘラ削り→周辺部ヘラ削り→最外周ヘラ削り、中央部ナデ→全面ナデ、未調整というようにヘラ削りを主体とする手法から次第にナデを主体とする手法へと変化する。A-3、A-4類の段階はヘラ削りとナデの両方の手法を用いているので、ヘラ削りからナデ調整へと変化する中間に位置するもので、移行期の段階と言えるであろう。

#### (5) 須恵器の瓶について

鷹沢A遺跡から16個、別所遺跡から4個出土しており、いずれも古墳時代後期から奈良時代にかけてのものである。土師質のものも鷹沢A遺跡から5個、別所遺跡から3個出土している。

鳥根県内では今のところ他に類例を見ず、土師質のものに比べて多数出土している事が注意をひいた。<sup>註3</sup>

通常須恵器の瓶と言えば、大阪府陶邑古窯址群のT K73、85号窯出土上の古い段階に多く見られるようであり、古墳時代後期以降になると須恵器のものは無くなり、土師質のものが主流をなすというのが一般的である。しかしながら本遺跡では古墳時代後期以降であるのに土師質のものよりも多數を占め、一般とは違う様相を示している。<sup>註4</sup>

他地方での出土例を探すと、中国地方では広島県に多く見られ、松ヶ迫遺跡や矢賀迫遺跡<sup>註5</sup>等から出土している。また九州や北陸地方にも比較的多く見られ、九州では狸山A遺跡や春日地区遺跡等から、北陸では柳田タンワリ1号窯<sup>註6</sup>等から出土例が知られる。<sup>註7</sup><sup>註8</sup><sup>註9</sup><sup>註10</sup><sup>註11</sup><sup>註12</sup>

本遺跡の瓶は口縁部が単純なものと、段を持つものの2タイプあり、底部に1本の棟の付くものと底部側面に孔を持つもの、棟と孔を持つものがある。広島の瓶は口縁部が単純で段を持たず、把手接合付近に沈線を施すものと施さないものがある。把手に切込みのあるものも認められる。底部に棟を持つもの、側面から穿孔するもの、孔の無いもののが認められる。九州の瓶は、口縁部が単純なものと、段を持つものの2タイプ認められる。口縁部に段を持つものは長胴形を呈する。底部には1本の棟を持っている。北陸

の瓶は口縁部が単純口縁のものと段を持つものの2タイプがある。底部に棧や底部側面に孔を持つないものである。本遺跡のものと比較すると、形態的には似通っているが底部に若干の違いが認められる。当遺跡のものには底部側面に4方向に孔を穿つものが多く、また棧を持っているにもかかわらず孔を穿っているものもある。この様な違いは地方色と考えられる。

北陸や九州等の他地方の瓶の出土状況を見ると、窯跡や窯跡付近の住居址からのものである。本遺跡の周辺にも多数の窯跡が所在し、他地方の出土状況と同じ様相を示している。

ここで問題になるのが「何故土師質でなく須恵質なのか」である。瓶はお米を蒸すための煮沸用の土器であるので、須恵質のものは不適当なのではないかと思われる。しかし、本遺跡では土師質のものも出土しているが、圧倒的に須恵質の比率が高い。これは本遺跡の所在する大井、朝日地区が出雲地方における須恵器生産地であることから、容易にうかがえる現象であろう。また出雲國風土記に「朝駒郷…朝御飯の勘登、夕御飯あさみけ かじかひ ゆうみけの勘登かじかひ のくわくへのきに五賛緒の処定め給ひき。故、朝駒と云ふ。」と言う記載が見られ、これは朝駒地区についてのことである。熊野大神の朝夕の神饌に奉仕する部族の集落をここに定め、そこで朝の御膳に奉仕する部族の意で朝駒としたという記述がある。この事から須恵質の瓶を使って神饌を作っていたのであろうかという推論も成り立つが、朝夕に神饌を作っていたのなら、須恵質のものよりもはるかに土師質を用いた方がよかつたのではないだろうか。また、瓶を詳細に観察してみると、使用痕があり見られないで、推測の域を出ないが、日常頻繁に使用するのではなく、何らかの祭祀時のみに使用したものであつたと考えた方が妥当であるかも知れない。

#### (6) 小 結

以上のように鹿沢A遺跡、別所遺跡出土の須恵器について若干の検討を行なった。いずれも粗略な叙述で詳細な検討ができなかったが、簡単に整理し、今後の課題についてもふれてまとめとしたい。

蓋坏の形態分類を行うことにより、本遺跡の須恵器を6期に区分し、編年案としてみた。この編年案に数多く問題が残されていることは言うまでもない。IV期までのものは鹿沢A遺跡の住居址内出土の蓋坏を中心にして、住居址の切り合い関係の見られるものを最優先しながら蓋坏のみの編年を試みた。本来、蓋坏以外の器種でセッタ関係が捉えられるものについても編年を行なうべきであるが、資料が乏しかったため編年を行なわなかった。このIV期までのものは山陰III期の新しい段階から山陰IV期の古い段階までの

ものにあたり、高広遺跡の編年案で言えば、ⅠA～ⅡA期までに相当し、実年代を当てると6世紀後半から7世紀前半にかけてのものである。このように短期間のものであるが、本遺跡では、形態の特徴や外面調整の施し方に着目して4期に区分できるものとした。

またV、VI期については、別所遺跡出土のものを中心にして編年を試みたが、前述して来た通り、出土状況が非常に悪かったため、形態の違いと系切りの有無に着目して区分しただけである。これらは高広遺跡の編年で言うところのⅡB～V期に相当し、実年代を当てると7世紀前半から9世紀中頃までのもので、かなり長期間のものを2期に区分したことになる。これを細分する事は可能だったが、形態の変化のみの細分になってしまふので、敢えて細分する事はしなかった。今後の資料の増加を待って細分を行ない、他の器種についても検討を行なわなければならないであろう。

須恵器を整理しながら気付いた事に壺身のA-1類とA-2類は薦沢Ⅰ期として同時期のものとして捉えたが、形態的に差異が認められる。A-2類はA-1類に比べてかなり浅い底部を呈し、たちあがりに対してかなり短い受部を持っている。こうした相違は、共伴している他の蓋坏から見て時期差とは考え難く、恐らく系統が違うものと思われる。この系統の違いが工人集団の違いなのか、窯跡等の違いによるものなのか判断できないが、薦沢A遺跡には少なくとも2系統以上の須恵器がもたらされていたものと考えられる。

次に報告書に掲載したものや、それ以外の須恵器にヘラ記号の施されたものが少なからず認められた。しかし今回はそれについて整理、分析を行なうことができなかったので、今後窯跡等の調査により資料の増加するのを待って検討したい。

最後に、須恵器だけでなく、土師器も含めて見てみると、土師器は甕類や土製支脚、竈が出土しており、蓋坏類は一片も出土していない。須恵器の方は蓋坏等の食器類が大多数を占めている。また須恵器91%に対して土師器は9%と少ない。当遺跡の所在する大井地区は出雲地方の須恵器生産の拠点である事から、須恵器の量が土師器よりも上回り、瓶のような煮沸用の土器までも土師器より須恵器の方が多く作られるといった現象が起つてくるようである。実際、6世紀後半頃から本遺跡周辺の窯跡が増大して須恵器の生産量が増大したことは確実であろう。

出雲地方の須恵器について今後住居址出土のものは勿論の事、窯跡の調査等により、土器生産と消費について究明していくかなければならない問題である。

(今岡一三)

註

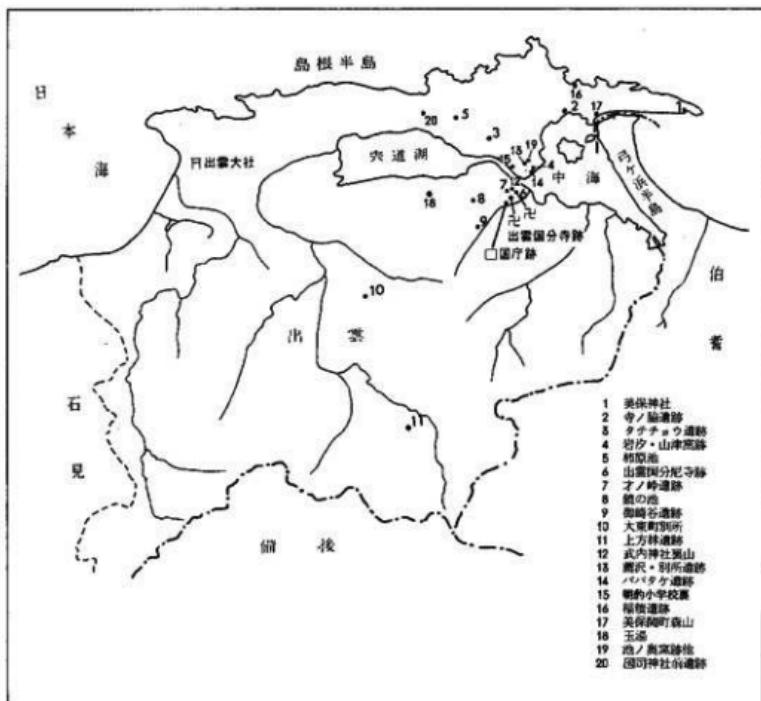
- 註1 島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書 一和田町地造成工事に伴う発掘調査』(1984年3月)
- 註2 註1及び 山本清「山陰の須恵器」(『山陰古墳文化の研究』1971年)
- 註3 中竹矢遺跡から浜口広口の壺というのがあり 須恵器の瓶の可能性があるものと思われる。島根県教育委員会「中竹矢遺跡」(T岡道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書)IV 1983年3月)
- 註4 大阪文化財センター『陶邑』I, II, III, IV, V (1976~1982年)
- 註5 広島県埋蔵文化財調査センター 是光吉基氏御教示による。
- 註6 広島県教育委員会, 飼廣島県埋蔵文化財調査センター『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』(1981年3月)
- 註7 広島県教育委員会「矢賀追遺跡群」(『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』2 1979年3月)
- 註8 北九州市立考古博物館館長 小田富士雄氏, 福岡市埋蔵文化財センター 柳沢一雄氏御教示による。
- 註9 石川県立埋蔵文化財センター 田嶋明人, 小嶋芳孝両氏, 金沢市教育委員会 出越茂和氏御教示による。
- 註10 北九州市教育文化事業団『狹山A遺跡』(1981年)
- 註11 春日市教育委員会『春日地区遺跡群』III (1985年)
- 註12 石川県立埋蔵文化財センター『柳田タンワリ1号窯跡』(1982年)
- 註13 加藤義成『出雲國風土記参究』
- 註14 註1と同じ。

## 2. 土馬について

### (1) 出雲の土馬とその形態

<はじめに>

土馬について最初に論考されたのは大堀磐雄博士であったが、その時点での出土遺跡<sup>註1</sup>はわずかに50箇所が知られているに過ぎなかった。しかし今や、土馬を出土した遺跡総数は概算で全国600カ所以上、出土総数は1900点を越えるに至っている。この土馬は北は山形県、南は鹿児島県でも出土し、北海道、沖縄を除く日本各地に広く分布する。(第19表)特に奈良、京都を中心とする近畿地方での出土例が多く、その出土総数は全国の70%を越えている。島根県の土馬出土遺跡は23カ所あり、出土総数は87点にのぼるが、この数は他府県と比較すると全国第4位となる。鷹沢A・B遺跡の出土量を見ても平城京、長岡京、平安京に次いで全国で4番目の出土量となる。1遺跡出土量では異例で、



第86図 出雲の土馬出土地図

これは鷹沢遺跡の重要な特色の一つに数えることができる。

尾根を挟んで別所遺跡があるが、ここでは13点が出土している。この遺跡における出土量も他遺跡と比較するとかなり多いもので、この遺跡の特殊性を物語るものであろう。

從来土馬については土師質のものを区別して陶馬、木製のものと区別して土製馬とか土製馬型遺物と呼ばれてきたが、鷹沢・別所出土のものについては全てが須恵質であるので、ただ単に「土馬」と呼称したいと思う。

#### <土馬の形態分類>

土馬の分類に関しては、先学諸氏が様々な分類を試みておられる。分類の要旨をごく簡単に概説すると、先ず大場幹雄氏は飾馬と裸馬に大別され、飾馬を皆具式のものと馬具を簡略化した簡略式に分け、裸馬は平城京で出土する象徴的な表現の権原式と、犬の如き小型の土獸式に分類された。<sup>註3</sup>

泉森皎氏は装鞍馬を第Ⅰ、裸馬を第Ⅱとし、第Ⅰを大型で線刻によって手綱を表現し鞍装したA類と同じく大型で粘土紐の貼付や粘土の摘出によって鞍の形を現すB類に分類し、第ⅡはA類からD類に分類して大型から小型へ変遷する順序で分類された。<sup>註4</sup>

小笠原好彦氏は飾馬を第Ⅰ段階、裸馬を第Ⅱ段階に分け、第Ⅰ段階を馬具が簡略化されていく段階を迫ってA～Cに分類され、第Ⅱ段階も泉森氏と同様に大型から小型に変遷する順序でD～Jに分類された。<sup>註5</sup>

村上吉郎氏は北陸道の土馬を焼成、四脚の付け方、表面整形、胸部断面から分類を行なわれた。それによると、焼成による時間的差異は認められないということである。また四脚の付け方に関しては、差し込み式と張付け式のものと広く深く接合させるものの3通りの分類をされている。表面整形はヘラ削り調整とそうでないものの2通り、胸部断面に関しては円形と縱長の方形に近いものの2通りに分類されている。<sup>註6</sup>

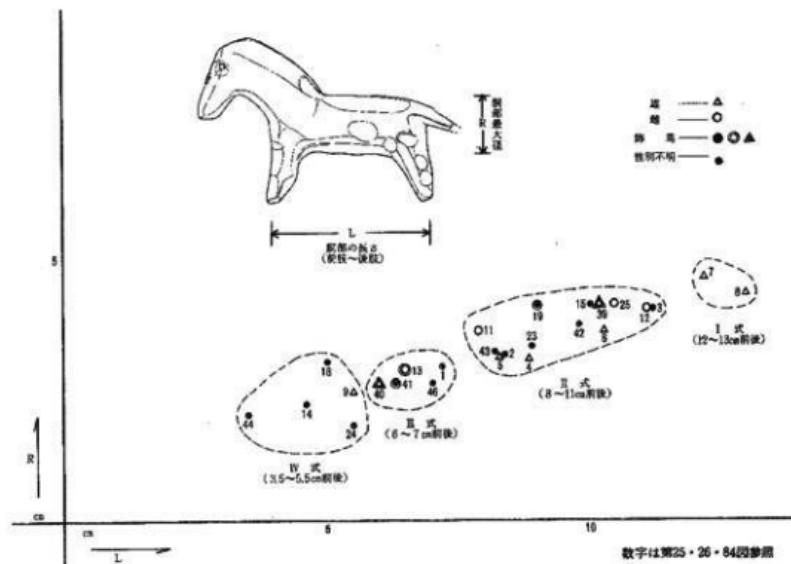
更に木村泰彦氏は飾馬、裸馬の捉われずにA～Cの3タイプに分けられ、定形化する藤原宮下層S C 140出土土馬を中間に置き、それ以前のものをA類、以後のものをC類に分類された。<sup>註7</sup>

鷹沢・別所遺跡出土の51点の土馬の中で形態分類可能なものは38点あるが、これらの土馬は伴出遺物の時期差が大き過ぎて残念ながら時期決定をすることができない。しかし若干のものが住居址に伴って出土しているのでその住居址の時期を土馬の時期と考えて分類の参考にしたいと思う。また鷹沢遺跡の須恵器は山陰Ⅲ期～奈良時代（平安時代に入るるものも若干ある）。高広遺跡の編年によるところのⅠA～ⅢB期に相当し、その中でもⅠA～ⅡA期、高広の時期決定によるところの6世紀末～7世紀前葉のものが最

も多い。別所遺跡の須恵器も山陰Ⅲ期から出土しているが数が少なく、ほとんどのものがIV期以降のもので平安時代まで及んでいる。高広編年に見るところのⅡA～ⅣB期に該当し、ⅢB～ⅣA期、高広の時期決定によるところの7世紀末～8世紀後半のものが最も多い。この薦沢・別所遺跡の須恵器に見る時期のすればおそらく土馬の形態的な違いとなって現れるであろうと考えられる。

鹿沢の土馬と別所の土馬の形態的な違いは、全体的に別所の土馬が小さめであるということと、飾馬の比率がたかいこと、性別をつけた土馬の数が少ないことがあげられる。これが須恵器に現われた時期差が原因だとすれば、今迄に形態分類され、飾馬の方が古いとされてきた通例が両遺跡出土の土馬の場合はあてはまらないこととなる。両遺跡の土馬で考えられるのは飾馬でも新しいと考えられるものがあるのではないかということである。

次に別所の土馬が小型のものの割合が高く、大型のものは1例もないこと、また残りは中型であるか鷹沢の中型と比べて全て1まわり小さいこと、このようなことから今まで小笠原氏が分類編年された大型から定形化し小型化する定式が両遺跡のものにもあてはまる可能性が出てくる。



第15表 萩沢・別所土馬分類表

第16表 土馬の形態分類表

式	類	型	形態	性別有無	実測図番号	備考
I		大型	裸馬	有	H-7,8	
II	a	中型	飾馬	無	H-19	8~11cm
	b		裸馬	有	H-4,5,6,10,11,12,25	
	c		"	無	H-2,3,15,23,43	
III	a	中型	飾馬	有	H-40	6~7cm
	b		"	無	H-41	
	c		裸馬	有	H-13	
	d		"	無	H-1,46	
IV	a	小型	飾馬	有	H-9	3.5~5.5cm
	b		裸馬	無	H-14,18,24,44	

以上のようなことを考慮に入れて分類してみると（第15,16表）おおまかに次の4式に分けることができる。

I式はかなり大型のもので推定全長20cm内外になると思われるものである。薦沢出土の雄の裸馬2体がこれに属するが、これらの時期については薦沢出土の須恵器の最も古いものが山陰Ⅲ期、高広編年のIA期に相当するので、実年代も高広の年代推定によれば6世紀後半を遡ることはないとと思う。

II式は最も出土量の多いもので、全体の中では中型に属する。飾馬か裸馬、或は性別有無でa~cに分けることができる。II-c類には堅穴住居出土のもの1点、掘立住居出土のもの1点が含まれており、これらの住居址の時期からII-c類を6世紀末~7世紀前半に比定することができる。II-a, II-b類については、伴出遺物から判断することが難しいので、敢えて形態差を時期差とすることはやめる。

III式はII式を一回り小型化したもので、飾馬、性別有無でa~b類に分けることができる。この中でIII-b類に属するのが、S I-04から出土しており、この住居址の時期が7世紀初め~7世紀中頃に比定できるので、この土馬の時期はII式との関連から7世紀前半以降としておきたい。

IV式はIII式を更に小型化したもので、小笠原好彦氏の分類された第II段階のG, H, Iと大きさ、胴部の形の似たものである。しかしIV-a類のH-40は推定全長9cm前後と小型にもかかわらず、粘土紐貼付によって、しっかりと馬具を表現している。この点は大和の土馬と明瞭に異なる点で別所の土馬の特徴の1つとして数えられるところだ

第17表 性別分類表

		実測番号	計
性あるもの	雄	4~10, 40	8体
	雄	11~14, 23	5体
性な別いのもの	尻穴のあるもの	3~8, 11~13, 15, 19 21~23, 25, 40, 41, 44, 46	17体
	表現しないもの	1, 2, 14, 18, 24	5点
観察できないでもきの		9, 16, 17, 20, 26~38, 42, 43, 45, 47~52	26点

思う。このIV式の時期については薺沢・別所の須恵器の中で最も新しいものが9世紀代であるのでIV式を9世紀代までの時期としておきたい。

以上のように分類したが、この分類は決してオールマイティであるとは考えられず、他遺跡出土のものと比較すると若干時期のずれが生じるかもしれない。しかし、それは地域差であったり、工人層の違いが原因だと思われるもので、それは同時に祭祀形態の多様性をも物語っていると思われる所以である。

また私見ではあるが大型の土馬で古いと考えていたものは埴輪馬の系統を引くような様相を示したものであると思われる。薺沢の場合そのような出土例はなかったので、参考として掲載しているH-39と比較すると若干新しい様相を示したものもある。つまり薺沢・別所の馬は、埴輪馬をほうふつさせるような、大型の目、鼻、口、耳等の馬としての表現の丁寧な土馬（飾馬が多いと思われる）から、中型の幾つか馬として細部の表現に手を抜いた飾馬に、またさらに若干小さくなり馬としての表現を少し省略した飾馬か裸馬に、そして最終的には平城京、長岡京、平安京の土馬の変遷に見えるような小型の飾馬か裸馬へと（裸馬が多いと思われる）変遷していくと考えられる。

#### <出雲地方の土馬 - 他地方との比較に於て - >

島根県の土馬出土遺跡は総計23カ所（第18表中国地方土馬出土遺跡地名表第19表全国土馬遺跡総数表参照）で出土総数は287点ある。これを除く日本海側の土馬出土遺跡は65カ所110点で、日本海側での出土例は島根県が最も多く、次は鳥取県の33遺跡42点以上、石川県の16遺跡30点という順で、これにより出土遺跡が山陰地方に多いことがわかる。

ではまず出土点数の多い出雲地方の土馬を見ていきながら、他地域と比較してその特徴を捉えていきたいと思う。

出雲地方の土馬でまず最初にあげられるのは、性別をつけた土馬の出土であろう。(第17表) 現在管見で知る限りでは、全国で19個体の性別をつけた土馬があり、その内薦沢・別所遺跡出土のものが12個体を占めている。他7個体については鳥取県内出土のもの<sup>註10</sup>が3例、鳥取県出土のものが1例、大阪府出土のものが1例、京都府出土のものが2例<sup>註11</sup>、<sup>註12</sup>、<sup>註13</sup> (京都府内でもう1例未発表の資料があるらしい)<sup>註14</sup>あるにすぎない。

このように性別をつけた形代類では人形に男性を表現したものはあるらしいが、馬での性別表現は全国的に非常に珍しい。また19個体の出土の内、雄は13個体、雌は6個体と雌が半分以下の出土数であり、これが単なる偶然の所産であるのか、また何等かの意味を含んでいるのかについては、もし性別をつけることになにか大きな意味があるとすれば大変興味深い問題となる。その問題については後述することにして、次に挙げられる山陰地方出土の土馬の特徴について述べてみたい。

出雲地方の土馬は、現在知られる限りでは脚部断面は円形、或は梢円形で、中が空洞のものは1例もない。脚部が空洞になったり孔があるものは脚部成形時に竹輪を作る時のように芯棒を用いる方法が行なわれていたからである。このように芯棒を用いる方法は、脚部断面の空洞や脚部がアーチ状になることで観察することができ、それらの例としては北陸出土の土馬や、近畿地方の例で長岡京出土もの、平城京出土のもの、更に福岡県出土のもの等各地にその類例を知ることができる。それに対して薦沢の土馬の中にわずか2例だけ見られるH-20、H-36(第25図、遺物の検討の項参照)は直径4~5mmの足先からの穿孔が見られる。この類例は滋賀県波爾布神社遺跡出土のものや、同じく手原遺跡出土のものにみることができ、おそらくこれも成形時に芯棒を使用した為の孔であると思われるが、芯棒が細いことや足先から芯棒を入れて成形するところに他地域との相違を見ることができる。

次に顔部の表現方法についてみると、出雲地方の土馬の中で顔が観察できるもので、目の表現を取上げてみると、A~Cの3種類の表現の仕方があるのを知ることができる。最も多いのは、A細い棒状のもので刺突して表現したもので、次に多いのは、B粘土粒を貼り付けその上から刺突したもの、3番目は、C竹管状の刺突を施したもので、Bの表現方法以外は全国にその例を見ることができる。B類は出雲地方での例はというと、現在のところ5例ある。それは薦沢遺跡2例、別所遺跡1例、タチヨウ遺跡1例、上方林遺跡1例<sup>註15</sup>である。他県でその類例を探すと長岡京市の今里遺跡に1例と、京都市西京区大枝の長野新田遺跡にその類例を見るのみで、他にはあまり見ることのできない手法である。この表現方法も他地域とは異なる出雲地方の土馬の特色としたい。

最後に出雲地方の土馬全体を他地域のものと比較して感じたことであるが、出雲地方のものは全体的な形状がリアルで、馬の肢體を上手に捉えたものが多いように感じる。他地域のものが馬か牛あるいは他の動物かわからぬものが含まれているのに對して、出雲地方のものは新しい様相のものも（9世紀代）古い様相のものも（6世紀後半）よくわかることが多いように思われる。

以上出雲地方出土の土馬を見ながら他地域との比較検討を試みたが、それについてまとめてみると、出雲地方の土馬の特徴は雌雄の區別をつけたものが多数あること、太い芯棒を使用した成形方法を見ないこと、目の表現が他地域と違っていること、全体的な形状が馬の特徴をよく捉えていること等があげられる。従ってこれらの特徴により、出雲地方出土の土馬を「出雲型の土馬」として位置づけることができると思われる。

## (2) 古代祭祀と土馬

### <はじめに>

これまでに土馬の祭祀にかかわる論考は多数ある。それによると祈雨、祈止雨等の水靈祭祀に使用したという説が最も多く、それが通例となってきたのであるが、近年になって馬は行疫神の災厄から免れるため土馬の足を折ってその動きを封じた、という注目すべき説が水野正好氏から提出されている。<sup>註20</sup>

ここで土馬の発見遺跡を見てみると近畿地方では平城京跡、長岡京跡、平安京跡の溝中より多量の土馬の発見があり、また他地域でも河川、池、井戸、溝等から出土することが多い。すなわちこれらの遺構は水と関連する遺構であり、これらの考古学的発掘の成果からして土馬の祭祀は水となんらかの係わりを持つと思われる。

しかし水と関連する遺構以外で発見される土馬はどうであろうか。実際、峠、古墳、集落、窯跡等水と直接係わらない遺跡での土馬発見例も増加しており、萬沢、別所遺跡についても窯跡に近い集落であることから水と関連する遺構以外の範疇に入るのである。<sup>註21</sup>

それではこれら種々の遺跡から出土する土馬の背後にはいかなる信仰があるのか、それについて触れてみたい。

### <漢神信仰と荒神祭>

佐伯有清氏によると「漢神信仰とは牛を殺して漢神を祭る信仰風習である。漢神とはすなわち崇る神であり、牛の屠殺は崇りの神を鎮め崇りを祓う儀礼として行なわれる。」またこうした「漢神信仰は8世紀には畿内に存在していた」<sup>註22</sup>らしくそれを示す資料として「日本書紀」中卷五（9世紀前半）「漢神の崇に依り牛を殺して祭り、また放生の善を修して現に善惡の報を得る縁」また「類聚三代格」卷19、禁制事、太制官符「應禁制殺レニ

牛川祭漢神事 - 中略 - 延暦十年（791年）九月十六日】に見ることができる。

この漢神信仰と土馬の祭祀との関連は『肥前國風土記』「佐嘉郡の条」に見ることができる。それによると「郡西有川、名曰佐嘉川。…此川上有荒神。往來之人半生半殺於茲県主等根大荒田占問、干時有土蜘蛛大山田女狹山田女、二女子云取下田村之土作人形馬形祭祀此神、必在応和、大荒田即隨其辭祭此神神體此祭遂応和之。」この資料は荒神=漢神の怒りを鎮める為に上馬を作つて献ずるというもので、これによって漢神信仰と土馬のつながりを初めて知ることができる。またこれは現在島根県八束郡八雲村に残る信仰風俗であるが、「すべて荒神はよく崇る神だといわれ薬蛇を作つて祭り、格別清淨につとめる。牛馬の神という信仰もあり、なまく牛を飼っているものはよく参拝したらしい。」これは上記の史料が説明する漢神信仰に由来するものと思われる興味深い。

またこれは漢神=荒神=崇り神を直接その信仰対象としないのかもしれないが、サエの神信仰というのもある。「サエの神とは西と東の峰におられて終始勝の様子を見ておられる神らしく、それで悪い病をよけ特に耳の病に驗があり、耳が痛い時は薬馬を作つてそれに炭をのせ柳をぶらさげて持つてまいつた」そうである。この信仰習俗も土馬の祭祀の系譜に連なるものと思われる。なお島根県教育委員会が調査したオノ峰遺跡より総数5点、2個体以上の土馬が出土したことはサエの神信仰と土馬の祭祀の関係を考える上で大意義深い。

#### ＜漢神信仰と水霊祭祀＞

前掲の史料「日本靈異記」「類聚三代格」に再び戻ると、漢神信仰については殺牛することが記してある。それについて笠井敏光氏は「殺牛のみを禁止している記載には、必ず漢神が併記されており、この場合は漢神を祭るための殺牛を禁じたのであろう。」と述べておられる。つまり牛は殺して漢神に供犠する対象であり、それによって漢神の怒りを和める為の生贋であった。

しかし「延喜式」神祇三臨時祭祈雨条に「丹生川上社。貴布称社各加ニ黒毛馬一疋。自余社加ニ麻布一段。其霧雨不止祭料亦同。但馬用白毛。」とあり、祈雨だけでなく止雨祭にも生馬を奉納していたことを知ることができ、すなわち祈雨、止雨の祭祀に関しては生馬を奉納していた史実をここに見ることができる。また「統日本紀」天平三年（731年）十二月乙未条に「神馬は河の精なり」という記事があり、従って前出の資料との比較から、神馬とする馬と犧牲獸としての牛とは性格が異なるものと思われ、故に水神祭祀は漢神信仰と無関係ではないかと思われる。すなわちここで石田英一郎

氏の論考を借りれば「ユーラシア大陸の全土にあまねく分布する水神と牛馬との密接な結合なるものか、もし農耕社会の豊饒儀礼に占めた牛の中心的役割にはじまり、後に馬がこれらの農耕地域に進出してくるようになって、あるいは牛に替り、あるいは牛となるんで、河海湖沼の靈怪ともなれば、また水神への供犧獸ともなって」その形代として土馬を供えるようになったのではないかと思われる。

#### ＜祈雨・止雨の祭紀＞

『延喜式』(967年)臨時祭「羅城御廻馬八匹、祈雨黒毛馬一匹」同神祇三臨時祭祈雨条「貴布称社各加黒毛馬一疋。自余社加庸布一段。其霖雨不止祭料亦同。但馬用白馬。」とあり祈雨の祭紀に関して黒毛馬を、止雨に関しては白毛馬を、用いたことをうかがい知ることができるが、このように「奈良平安時代に降雨、止雨に馬を奉獻することしばしばであったのは六国史に多くみえている」らしい。<sup>註28</sup>しかしこの「止雨」に対しては白馬をという概念は時期が降ると変容する<sup>註29</sup>らしく、それは『西宮記』(臨時七)にその記事を見る能够である。それによるとはじめて祈雨に黒馬、止雨に赤毛の馬が用いられるようになったことを記している。この文献にみる白馬から赤馬への転換は平安中期以後のことであるが、地方ではそれを覗くことを知り得る資料も出土している。それは静岡県の伊場遺跡出土の朱塗りの絵馬でこれは奈良時代の遺物である。<sup>註30</sup>

以上見てきたように、祈雨、止雨に関する祭紀に黒馬、白馬を用いる祭法が国家祭祀の中に取り入れられていたのは知ることができる。しかしそれ以前の古墳時代後期～奈良時代までの地方での祭紀はいかなるものであったろうか。それについては前掲した『日本書紀』『類聚三代格』『肥前國風土記』に見ることができるよう、祈雨に際しては牛馬を殺したり、漢神の応和に再しては牛を殺したり、或はそれぞれに形代をもちいたりと様々な祭紀の形態があったのではないだろうか。

また西沢、別所遺跡から東へ200～300m隔てた谷間に池ノ奥遺跡、窯跡群があり、<sup>註31</sup>その近くの3号土壙上面から、赤色塗彩された土師質の土馬と須恵質の土馬が各1点が出土しており、土師質の土馬は伴出遺物から安来市高広遺跡の編年に見るところのⅡB期に相当し、これは同じく高広編年の年代推定に負うところの7世紀中葉に比定できるものである。私見では、この土馬を須恵器を焼く場合の止雨の祭紀に用いた可能性があると考えているのであるが、白色の馬から赤色への転換が平安時代中頃以降であり、発掘調査でも伊場遺跡の奈良時代の赤色塗彩した絵馬があるだけで、当遺跡の例はそれより1世紀も古い。従って赤馬と止雨祭とを短絡的に結びつけることは不可能であろうが、もし関連があるとすれば須恵器の窯入れの時の祭紀の形態との係わりを含めて考えて見る

必要がある。

#### ＜雄、雌の土馬とその祭祀＞

雄、雌を使い分けた祭祀はいかなることが考えられようか。祈雨、止雨に用いられたとするなら、水堂の怒りを鎮め、又は風を結ぶ為、雌馬の方が適していると思われる。また水野正好氏によると『古語拾遺』に「甚しい蝗害を鎮め苗葉のたち枯れを解すために溝口に牛突を供之男茎形を置く。」と見えている。また、蝗害の根源は御歳神の怒りにありと記してあることから、蝗害は崇り神の所業であると説いておられる。この男茎形を置くことに注意するなら、蝗害の災厄すなわち崇り神の怒りから免れるため男茎形の変わりに雄の馬や使用したということも考えられるかもしれない。

また別の考え方では、祈雨、止雨から端を発するのであるが、雨乞い日乞いの行事或は祭祀は、古代人にとって生命に係わる一大事であったと思われる。かれらの生活の糧は自然条件に左右され、故に早天が続いたり長雨が続いたら途端に収穫に影響してくる。従って、雨乞い日乞いの祭祀に用いられた土馬は、五穀豊穣を祈る祭へと発展し、両性が祭られるようになったのではないか。岡山県のある地方では、正月田の神を祭る際、2匹の雄・雌を区別した薦馬を使用する習俗が現在も続いている、その祖型を西沢遺跡の雌雄の土馬に求めることは不可能であろうか。また『出雲國風土記』に「大根島に牧あり」という記事があり、それによると馬の放牧を知ることができるが、なんらかの土馬を用いた祭祀がその牧に関連して行なわれた可能性も考えられるかもしれない。

以上今のところ考えられる4説を述べてみたが、性別をつけた土馬の出土が少なく史料等がないので仮説として述べるしかなく、従って多くを語ることはできない。しかし大井地区は窯跡が多數あり、まだ調査された窯は1箇所（3窯）しかなく、これから調査如何では、まだまだ性別をつけた土馬の出土もあるものと思われる。また表採された土馬も多いと聞くので、これから資料や調査の増加によって、性別をつけた土馬の出土状況や祭祀形態の一端が窺うかも知れない。この「出雲型の土馬」についてはこの大井古窯跡群が出雲地方の生産地であったと思われる所以、これから以後様々な遺跡で出土することを期待することができる。

#### 小 緒

鷹沢、別所遺跡ではおびただしい量の土馬が出土しており、また須恵質の土鉢や手づくり土器も出土している。これは鷹沢、別所遺跡の性格を考える上で重要な指針となる。すなわち多量の土馬の他に多量の須恵器の出土は、近くに窯跡があることから、窯跡となんらかの関連を持った集団の集落であることを意味し、また土馬については、それら